

多賀城市文化財調査報告書第76集

# 市川橋遺跡

—第45次調査報告書—

平成17年3月

多賀城市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、多賀城市道路課が担当する市道水の入線改良工事及び同下水道課が担当する平成16年度公共下水道雨水工事（館前－1－2工区）に伴い実施した市川橋遺跡第45次調査の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は第1次調査からの連番である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系にかわり世界測地系に従うことになったが、本調査で使用した座標値は従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いて設定している。調査区の基準線については、X=−189,200.000、Y=13,850.000（南北・東西大路交差点付近）の交点を東西南北の原点としている。
- 4 挿図中の高さは、標高地を示している。
- 5 土色の記述は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参照した。
- 6 本書の執筆はI～III、IV-1-（2）、IV-2、Vを鈴木孝行、IV-1-（1）を相澤正信、VIIを廣瀬真理子が執筆し、VI-1は東北大学大学院理学研究科附属植物園大山幹成氏、VI-2を古環境研究所に依頼し、編集は鈴木が担当した。また、資料整理に際しては臨時職員遠藤友美、中村千恵子、村上和恵、横山佳織、小川菜々子の協力を得た。
- 7 調査に関する諸記録および出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 目 次

I	遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1
II	調査方法と経過	2
III	調査成果	7
IV	考 察	42
V	ま と め	44
VI	自然科学分析	46
VII	市川橋遺跡第45次出土木簡	

## 調査要項

- 1 遺 跡 名 市川橋遺跡（宮城県遺跡番号18008）
- 2 所 在 地 多賀城市市川字館前・浮島字矢中
- 3 調 査 面 積 1180m<sup>2</sup>
- 4 調 査 期 間 平成16年5月31日～9月22日
- 5 調 査 主 体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男（～平成16年9月）  
教育長 菊地昭吾（平成16年10月～）
- 6 調 査 担 当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 佐藤義輝
- 7 調 査 員 鈴木孝行 村松稔 相澤正信 廣瀬真理子
- 8 調査協力者 尾野善祐（京都国立博物館） 柴垣勇夫（静岡大学） 鈴木三男 大山幹成（東北大学理学研究科附属植物園） 村田晃一（宮城県教育委員会） 平川南（国立歴史民俗博物館）
- 9 調査参加者 赤間かつ子 浅野喜久男 芦野しづ子 遠藤一代 大友良子 大場勝善  
大山貞子 岡本典子 小野玉乃 小野寺恵子 小幡武 後藤恵子 小松まり  
今野和子 塩井一征 鈴木寿二 武山あや子 田中裕子 南城美岐子  
平山節子 藤澤拓司 藤田恵子 宮川ハルミ 宮下喜代平 渡辺ゆき子

## 凡　　例

本書中で使用する遺構略称、遺物分類については、以下のとおりである。

### 1. 遺構略称

S B : 建物跡 S D : 溝跡 S K : 土壙 S X : 道路跡、水田跡、性格不明遺構

### 2. 遺物分類

#### 1) 土師器杯

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

B I 類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

B II 類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

B III 類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

B IV 類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

B V 類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I ・ B II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものを a、静止糸切りによるものを b、回転糸切り（糸切り）によるものを c として細分する。

#### 2) 土師器甕

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

#### 3) 須恵器杯

I 類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II 類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III 類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV 類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V 類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I ・ II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものを a、静止糸切りによるものを b、回転糸切り（糸切り）によるものを c として細分する。

#### 4) 瓦の分類

「多賀城跡 政庁跡 図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所1980）、「多賀城跡 政庁跡 本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所1982）の分類基準に従った。

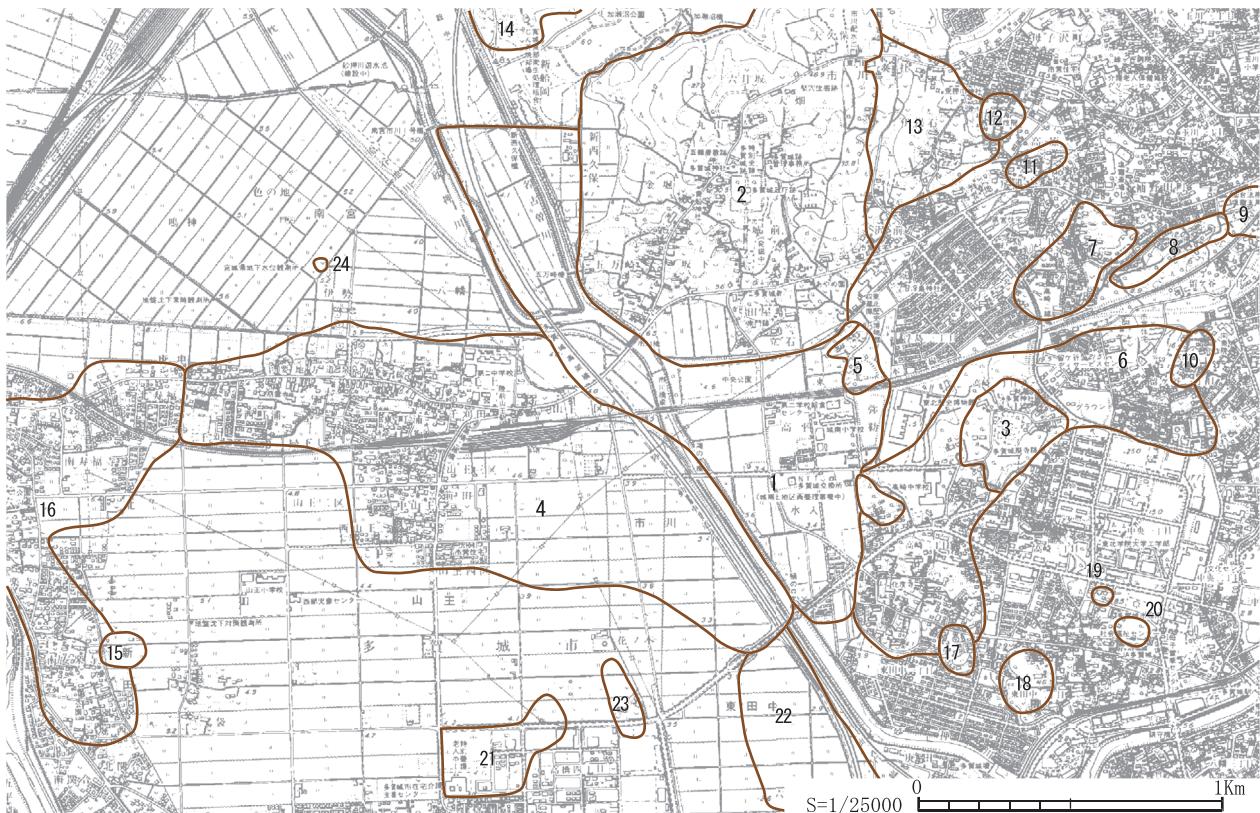
3. 本文中で記載する「灰白色火山灰」については、その起源を宮城県北西部に求める説（山田・庄子：1980）と十和田 a 火山灰と同一とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、近年は後者の説が有力である。この火山灰の降下年代については、年輪年代測定で907年とされた秋田県払田柵跡外郭線 C 期角材列存続期間中に降灰し、承平 4 年（934）閏正月 15 日に消失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える立場（多賀城跡調査研究所1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、10世紀前葉とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、本書では考古学的な見解を重視し前者に従った。

# I 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

## 1. 遺跡の位置と地理的環境

多賀城市は、仙台市の中心部から北東約10kmの位置にあたる。本遺跡は、市西半部に位置し、特別史跡多賀城跡の西側から南側にかけて広がる東西約1.4km、南北約1.6km、総面積約703,000m<sup>2</sup>におよぶ広大な遺跡である。遺跡の西側には三陸自動車道が南北に縦貫している。

本市の地形は、利府町の丘陵地帯に源を発する砂押川によって大きく二分されている。東半部は、北部が松島丘陵と呼ばれる標高40～100mの低丘陵であり、南側に向かって枝葉のように伸びている。南部は、海岸線に平行して多数の浜堤列が発達している。一方、西半部は宮城野海岸平野と呼ばれる沖積平野が広がっており、自然堤防、旧河道、後背湿地などが複雑に分布している。本遺跡は、この沖積平野の東端部にあり、丘陵部と接している。おおよそ平坦な地形をしているが、古代には微高地、湿地、旧河道が入り組んだ複雑な地形をしていたことが判明している。これまで大部分が水田として利用されていたが、近年の宅地造成や道路整備などにより、その景観は急速に変わりつつある。

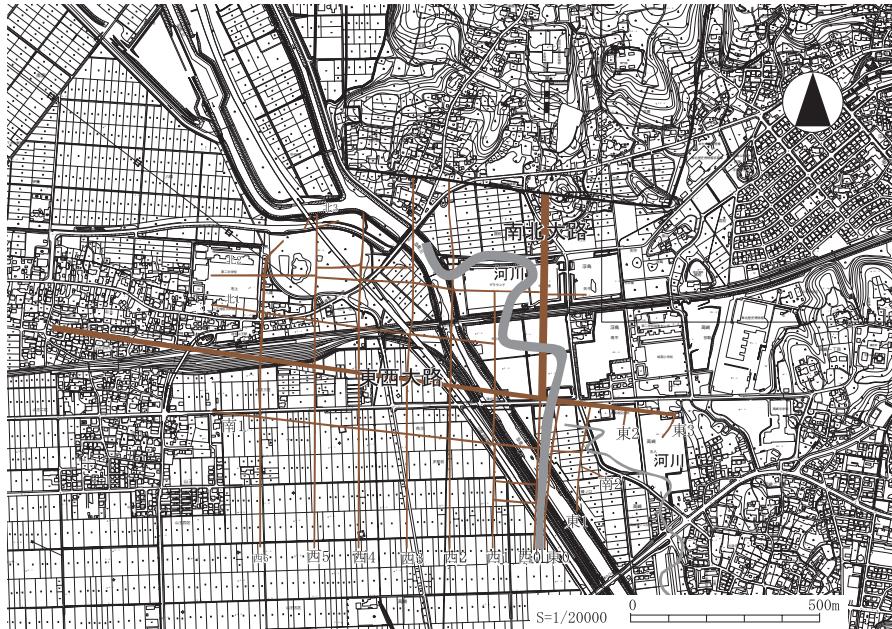


番号	遺跡名	時代
1	市川橋遺跡	縄文～平安
2	特別史跡多賀城跡	奈良・平安
3	多賀城廃寺跡	奈良・平安
4	山王遺跡	古墳・奈良・平安
5	館前遺跡	古代・中世
6	高崎遺跡	奈良・平安・中世
7	小沢原遺跡	古代・中世
8	野田遺跡	古代・中世

番号	遺跡名	時代
9	矢作ヶ館跡	古代・中世
10	留ヶ谷遺跡	中世
11	高原遺跡	古代・中世
12	法性院遺跡	古代
13	西沢遺跡	古代・中世
14	加瀬遺跡群	縄文・古代
15	安楽寺遺跡	古代末・中世
16	新田遺跡	古墳～中世

番号	遺跡名	時代
17	東田中窪前遺跡	古代・中世
18	志引遺跡	古代・中世
19	稻荷殿古墳	古墳後
20	桜井館跡	中世
21	大日南遺跡	平安・中世
22	六貫田遺跡	古代
23	大日北遺跡	古代・近世
24	内館跡	中世

第1図 市川橋遺跡と周辺の遺跡



第2図 城外の方格地割り

## 2. 歴史的環境

本遺跡は、旧石器時代から平安時代に至る複合遺跡として登録されているが、奈良・平安時代に陸奥国府、奈良時代には鎮守府も併せ置かれた多賀城と密接に関わる遺跡として知られている。

これまで本市教育委員会をはじめ、多賀城跡調査研究所、宮城県教育委員会によって発掘調査が行われ、多くの成果が挙がっている。多賀城跡南面では道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、区画溝など多数の遺構が検出されている。これらは、多賀城政庁中軸線上に造られた南北大路と多賀城外郭南辺築地に平行する東西大路を基準として造られていたことが判明している。この方格地割り内では河川跡も検出しておらず、多量の土器類の他、人面墨書き土器や木製形代といった祭祀具が出土し、まじないの場であったことも判明している（宮城県教育委員会2001、多賀城市教育委員会2004）。さらに多賀城外郭西門跡の約150m南西に位置する中谷地地区では、9世紀から10世紀前半にかけての土葬墓が発見され、墓域の存在も明らかになってきている（宮城県教育委員会2003）。

調査地周辺についてみると、東約350mには四面庇付建物を中心とする建物群が発見された館前遺跡があり、南側の大臣宮（おとどのみや）と呼ばれる地区では、一辺が1.3m前後の柱穴をもつ建物跡が発見されている。さらに、西約50mの地点では南北大路が確認され、北約200mには多賀城南門跡が確認されている。

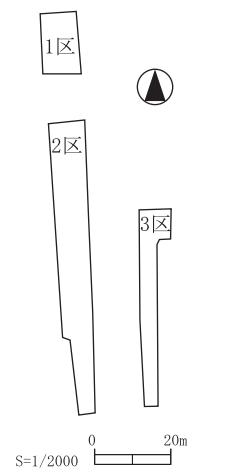
## II 調査方法と経過

**調査経過** 本調査は、多賀城市道路課が行う平成16年度市道水の入線道路改良工事及び同下水道課が行う平成16年度公共下水道雨水工事（館前-1-2工区）に伴うものである。平成16年1月に埋蔵文化財のかかわりについて協議が行われ、多賀城外郭南辺から南へ200～300mに位置していることや、中央公園の確認調査の際に対象地から西約50mの地点で南北大路が発見されていることなどから事前調査が必要と判断された。平成16年5月10日に発掘調査依頼が提出され、5月31日より調査を実施するに至った。調査区は

北西のトレーニングを1区、その南側を2区、現道の東側を3区とした（第3図）。

1区・2区から調査を開始した。道路跡、掘立柱建物跡、溝跡、水田跡などを検出し、道路側溝からは木簡などが出土した。8月6日に全景写真を撮影し、調査が終了した。3区については、桜の木を移植してからの調査であったため7月15日から調査を開始し、遺構面が3時期あったものの、9月22日には調査が終了した。

**調査方法** 本調査は、平成9～14年にかけて行われた市川橋遺跡第23～29次調査の整合性をもたせるため、遺構の測量には市川橋遺跡城南地区の調査に使用した原点（X=−189,200.000、Y=13,850.000）を用いた。調査に際しては、この原点を通る東西・南北方向の直線をそれぞれ東西・南北の基準線とし、原点から1m離れるごとに、東西方向はE1・E2……、W1・W2……と表示し、南北方



S=1/2000

0

20m

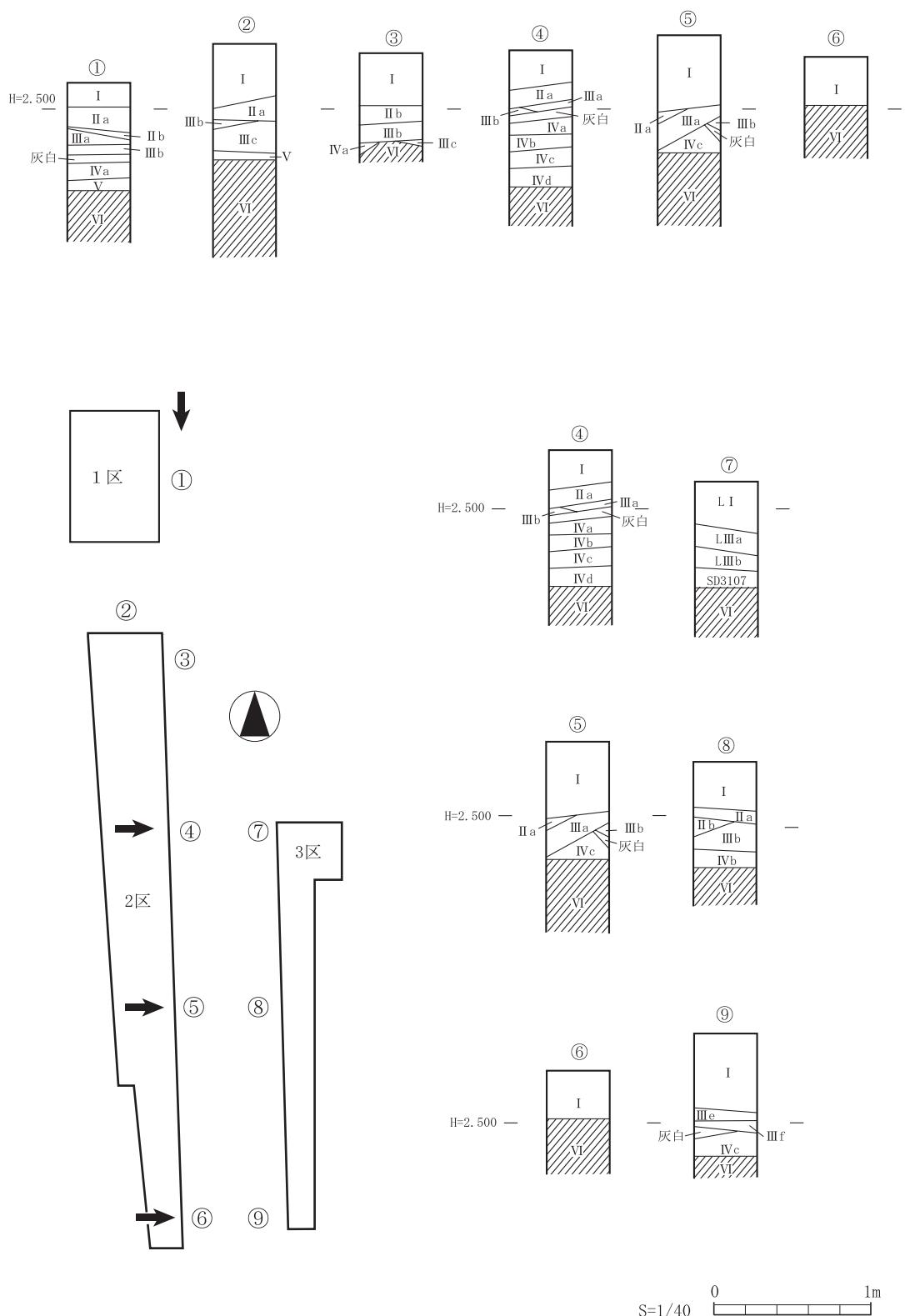
3区

2区

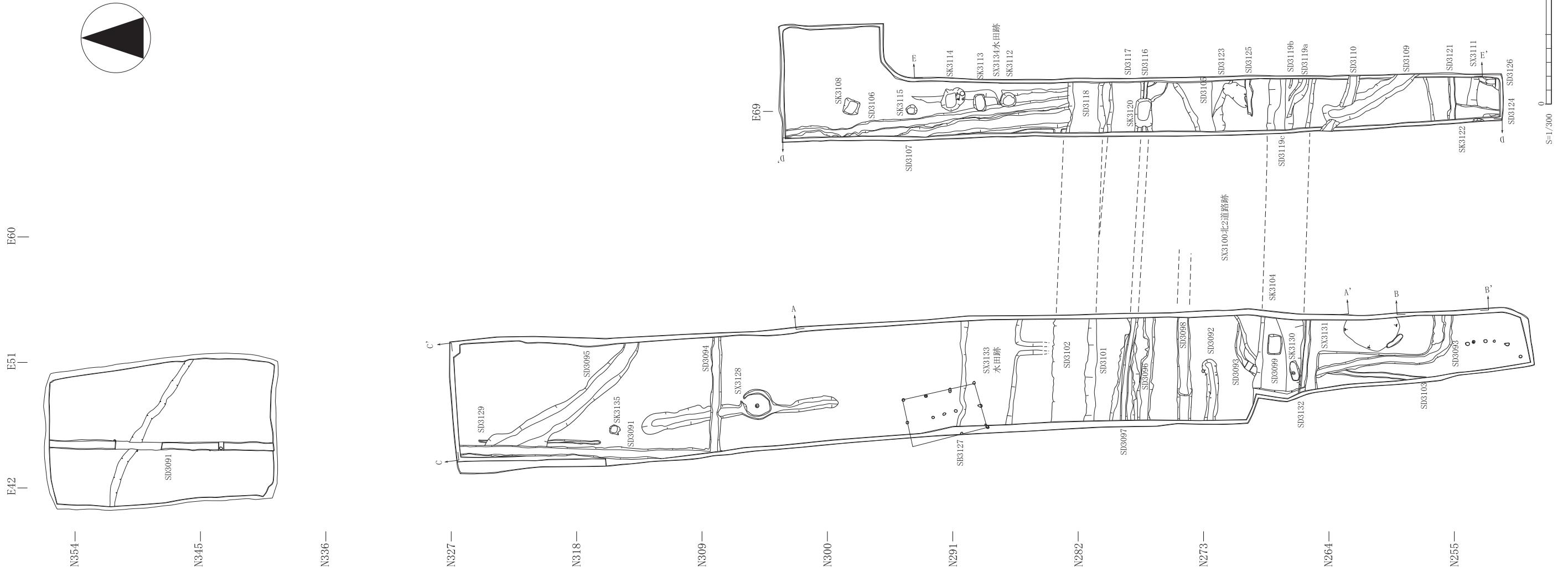
1区



第4図 調査区の位置



第5図 調査区層序模式図



第6図 市川橋遺跡第45次調査区遺構全体図

### III 調査成果

#### 1. 層序（第5図）

調査区には約1.3m盛土されており、その下層において大きく6層の基本土層が確認できた。調査区内の堆積状況・地点は第5図に模式的に示した。以下、各層の特徴を説明する。

第I層 現代の水田耕作土で調査区全域に分布し、層厚は20~40cmである。

第II層 調査区の北半部で主に確認でき、1・2区においては黒色粘質土のⅡa層、3区においては黒褐色粘質土のⅡb層が分布する。層厚5~10cm。

第III層 調査区南端部を除くほぼ全域で確認した灰白色火山灰降下以降の層である。1・2区ではⅢa~Ⅲc層、3区ではⅢd~f層が分布する。層厚10~20cm。なお、細分された層の上下関係は、a→c、d→fであり、a~cとd~fの対応関係は不明である。

第IV層 調査区南端部を除くほぼ全域で確認した。灰白色火山灰降下以前の層である。1・2区においてはIVa~d層、3区ではIVc・d層が確認できた。この層において疑似畦畔を確認している。層厚20~40cm。

第V層 2区及び3区の第IV層の水田耕作が及ばない場所でのみ確認した黒色粘質土である。層厚10cm。

第VI層 古代の遺構の最終遺構検出面である。黄褐色粘質土及び砂が主体の層である。この層をみるとかぎり、地形は南から北へ傾斜している。

#### 2. 発見した遺構

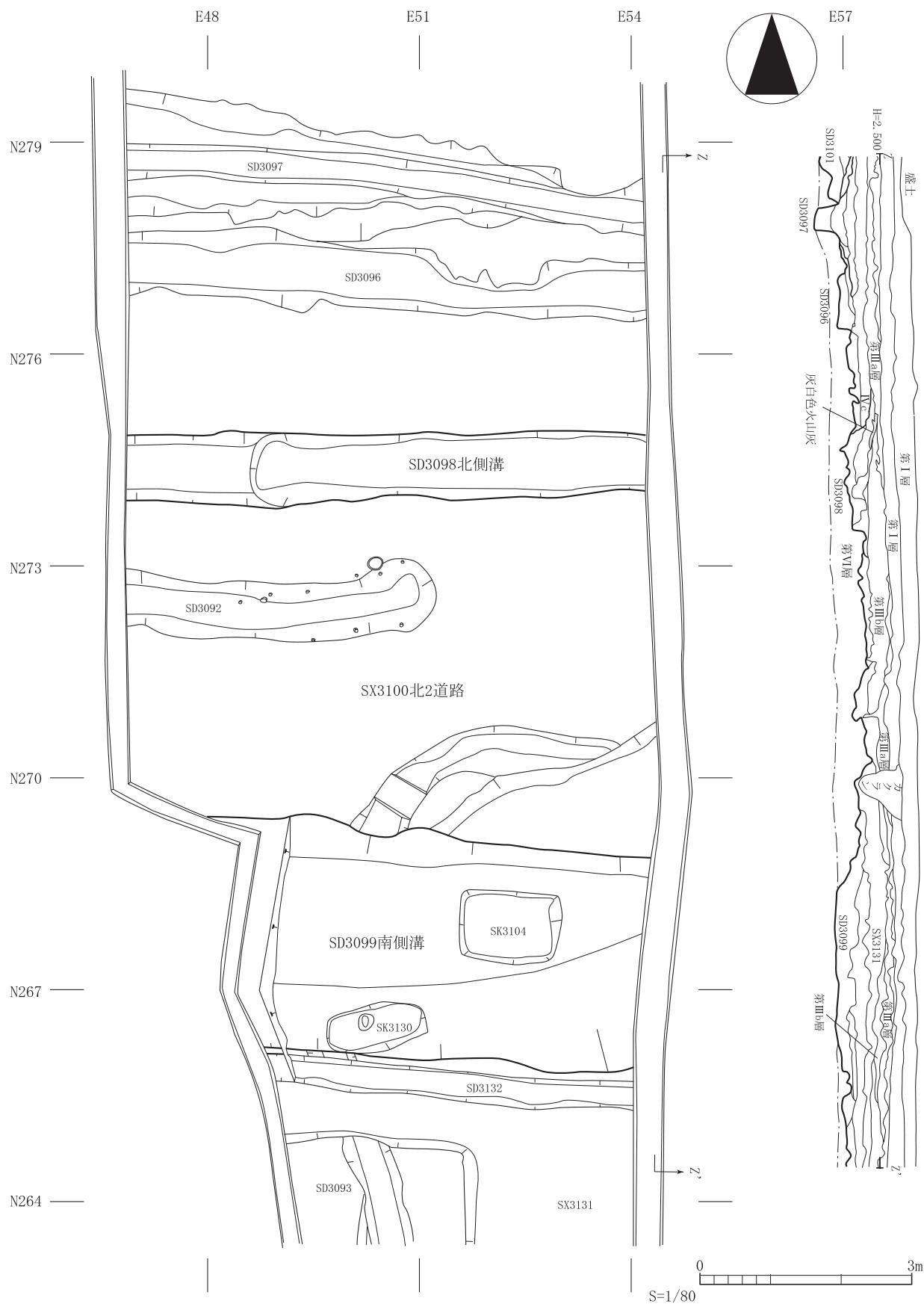
##### SX3100道路跡（第7・21図）

2区南半部、3区南半部の第IV層及び第VI層上面で発見した南北に素掘りの側溝を伴う東西道路跡である。2区では南北両側溝を確認したが、3区ではSD3105溝跡に壊されているため、南側溝のみの発見である。3区で発見した南側溝において3時期の変遷を確認した。SD3105・3092・3093、SX3111・3131と重複関係があり、これらよりも古い。規模は両側溝を検出した2区でみると、路幅は側溝心々間で6.85~7.18m、路面幅で4.45~5.85mである。方向は西で約1度北に偏している。

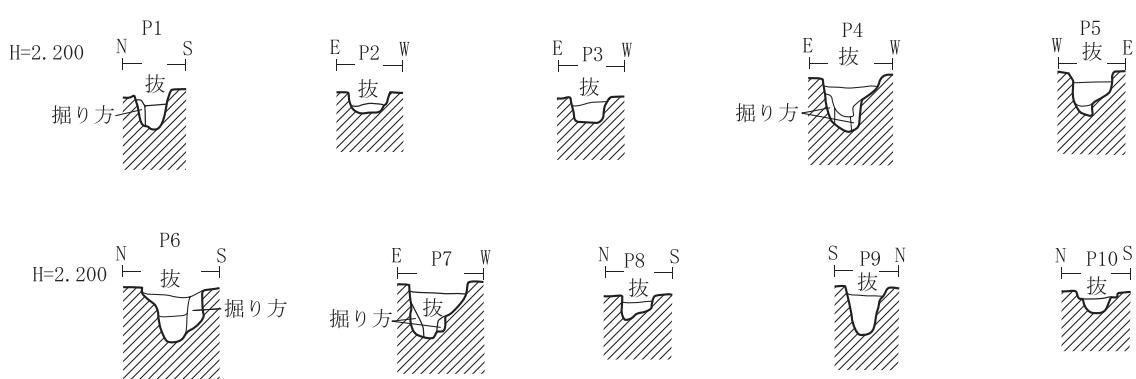
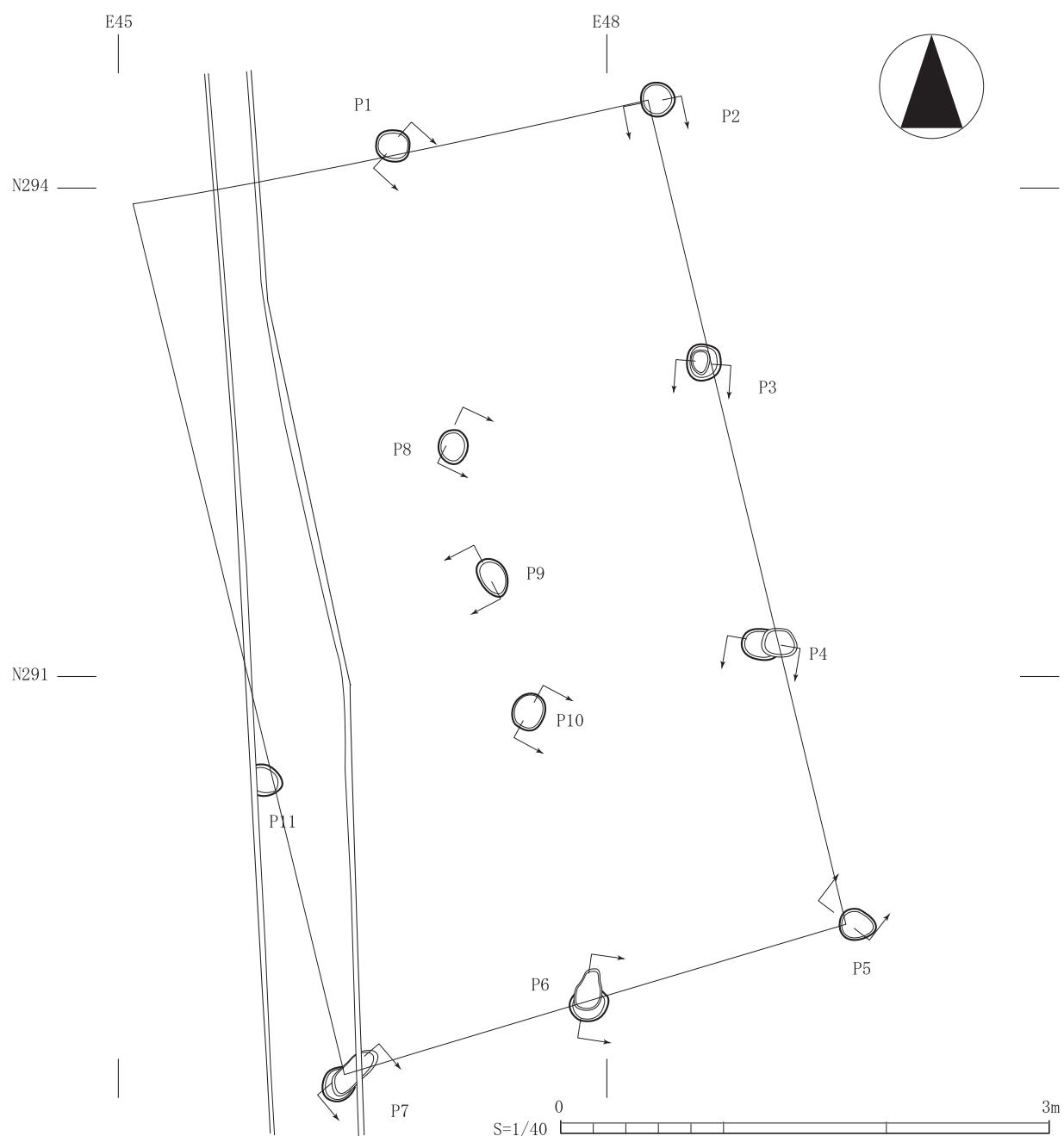
SD3098北側溝 2区のみで検出した。規模は上幅0.8~1.0m、下幅0.5~0.7m、深さ30cmである。断面形は皿状を呈する。埋土は最上層が灰白色火山灰であり、その下層は黒褐色粘質土である。遺物は、土師器杯、瓦が出土している。

SD3099南側溝 2区で検出した南側溝である。規模は上幅2.75~3.25m、下幅1.10~1.82m、深さ57cmであり、断面形は半円状である。埋土は3層に分けられ、1層が地山ブロック・粗砂を含む黒褐色の人為的埋土であり、2層が黒褐色、3層が黒色の自然堆積土である。遺物は、1層から土師器甕A・B類、須恵器杯Ⅲ類、丸瓦ⅡB類、馬形、挽物高台付皿、用途不明木製品、2層から土師器杯B類・甕（A・B類）、須恵器杯Ⅲ類・高台付杯・甕、第120号木簡、3層から土師器甕A類、須恵器杯、重弧文軒平瓦、平瓦ID類が出土している。

SD3119南側溝 3区において発見した南側溝である。3時期の変遷（a→c期）を確認した。規模はa期が上幅0.7m以上、下幅0.45cm、深さ40cm、b期が上幅0.6m以上、深さ40cm、c期が上幅1.90m、下幅0.42~0.85m、深さ55cmである。埋土はa期上層が多量の地山ブロックを含む黒褐色の人為的埋土、下



第7図 2区SX3100北2道路跡平面図・断面図



第8図 SB3127平面図・断面図

層が黒褐色粘質土の自然堆積土である。b期埋土は黒褐色の自然堆積土である。c期は2層に分けられ、上層が暗オリーブ褐色粘質土、下層が黒褐色の自然堆積土である。遺物は、a期から土師器甕、平瓦ⅡB類、c期から須恵器杯Ⅲ類、籠、刀形が出土している。

#### SB3127建物跡（第14・20図）

2区中央部の第IV層上面で発見した桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。南北棟通り下柱穴間に3基の柱穴を確認している。SX3133水田跡と重複関係があり、それよりも新しい。方向は東側柱列でみると、北で約16度西に偏している。桁行については、東側柱列で総長約5.2m、柱間は南より約1.8m、約1.8m、約1.6mである。梁行きについては、南側柱列で総長約3.4m、柱間は西より約1.7m、約1.7mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は一辺30～40cm、深さ20cmである。埋土は灰白色火山灰ブロックを含むオリーブ黒色粘質土である。柱はすべて抜き取られている。遺物は、抜取り穴埋土より須恵系土器が出土している。

#### SD3091溝跡（第18・19図）

1区から2区北半部の第VI層上面で発見した南北溝跡である。約35m検出した。SD3094・3095と重複関係があり、それよりも古い。方向は北で約1度東に偏している。規模は上幅0.62～0.92m、下幅0.36～0.60m、深さ28cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は1層が黒色粘質土、2層が地山粒を含む黒色粘質土である。遺物は出土していない。

#### SD3092溝跡（第7・21図）

2区南半部の第IV層上面で発見した東西溝跡である。SX3100と重複関係があり、それよりも新しい。方向は東で約2度北に偏している。規模は上幅0.80m、下幅0.48m、深さ28cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は起伏に富んでいる。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は、土師器杯B類、須恵器杯BV類、須恵系土器高台付杯が出土している。

#### SD3093溝跡（第7・10・21・22図）

2区南半部の第IV層上面で発見したコの字状に巡る溝跡である。SD3099、SK3130、SX3131と重複関係があり、それよりも新しい。方向は南北方向でみると、北で約10度西に偏する。規模は、上幅0.50～0.96m、下幅0.12～0.50m、深さ17cmである。断面形は皿状を呈しており、底面は起伏に富んでいる。埋土は多量の粗砂を含む黒褐色砂質土である。遺物は、土師器杯BII類、土師器甕B類、須恵器杯Ⅲ類、土器片製円盤が出土している。

#### SD3094溝跡（第10・19図）

2区北半部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。SD3091と重複関係があり、それよりも古い。方向は発掘基準線とほぼ一致している。規模は、上幅0.76m、下幅0.56m、深さ17cmである。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。埋土は3層に分けられ、1層が多量の地山ブロックを含む黒色粘質土、2層が黒色粘土、3層が地山ブロックを少量含む黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

#### SD3095溝跡（第10・18図）

2区北半部の第VI層上面で発見した南東から北西に延びる溝跡である。SD3091と重複関係があり、それよりも古い。方向は西で約42度北に偏している。規模は上幅1.16～1.96m、下幅0.68～1.00m、深さ21cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分けられ、1層が黒色粘土ブロックを多量に含むオリーブ褐色粘質土、2層が下方に砂を含む暗灰色砂質土である。土師器杯BV類

が1点出土している。

#### SD3096溝跡（第7・21図）

2区南半部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。SD3097・3101と重複関係があり、それよりも古い。方向は西で約4度北に偏している。規模は、上幅0.44～1.06m、下幅0.26～0.70m、深さ25cmである。断面形は逆台形状を呈しており、底面はほぼ平坦である。埋土は地山・黒色粘土ブロックを含むオリーブ褐色粘質土である。遺物は、土師器杯A類が出土している。

#### SD3097溝跡（第7・21図）

2区中央部の第IVd層上面で発見した東西溝跡である。3区で発見したSD3116と一連のものと考えられる。SD3096・3101・3102と重複関係があり、それよりも新しい。方向は西で約7度北に偏している。規模は上幅1.02～1.76m、下幅0.36m、深さ42cmである。壁は下方が垂直に立ち上がり、上方が緩やかに開いて立ち上がる。埋土は3層に分けられ、1層が黒褐色粘質土、2層が暗灰黄色砂質土、3層が黒色粘質土である。遺物は出土していない。

#### SD3101溝跡（第10・21図）

2区中央部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。3区で発見したSD3117と一連のものと考えられる。SD3096・3097・3102と重複関係があり、SD3096・3097よりも古く、SD3102よりも新しい。方向は発掘基準線とほぼ一致している。規模は、上幅3.40～3.80m、下幅2.20m、深さ30cmである。断面形は幅の広い逆台形状である。埋土は2層に分けられ、1層が黒褐色砂質土、2層が少量の地山ブロックを含む黒褐色粘質土である。遺物は須恵器瓶・甕が出土している。

#### SD3102溝跡（第10・20図）

2区中央部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。3区で発見したSD3118と一連のものと考えられる。SD3097・3101と重複関係があり、それよりも古い。方向は西で約5度北に偏している。規模は、上幅2.50～2.90m、下幅2.00～2.30m、深さ32cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。埋土は2層に分けられ、1層が多量の地山ブロックを含む黒褐色粘質土の人為的埋土であり、2層がオリーブ黒色粘質土の自然堆積土である。遺物は2層から第121号木簡が出土している。

#### SD3105溝跡（第24・25図）

3区中央部の第III層上面で発見した東西溝跡である。SD3123と重複関係があり、それよりも新しい。方向は東で約10度北に偏している。規模は、上幅1.96～3.36m、下幅1.11～2.57m、深さ36cmである。断面形は浅い逆台形である。埋土は3層に分けられ、1層が黒褐色粘質土、2層が少量の砂粒を含む黒褐色粘質土、3層が地山粒を多く含む黒褐色粘質土であり、いずれも自然堆積土である。遺物は土師器杯・甕B類、須恵器杯Ⅲ類・甕・瓶、須恵系土器杯・高台付杯・皿、山茶椀小椀（第28図4）、平瓦ⅡB類、丸瓦ⅡB類が出土している。

#### SD3106溝跡（第9・23・24図）

3区北端部から中央部にかけての第IVe層上面で発見した南北溝跡である。約23m検出した。SD3107・3118、SK3112・3113と重複関係があり、SD3118、SK3112・3113より新しく、SD3107より古い。第III層には覆われる。規模は上幅0.86m、下幅0.51m、深さ23cmである。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色火山灰ブロック、地山ブロックを含む黒褐色粘質土である。遺物は、土師器杯B類・甕、須恵器杯I類が出土している。

#### **SD3107溝跡（第9・23・24図）**

3区北端部から中央部にかけての第IVe層上面で発見した溝跡である。3区中央部付近で東に屈曲する。SD3106と重複関係があり、それよりも新しい。方向は南北方向でみると、北で約7度西に偏している。規模は上幅0.50～1.05m、下幅0.20～0.80m、深さ30cmである。断面形は皿状を呈する。埋土は灰白色火山灰ブロックを含む褐灰色粘質土である。遺物は、土師器杯・甕B類、須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器杯、平瓦II B類が出土している。

#### **SD3109溝跡（第9・25・26図）**

3区南半部のSX3111上で発見した南北溝跡である。SD3110と重複関係があり、それよりも新しい。方向は北で約27度西に偏する。規模は上幅1.1～1.6m、下幅0.5～0.8m、深さ72cmである。断面形は逆台形であり、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、上層が灰白色火山灰ブロックを含む暗灰黄色粘質土、下層が灰白色火山灰ブロック・砂粒を含む暗灰黄色粘質土である。遺物は、土師器杯B類、須恵器甕、須恵系土器杯・高台付杯、平瓦IA・IIB類、丸瓦IIB類が出土している。

#### **SD3110溝跡（第25図）**

3区南半部のSX3111上で発見した東西溝跡である。SD3109と重複関係があり、それよりも古い。方向は西で約29度北に偏している。規模は、上幅0.9m、下幅0.5m、深さ42cmである。断面形は逆台形であり、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、1層が灰白色火山灰ブロックを含む暗灰黄色粘質土、2層が灰白色火山灰ブロックと砂粒を含む暗オリーブ褐色粘質土である。遺物は、土師器杯、須恵系土器杯・高台付皿が出土している。

#### **SD3116溝跡（第24図）**

3区中央部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。2区で発見したSD3097と一連のものと考えられる。SD3107・3117・3118、SK3120と重複関係があり、SD3117・3118より新しく、SD3107、SK3120よりも古い。方向は西で約2度北に偏している。規模は、上幅0.4～0.9m、下幅0.3m、深さ40cmである。断面形は逆台形状を呈しており、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分けられ、1層が黒褐色粘質土、2層が黄褐色砂質土である。遺物は、出土していない。

#### **SD3117溝跡（第24図）**

3区中央部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。2区で発見したSD3101と一連のものと考えられる。SD3106・3107・3116・3118、SK3120と重複関係があり、SD3118より新しく、SD3106・3107・3116、SK3120よりも古い。方向は西で約5度北に偏している。規模は、上幅2.1～2.5m、下幅1.7～2.1m、深さ30cmである。底面は若干の起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

#### **SD3118溝跡（第24図）**

3区中央部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。2区で発見したSD3102と一連のものと考えられる。SD3106・3107・3116・3117、SK3120と重複関係があり、それよりも古い。方向は西で約2度北に偏している。規模は、上幅2.7m、下幅1.7～2.1m、深さ32cmである。断面形は浅い逆台形を呈する。埋土は2層に分けられ、1層が多量の地山ブロックを含む黄褐色粘質土の人為的埋土であり、2層は植物遺存体を含む黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

#### **SD3126溝跡（第26図）**

3区南端部の第VI層上面で発見した南北溝跡である。SX3131と重複関係があり、それよりも古い。方向は北で約23度東に偏している。規模は、上幅0.78m以上、下幅0.3m、深さ12cmである。断面は逆台形を呈している。埋土は、多量の地山ブロックを含む黒色粘質土である。遺物は出土していない。

#### **SD3121溝跡（第26図）**

3区南端部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。SD3129・3124、SX3131と重複関係があり、SD3129よりも新しく、SD3124、SX3131よりも古い。方向は発掘基準線とほぼ一致している。規模は、上幅0.6m、下幅0.4m、深さ20cmである。埋土は2層に分けられ、1層は地山粒を含む黒褐色粘質土、2層が地山ブロックを多く含む黒色粘質土である。遺物は、砥石が出土している。

#### **SD3123溝跡（第25図）**

3区中央部の第VI層上面で発見した東西溝跡である。SD3105と重複関係があり、それよりも古い。方向は東で約23度南に偏している。規模は、上幅0.5m以上、深さ33cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は、地山ブロックを含む黒褐色粘質土である。遺物は、土師器杯B V類、須恵系土器杯が出土している。

#### **SD3124溝跡（第26図）**

3区南端部の第VI層上面で発見した南北溝跡である。SD3121、SX3131と重複関係があり、それよりも古い。方向は北で約8度東に偏している。規模は、上幅0.4～1.1m、下幅0.3～1.0m、深さ7cmである。遺物は出土していない。

#### **SK3104土壤（第7・10・21図）**

2区南半部のSD3099第3層上で発見した。平面形は方形であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長辺1.4m、短辺0.9m、深さ90cmである。埋土は地山ブロックを多量に含むオリーブ黒色粘質土であり、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は、円形曲物（第33図1）が出土している。

#### **SK3108土壤（第9・23図）**

3区北半部の第VI層上面で発見した。他の遺構との重複関係はない。平面形は不整方形である。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。規模は、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ32cmである。埋土は3層に分けられ、1層は地山粒を少量含む黒褐色粘質土、2層が少量の炭化物・地山粒を含む黒色粘質土、3層が多量の地山ブロックを含む黒褐色粘質土である。遺物は、用途不明の木製品（第33図2・3）、植物の種子が出土している。

#### **SK3112土壤（第9・24図）**

3区北半部の第V層上面で発見した。SD3106・3107と重複関係があり、それよりも古い。平面形は不整円形である。底面は概ね平坦であり、壁は急角度で立ち上がる。規模は、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ40cmである。埋土は3層に分けられ、1層が地山粒と少量の炭化物を含むオリーブ黒色粘質土、2層が黒褐色粘質土、3層が少量の炭化物・地山粒を含む黒色粘質土である。遺物は出土していない。

#### **SK3113土壤（第9・23図）**

3区北半部の第V層上面で発見した。SD3106・3107と重複関係があり、それよりも古い。平面形は不整橢円形である。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。規模は、長軸1.2m、短軸0.9m、

深さ52cmである。埋土は2層に分けられ、1層が砂をブロック状に含む黒色粘質土、2層がオリーブ黒色粘質土である。遺物は、土師器甕片が出土している。

#### SK3114土壤（第9・23図）

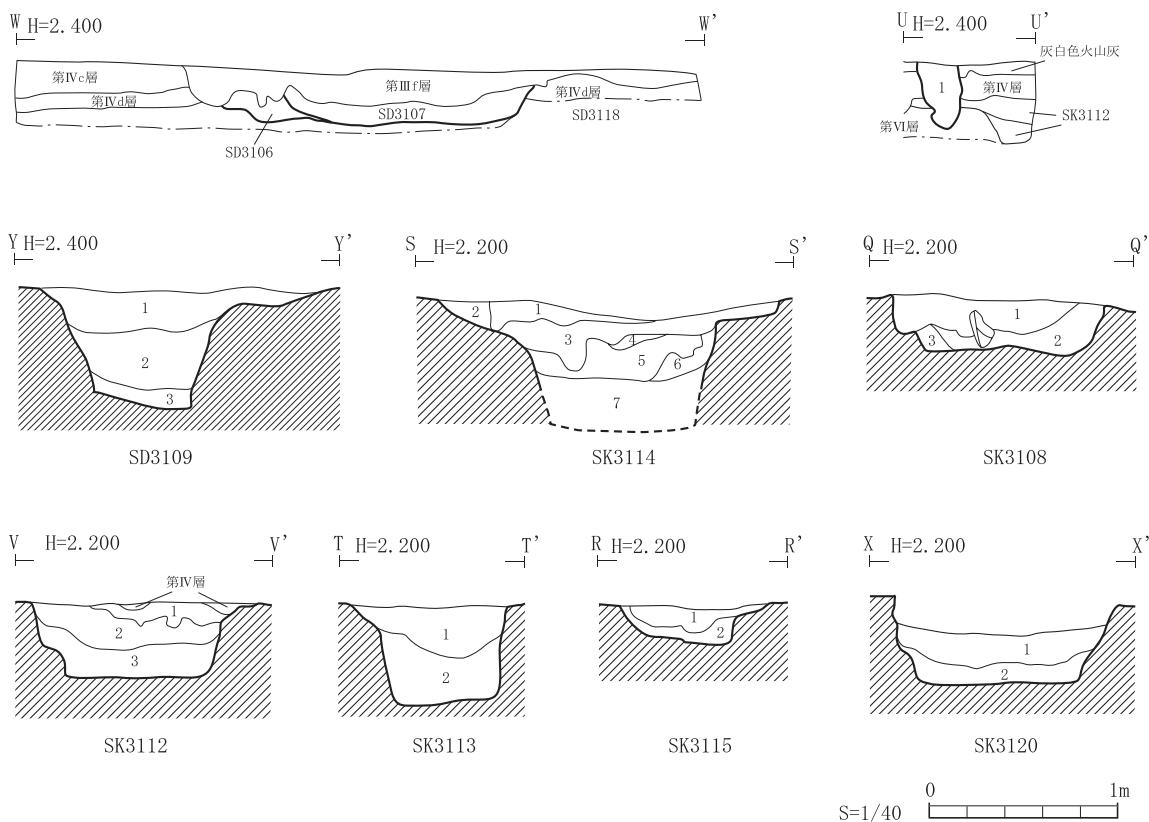
3区北半部の第V層上面で発見した。SD3106・3107と重複関係があり、それよりも古い。平面形は南北に長い不整橢円形である。規模は長軸1.9m、短軸1.6m、深さ70cmである。壁は東側では緩やかに立ち上がり、西側では急角度で立ち上がる。底面は概ね平坦である。埋土は3層に分けられ、1層が砂粒・地山ブロックを含む黒褐色粘質土、2層が少量の砂粒を含む黒褐色粘質土、3層が少量の炭化物・地山ブロックを含むオリーブ黒色粘質土である。遺物は、動物遺存体（ウマ）、円形曲物（第34図1）が出土している。

#### SK3115土壤（第9・23図）

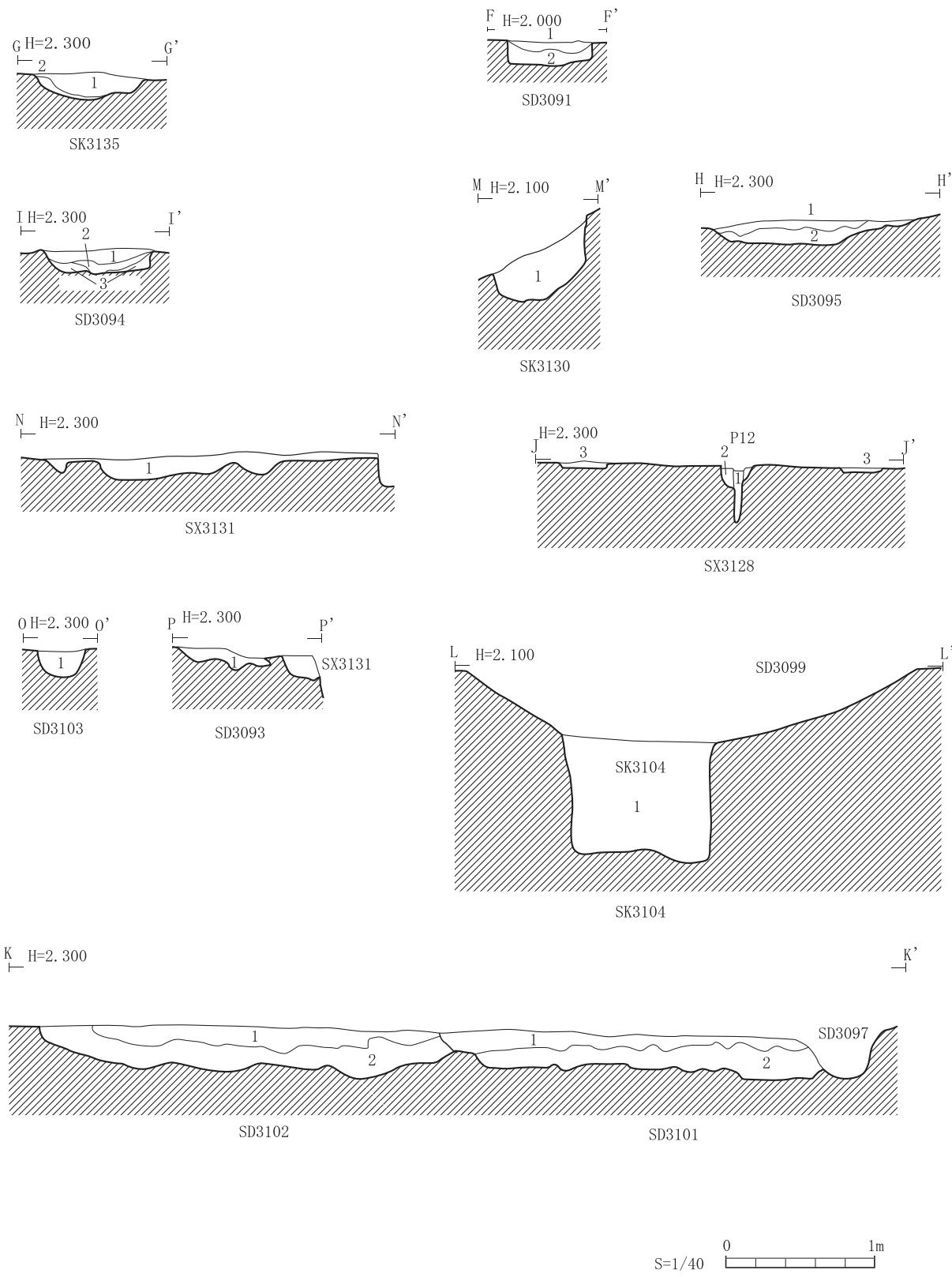
調査区北半部の第V層上面で発見した。他の遺構との重複関係はない。平面形は不整円形である。規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ22cmである。壁は急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分けられ、1層がオリーブ黒色粘質土、2層が炭化物、砂を含む黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

#### SK3120土壤（第9・24図）

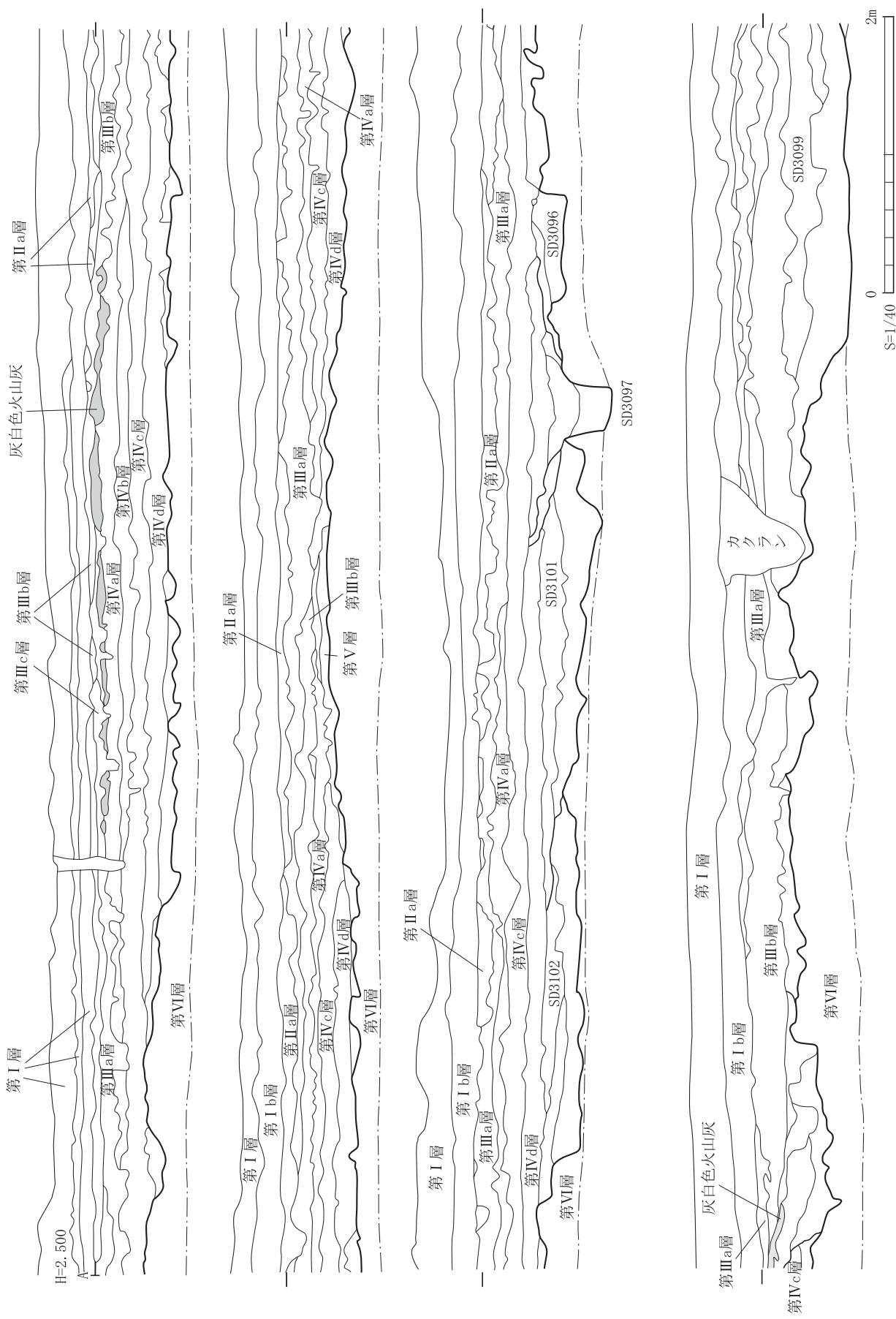
3区中央部の第VI層上面で発見した。SD3106・3107・3116・3117・3118と重複関係があり、SD3116・3117・3118よりも新しく、SD3106・3107よりも古い。平面形は橢円形である。規模は長軸2.1m、短軸1.2m、深さ42cmである。壁は急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分けられ、1層が多量の地山ブロックを含む黒色粘質の人為的埋土であり、2層が少量の植物遺存体を含む黒褐色粘質土である。遺物は、2層上面から銅製の鈴（第34図2）が出土している。



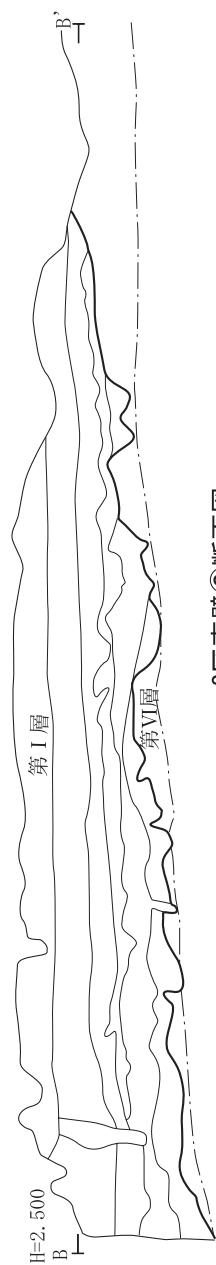
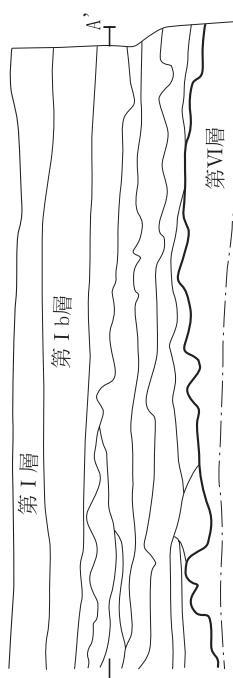
第9図 3区遺構断面図



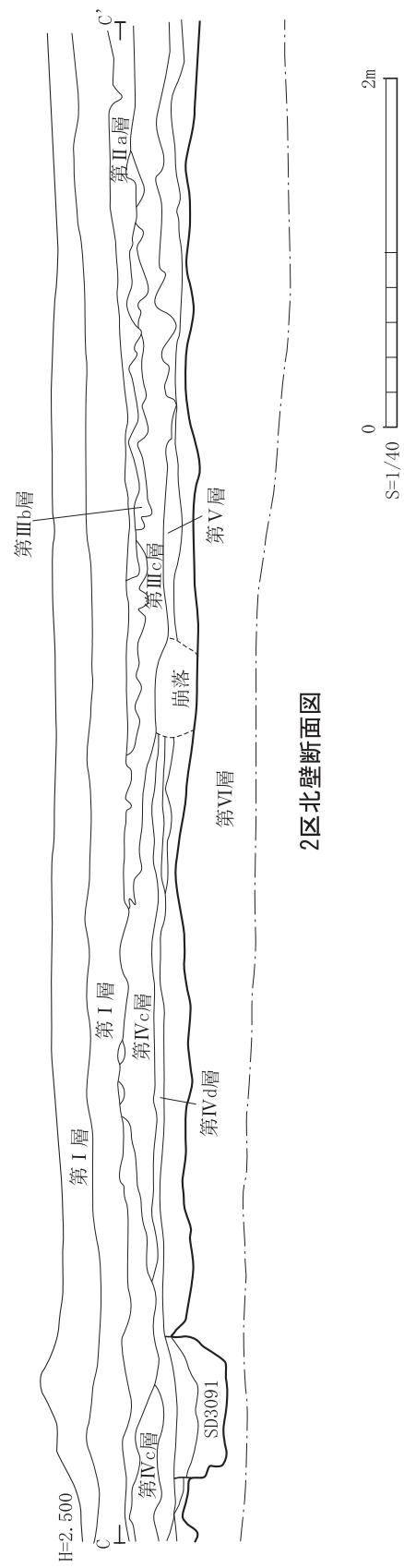
第10図 2区遺構断面図



第11図 2区東壁断面図①



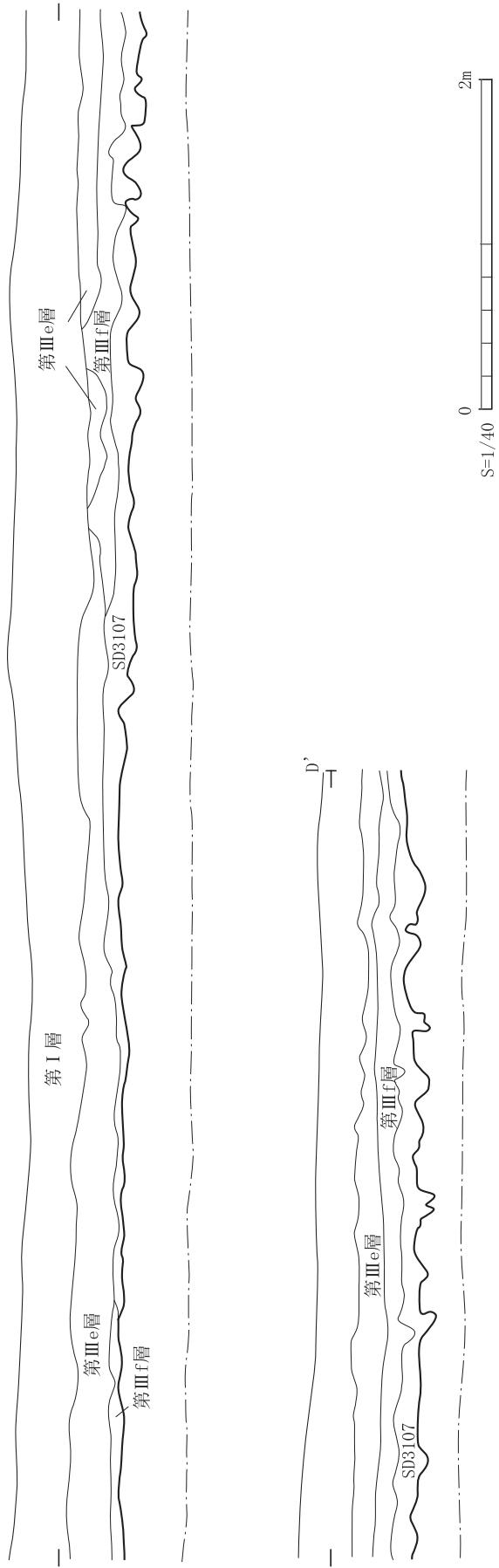
2区東壁②断面図



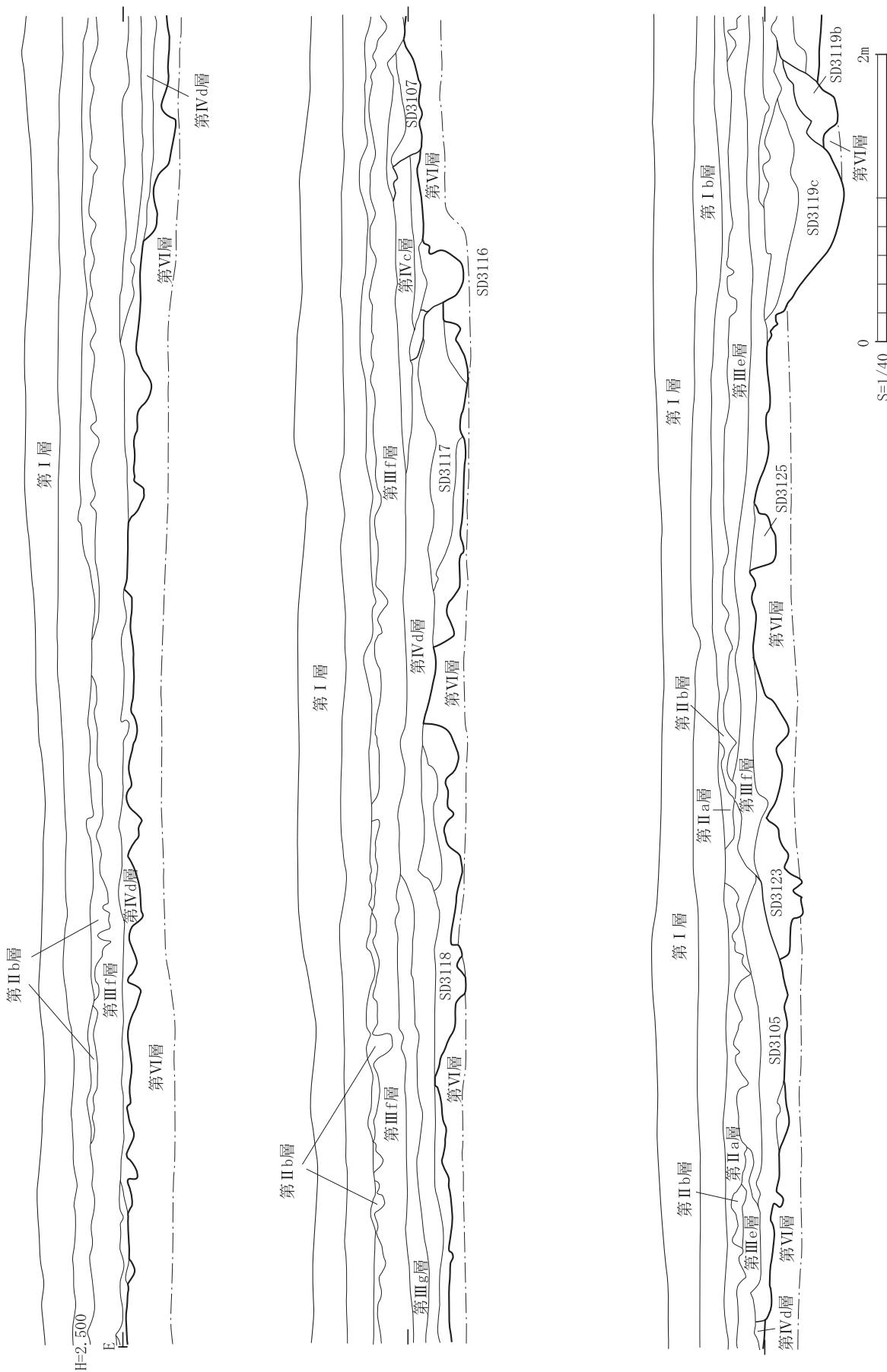
第12図 2区東壁②・北壁断面図



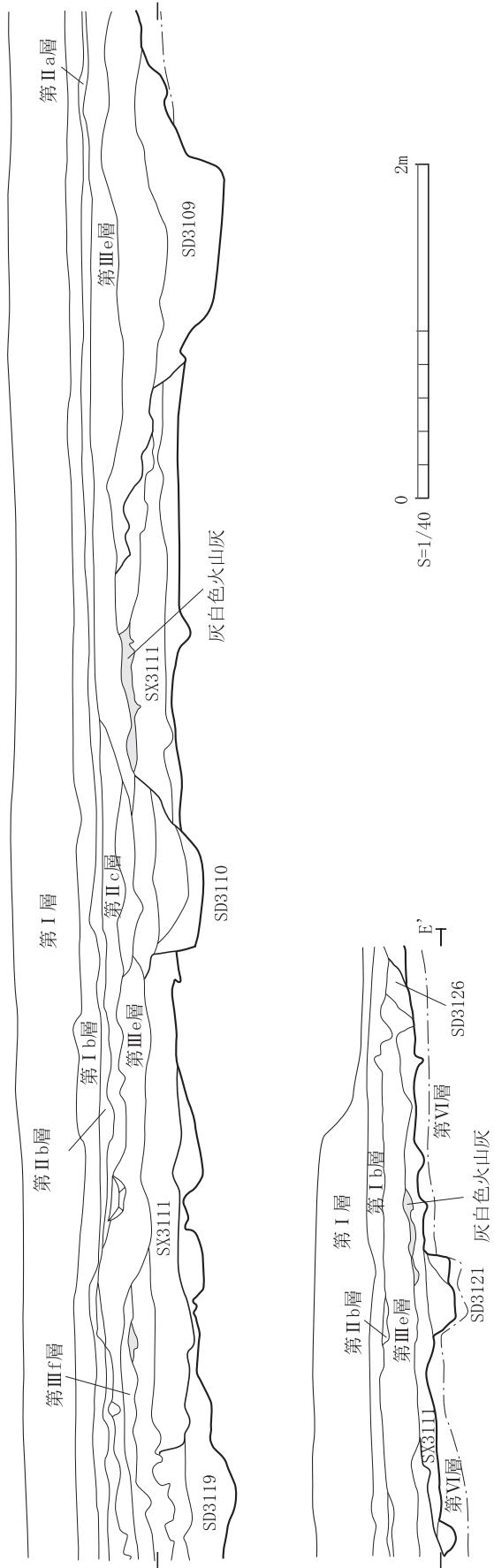
第13図 3区西壁断面図①



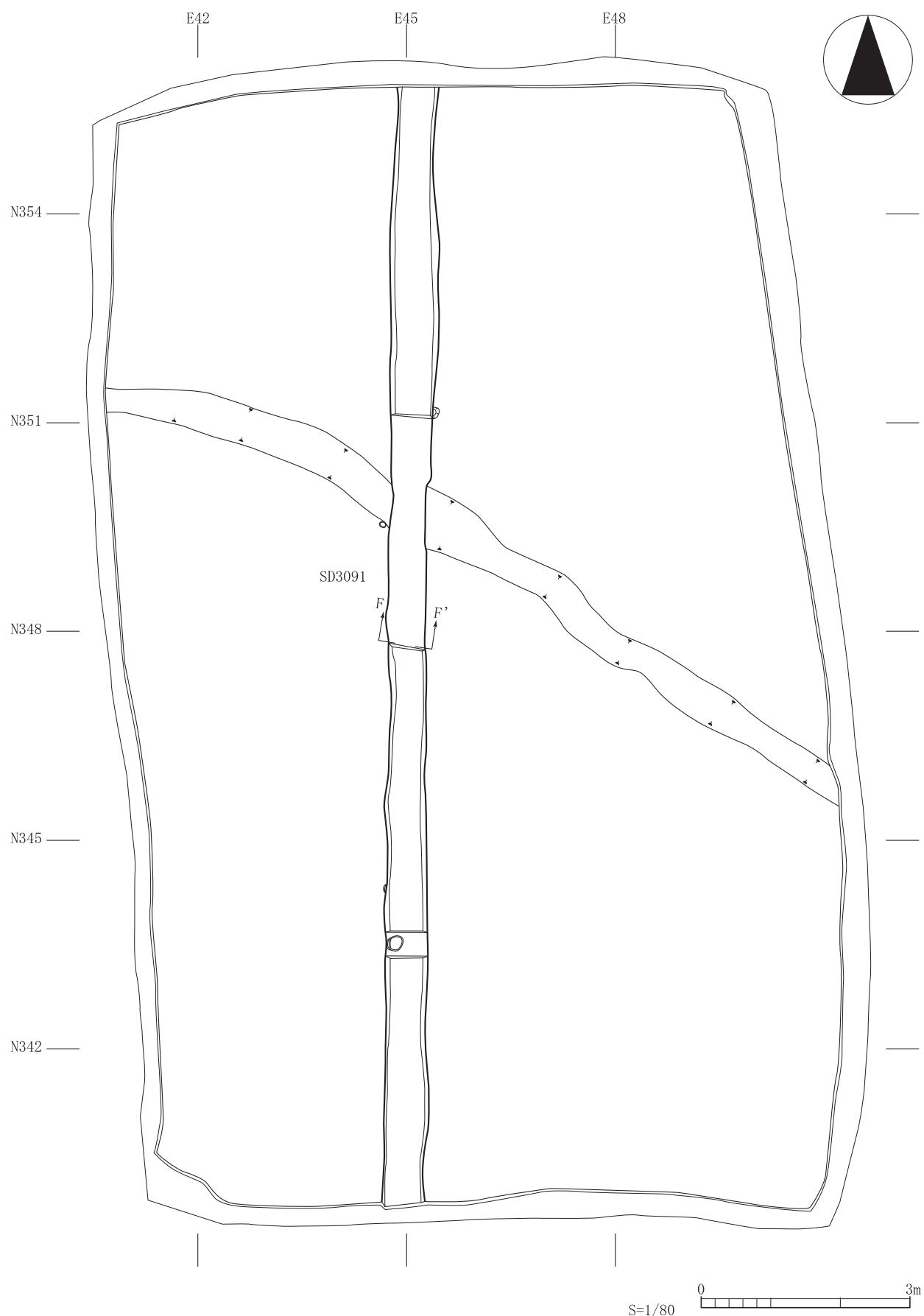
第14図 3区西壁断面図②



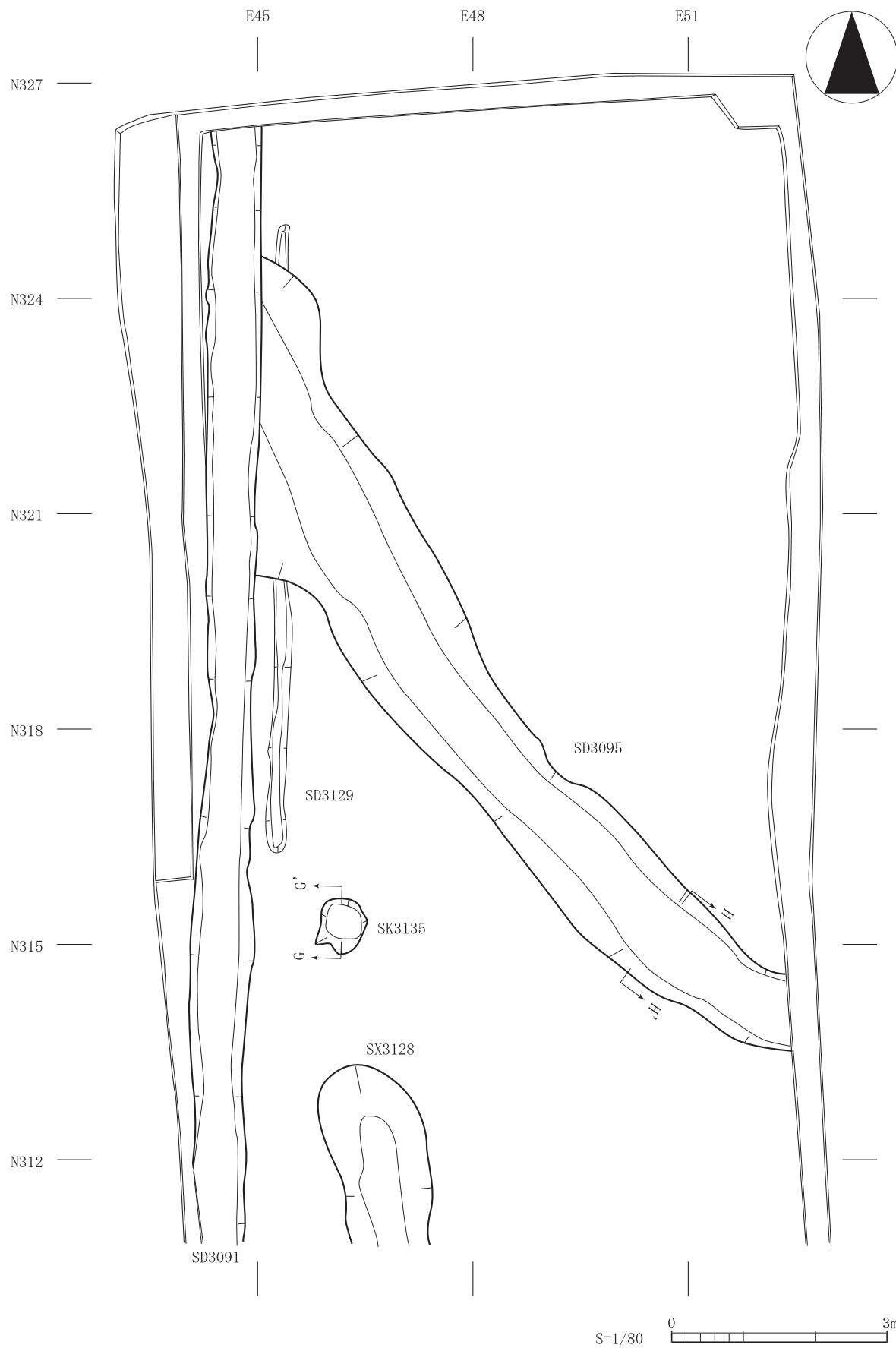
第15図 3区東壁断面図①



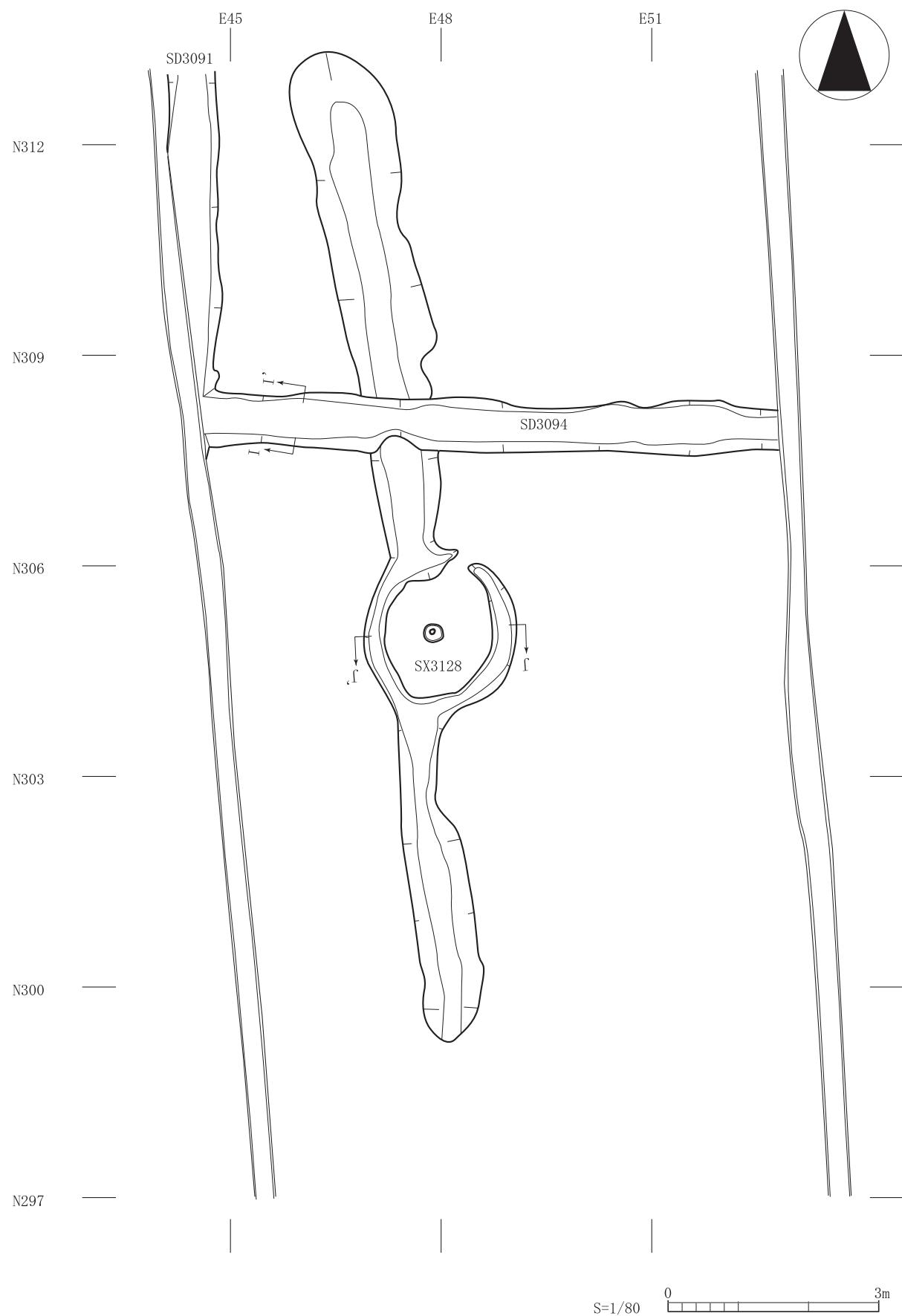
第16図 3区東壁断面図②



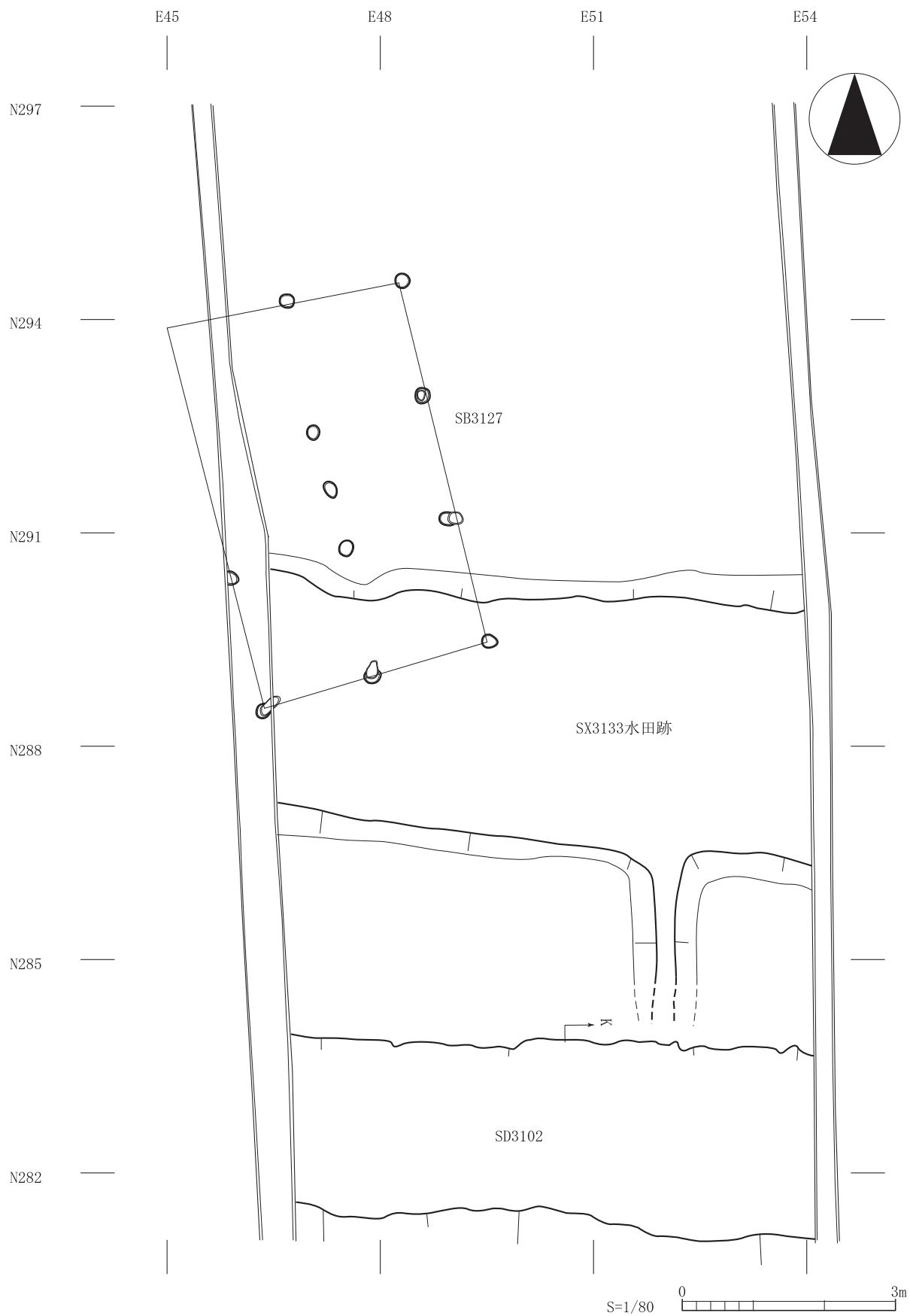
第17図 1区遺構平面図



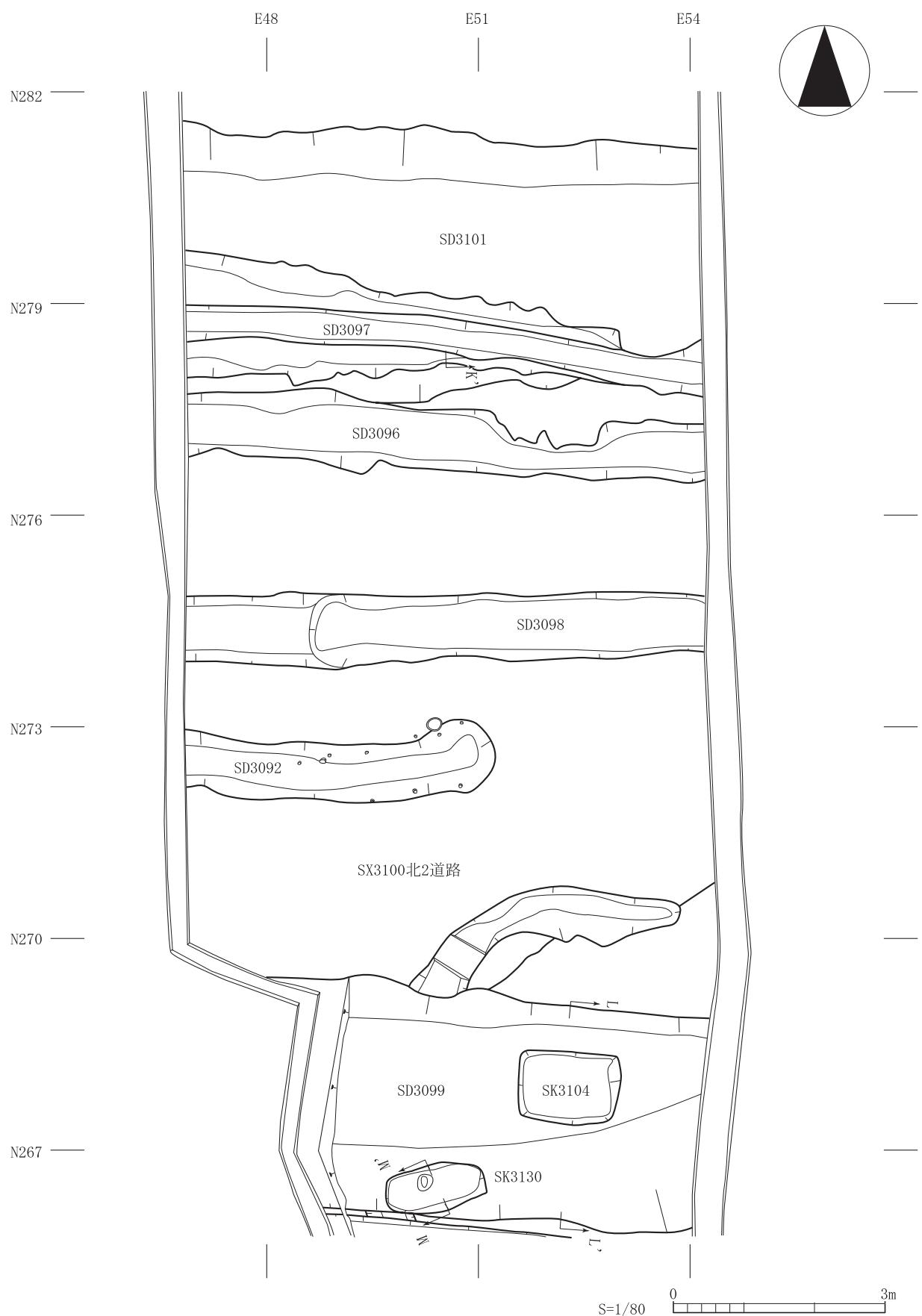
第18図 2区遺構平面図①



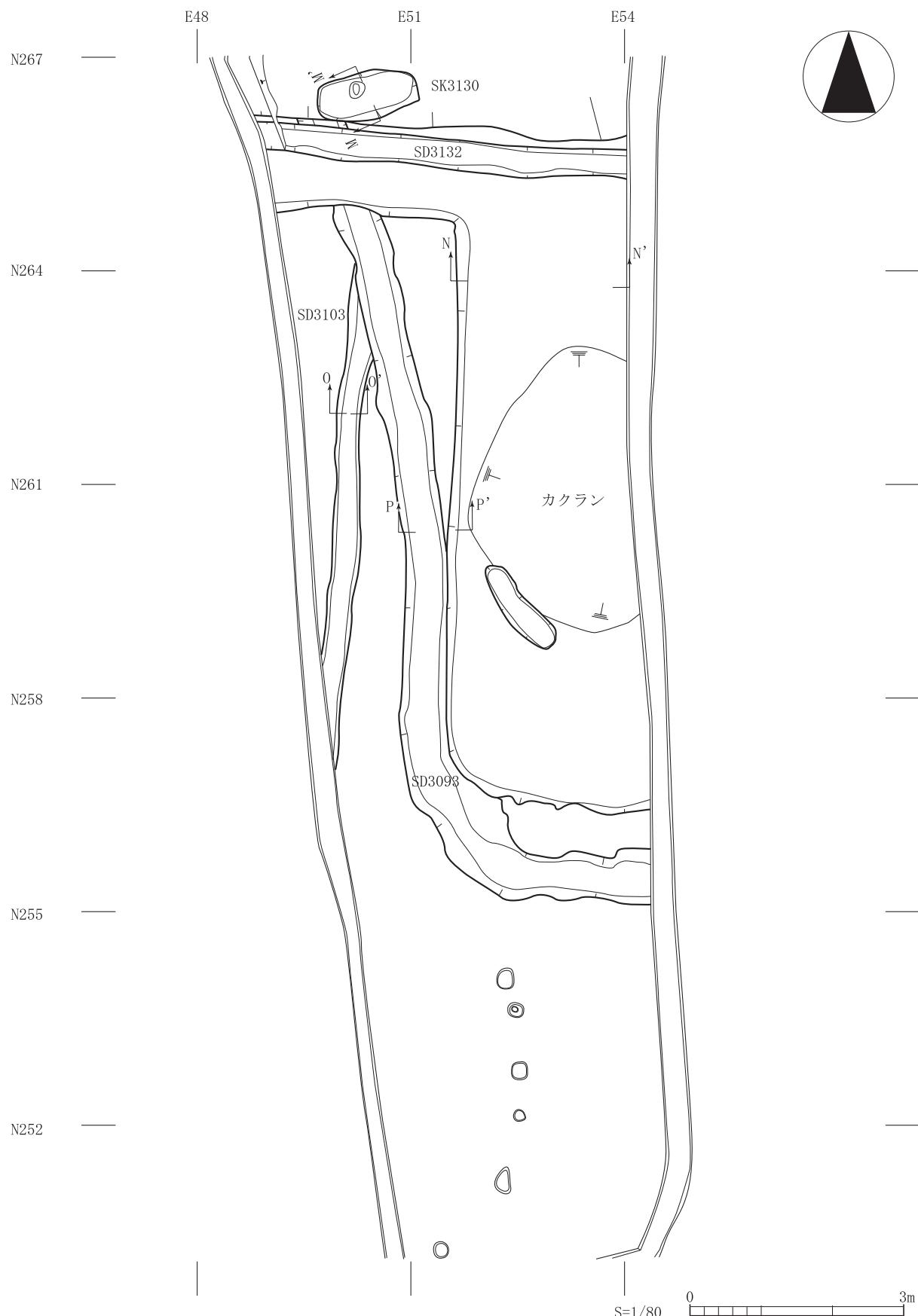
第19図 2区遺構平面図②



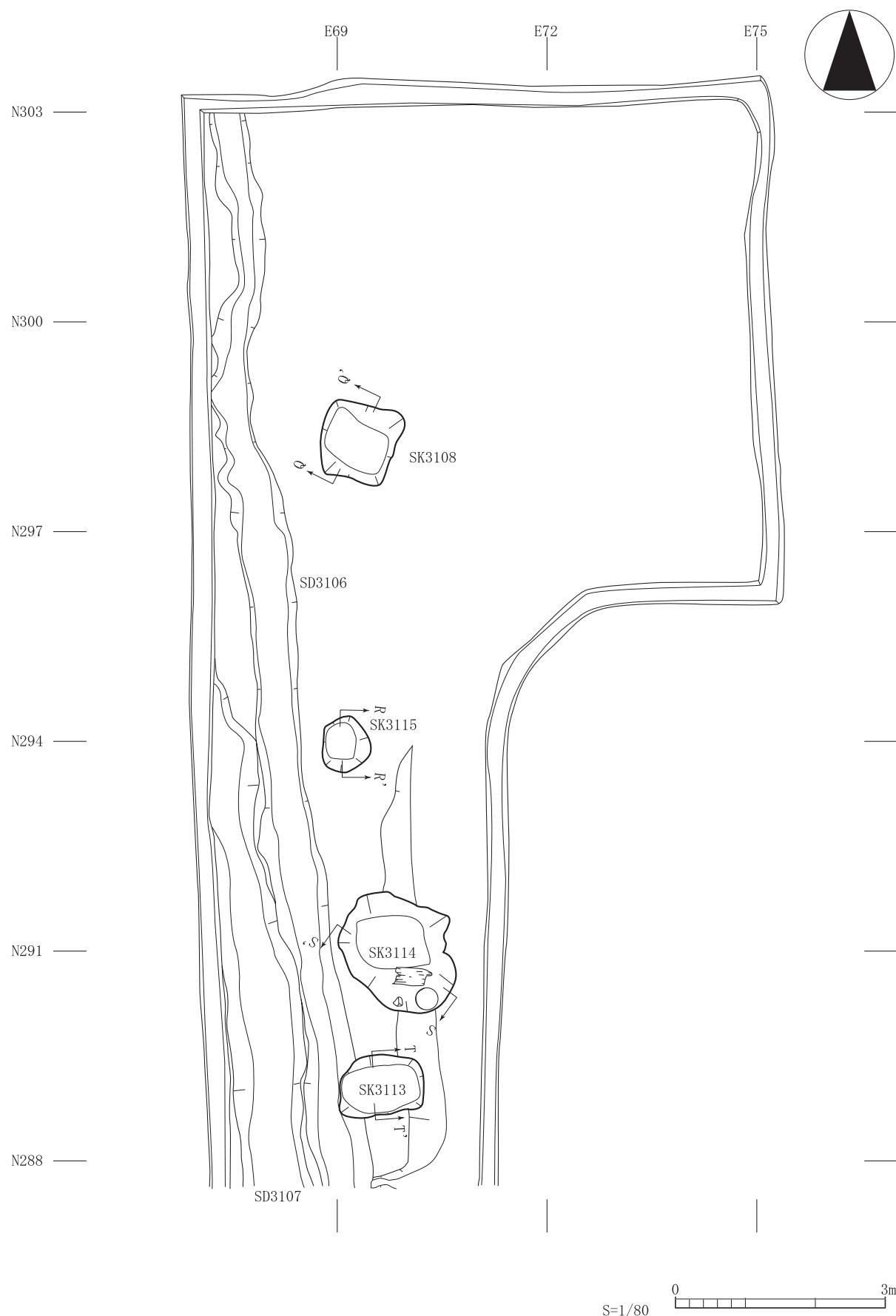
第20図 2区遺構平面図③



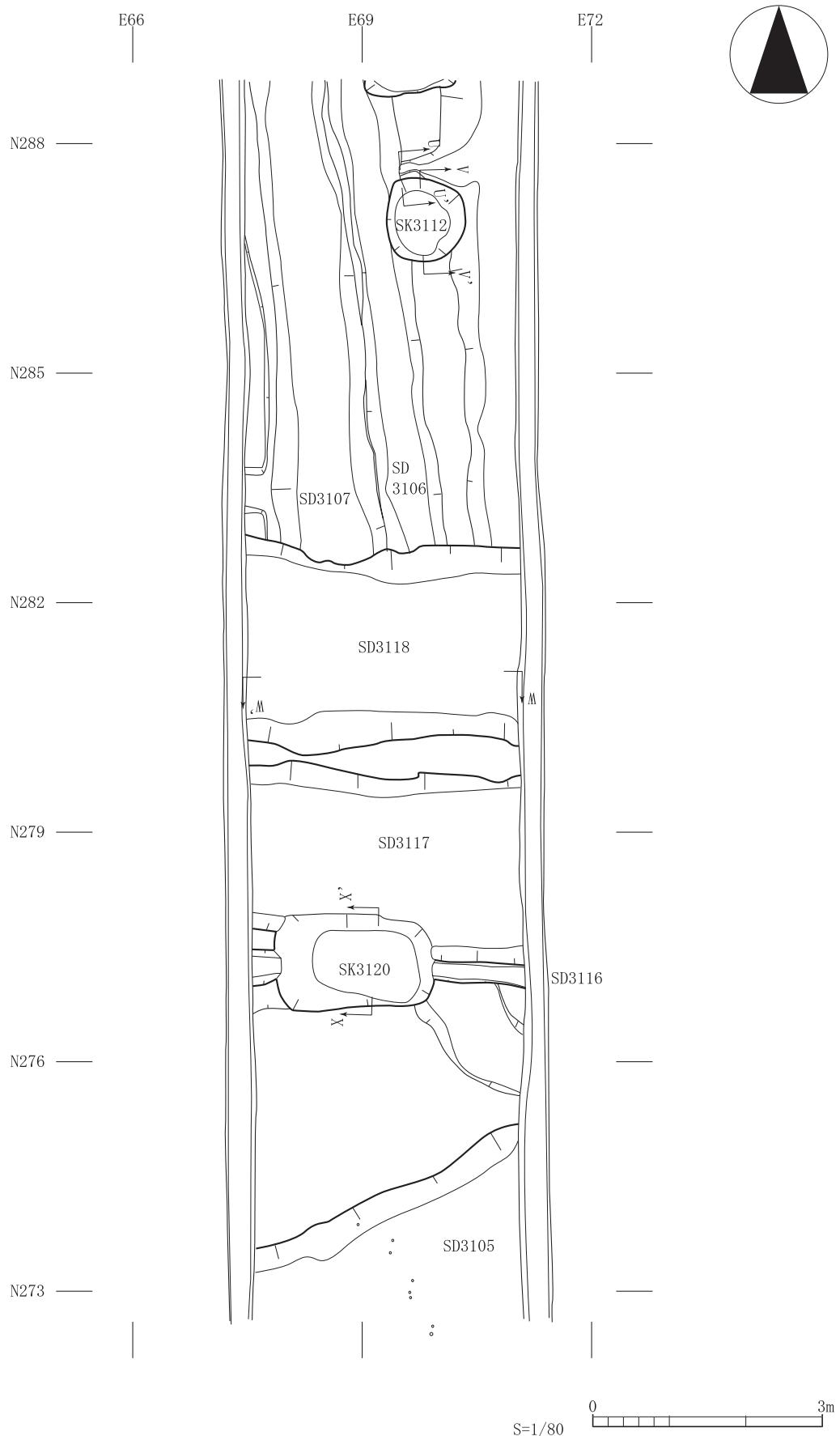
第21図 2区遺構平面図④



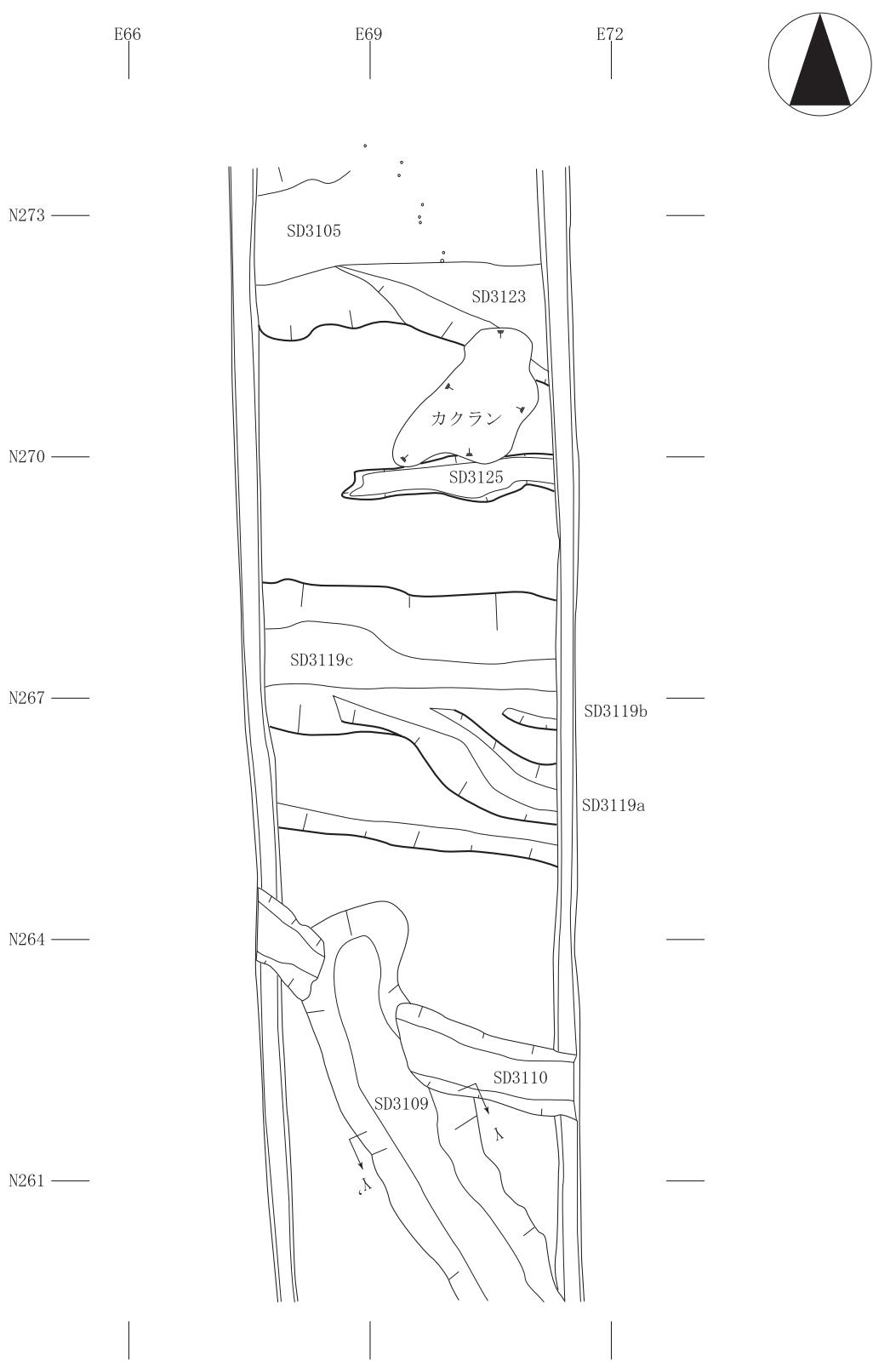
第22図 2区遺構平面図⑤



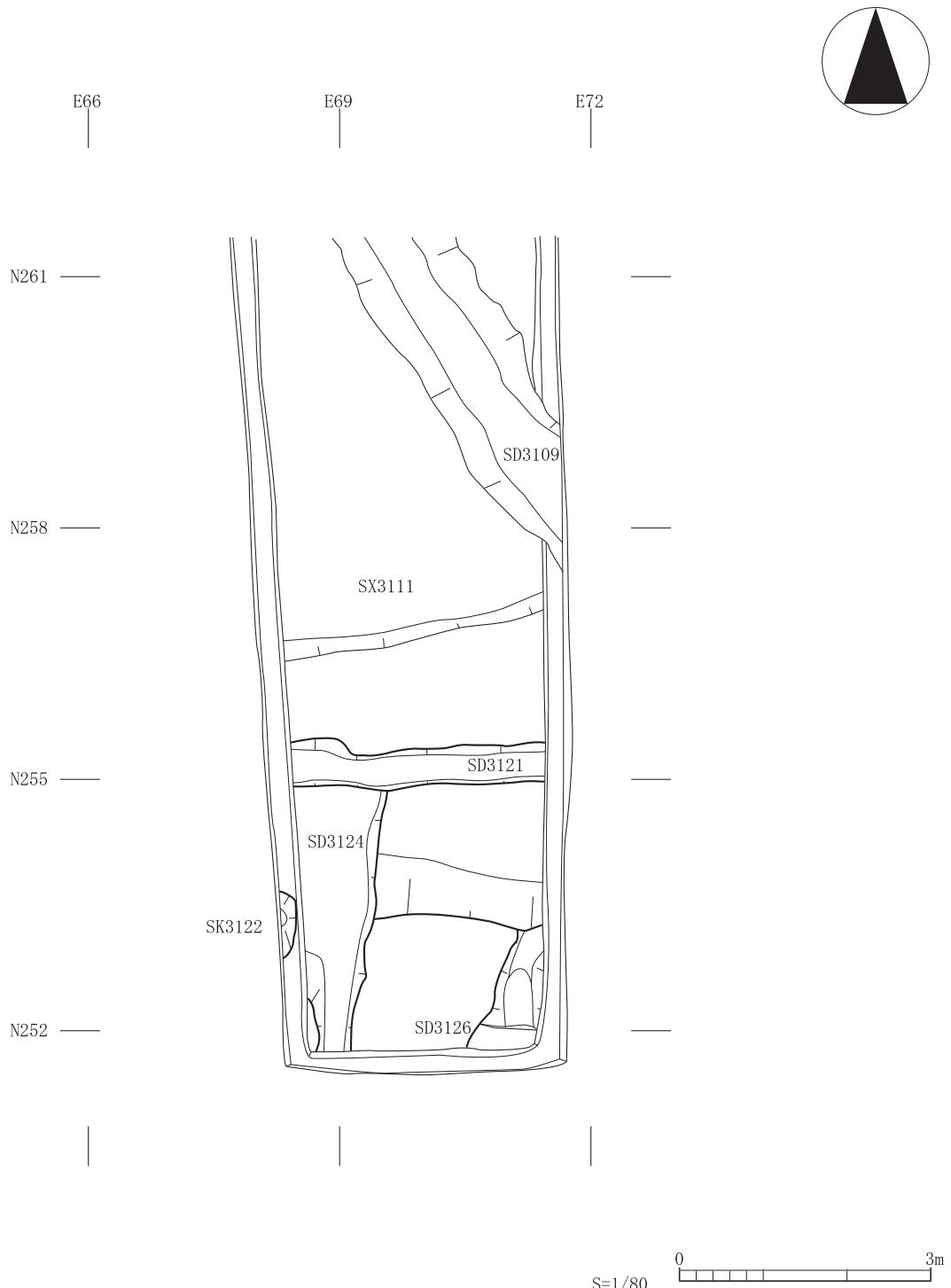
第23図 3区遺構平面図①



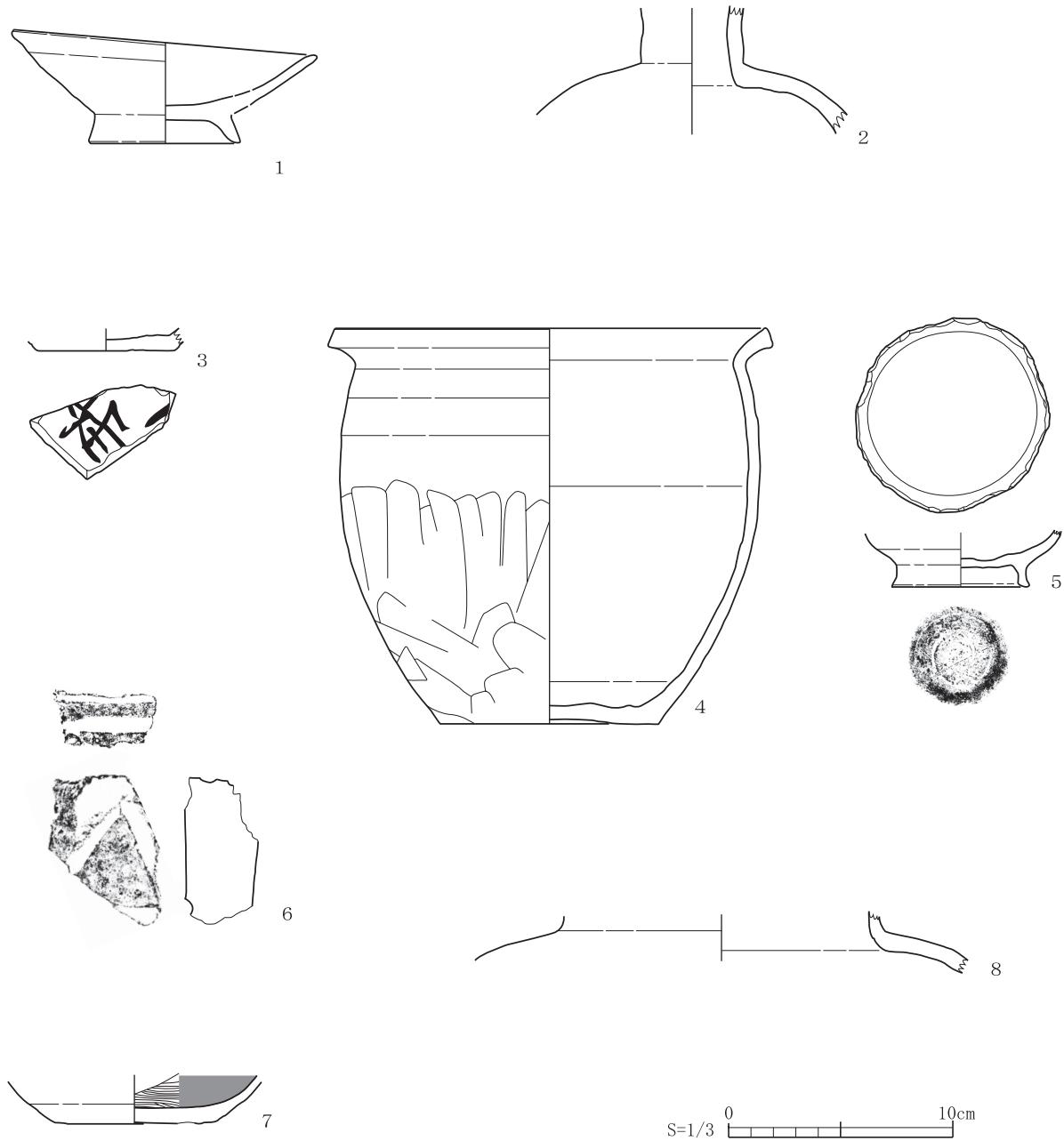
第24図 3区遺構平面図②



第25図 3区遺構平面図③

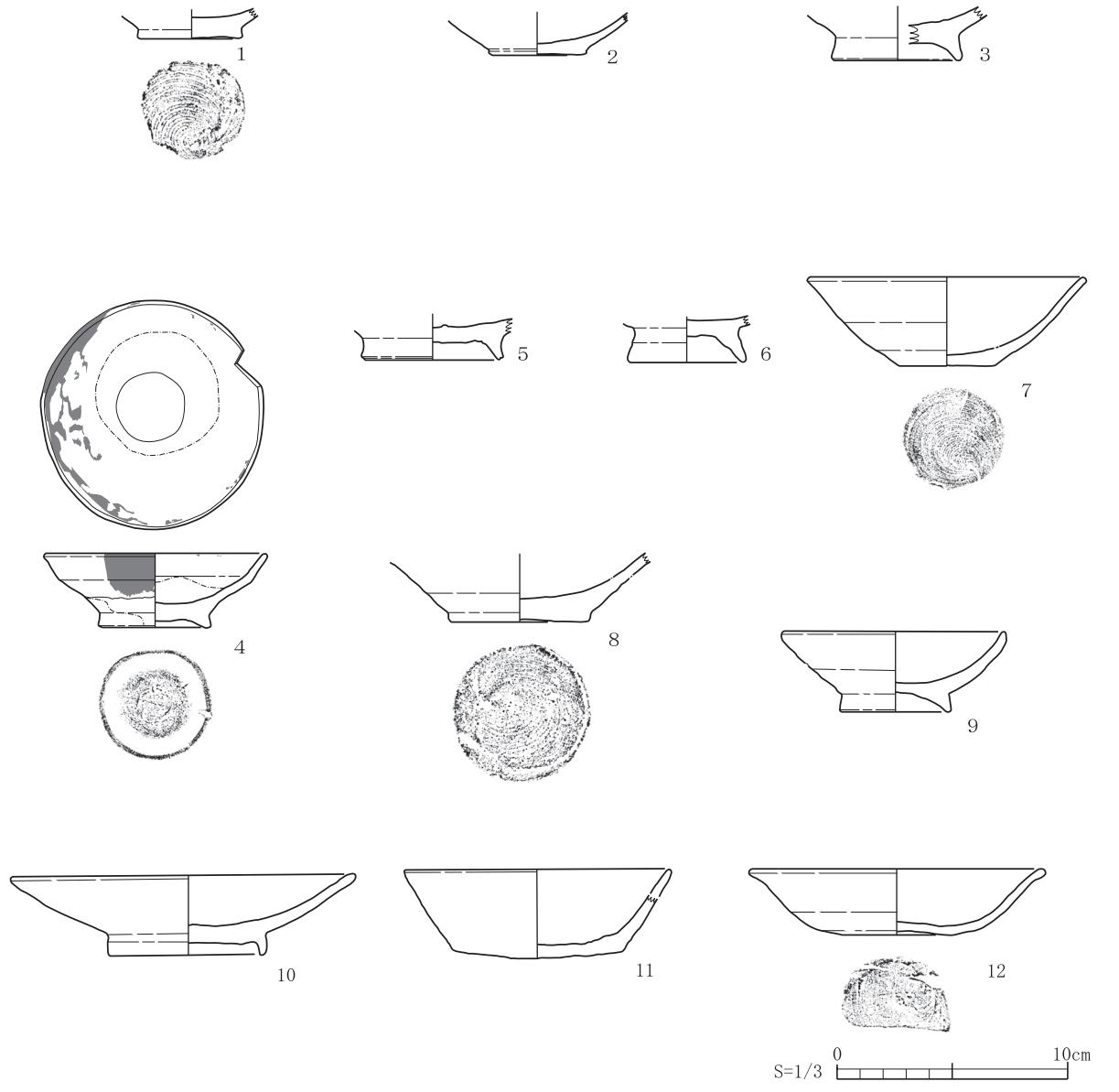


第26図 3区遺構平面図④



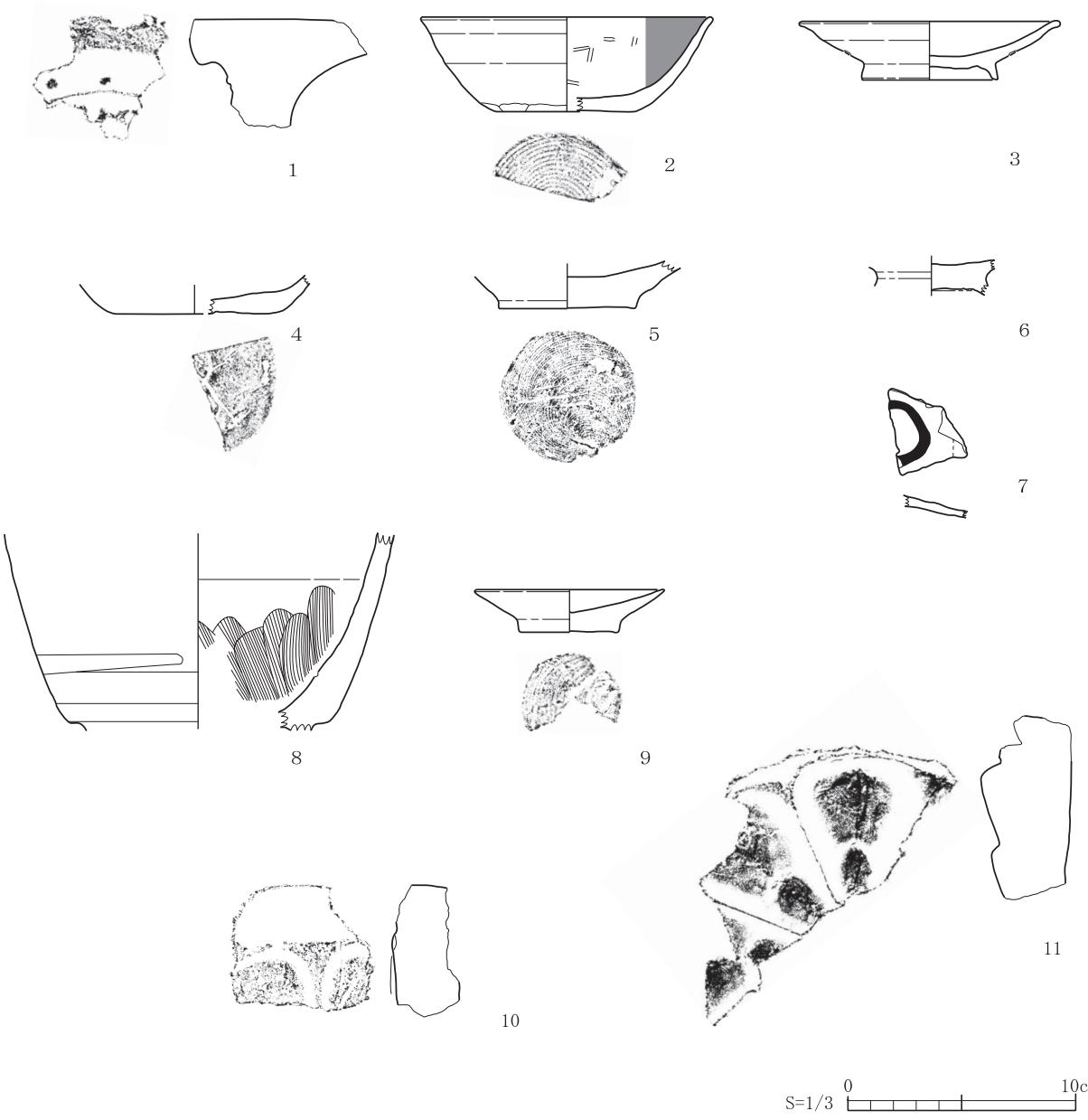
番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考	単位(cm)
			外 面	内 面							
1	須恵系土器・高台付杯	2区・SD3092・1層	ロクロナデ、底部:糸切り	ロクロナデ	13.5 20/24	6.7 7/24	5.15	8-1	R3		
2	須恵器・長頸瓶	2区・SX3131・1層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—		R4		
3	須恵器・杯	2区・SD3099・1層	底部:回転ヘラ切り	ロクロナデ	—	(6.4) 2/24	—		R6	底部外面に墨書「柴」△	
4	土師器・甕	2区・SD3099・1層	ロクロナデ→ヘラケズリ、底部:不明	ロクロナデ	(19.4) 3/24	9.8 24/24	17.8		R8		
5	須恵器・高台付杯	2区・SD3099・2層	ロクロナデ、底部:ヘラ切り	ロクロナデ	—	6.2 24/24	—		R9	底部外面にヘラガキ「×」	
6	軒平瓦	2区・SD3099・3層	—	—	—	—	—		R10	重孤文	
7	須恵器・甕	2区・SD3101・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—		R12		
8	土師器・杯	2区・SX3116・1層	ロクロナデ、底部:手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・ 黒色処理	—	7.2 14/24	—		R13		

第27図 出土遺物実測図（土器類1）



番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 底径 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備考
			外面	内面					
1	須恵系土器・杯	3区・SD3105・1層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	4.4 24/24	—		R38	
2	須恵系土器・杯	3区・SD3105・1層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	4.1 17/24	—		R39	
3	須恵系土器・高台付杯	3区・SD3105・1層	ロクロナデ、底部:不明	ロクロナデ	(5.5) 4/24	—		R40	
4	山茶椀・小椀	3区・SD3105・1層	ロクロナデ、底部:糸切り→高台貼付	ロクロナデ	9.6 23/24	5.0 24/24	3.25	R37	内外面油煙付着・施釉
5	須恵系土器・高台付杯	3区・SD3109・1層	ロクロナデ、底部:不明	ロクロナデ	—	6.0 24/24	—	R43	
6	須恵系土器・高台付杯	3区・SD3109・1層	ロクロナデ、底部:不明	ロクロナデ	—	5.0 10/24	—	R44	
7	須恵系土器・杯	3区・SD3107・1層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	(12.0) 7/24	4.2 24/24	3.9	R74	
8	須恵系土器・杯	3区・SD3107・1層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	6.0 24/24	—	R45	
9	須恵系土器・高台付杯	3区・SD3107・1層	ロクロナデ、底部:不明	ロクロナデ	9.7 23/24	4.8 23/24	3.6	R73	
10	須恵系土器・高台付皿	3区・SD3110・1層	ロクロナデ、底部:回転糸切り→高台貼付	ロクロナデ	15.0 18/24	6.8 24/24	3.6	R86	
11	須恵器・杯	3区・SD3119・1層	ロクロナデ、底部:ヘラ切り	ロクロナデ	(11.7) 11/24	7.5 15/24	3.9	R48	
12	須恵系土器・杯	3区・SD3123・1層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.0) 11/24	(4.8) 10/24	2.9	R50	

第28図 出土遺物実測図（土器類 2）



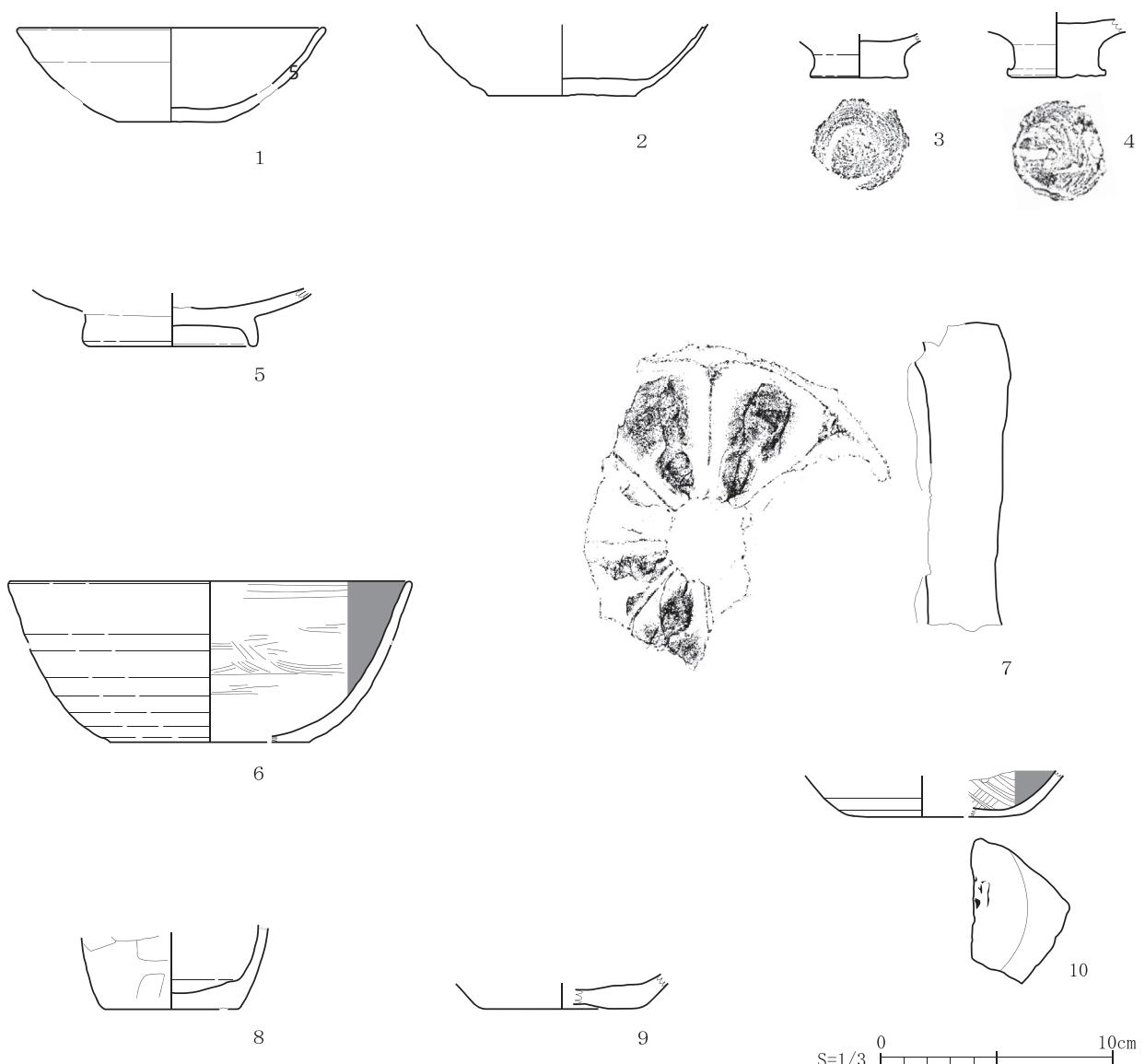
11

10cm

单位 (cm)

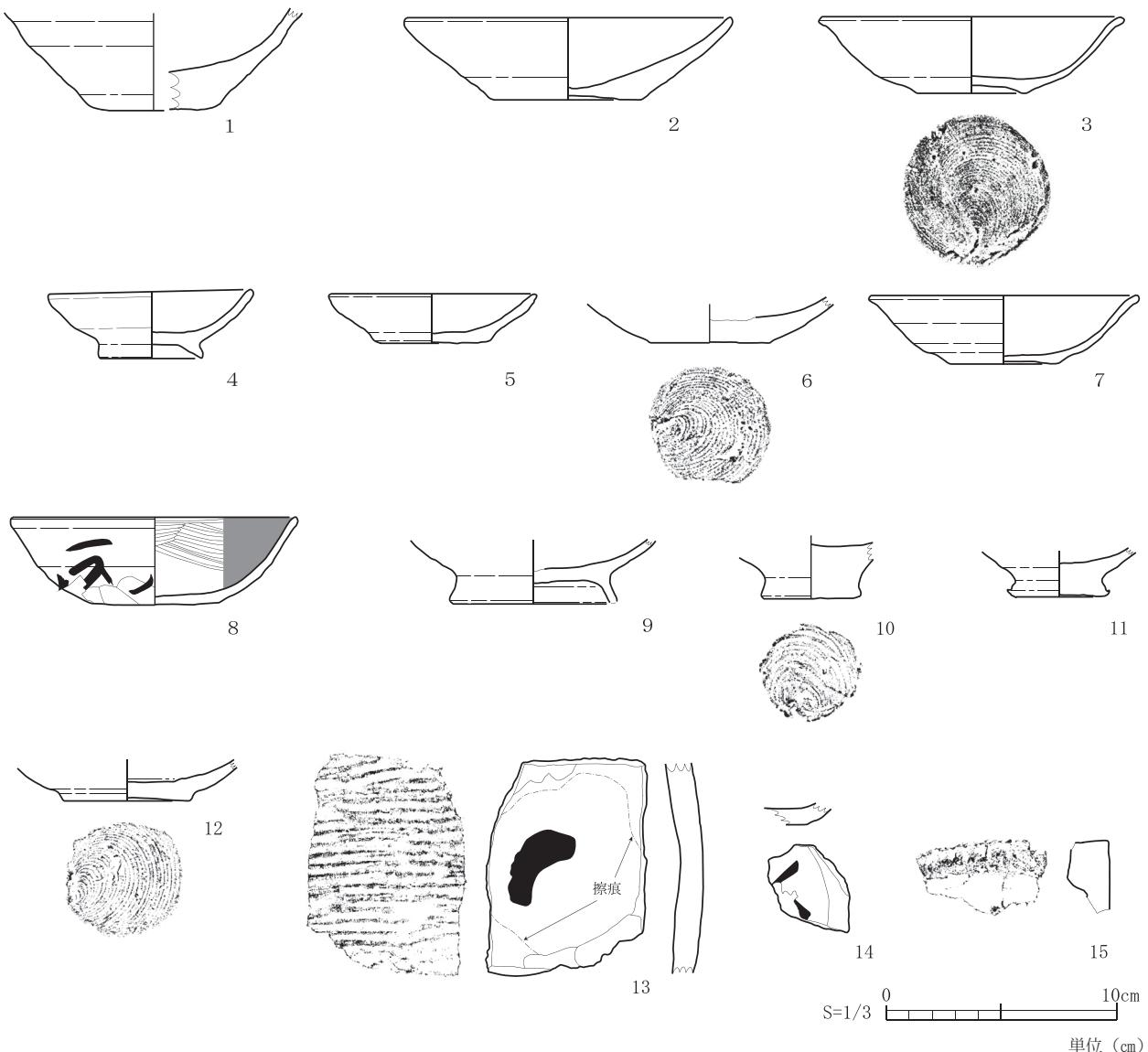
番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備考
			外 面	内 面						
1	軒丸瓦	2区・検出面	—	—	—	—	—		R30	細弁蓮花文
2	土師器・杯	2区・検出面	ロクロナデ、体部下半:手持ちヘラケズリ、底部:糸切り	ヘラミガキ、 黒色処理	(12.9) 3/24	(6.2) 8/24	4.2		R32	
3	須恵系土器・高台付皿	2区・検出面	ロクロナデ、底部:不明	ロクロナデ	(11.2) 2/24	6.0 9/24	2.6		R33	
4	須恵器・杯	2区・第I層	ロクロナデ、底部:ヘラ切り	ロクロナデ	—	(7.8) 5/24	—		R14	底部にヘラガキ「×」
5	須恵系土器・杯	2区・第I層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	6.0 24/24	—		R15	
6	須恵系土器・高台付皿	2区・第I層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—		R16	
7	須恵器・蓋	2区・第I層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—		R54	外面に墨書
8	須恵器・瓶	3区・第I層	ロクロナデ、体部下半:回転ヘラケズリ	ロクロナデ、体 部下半:ナデ	—	—	—		R51	
9	須恵系土器・高台付皿	3区・第I層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	(8.3) 1/24	4.4 15/24	1.9		R52	
10	軒丸瓦	3区・第Ib層	—	—	—	—	—		R62	重弁蓮花文
11	軒丸瓦	1区・攪乱	—	—	—	—	—		R1	重弁蓮花文

第29図 出土遺物実測図（土器類 3）



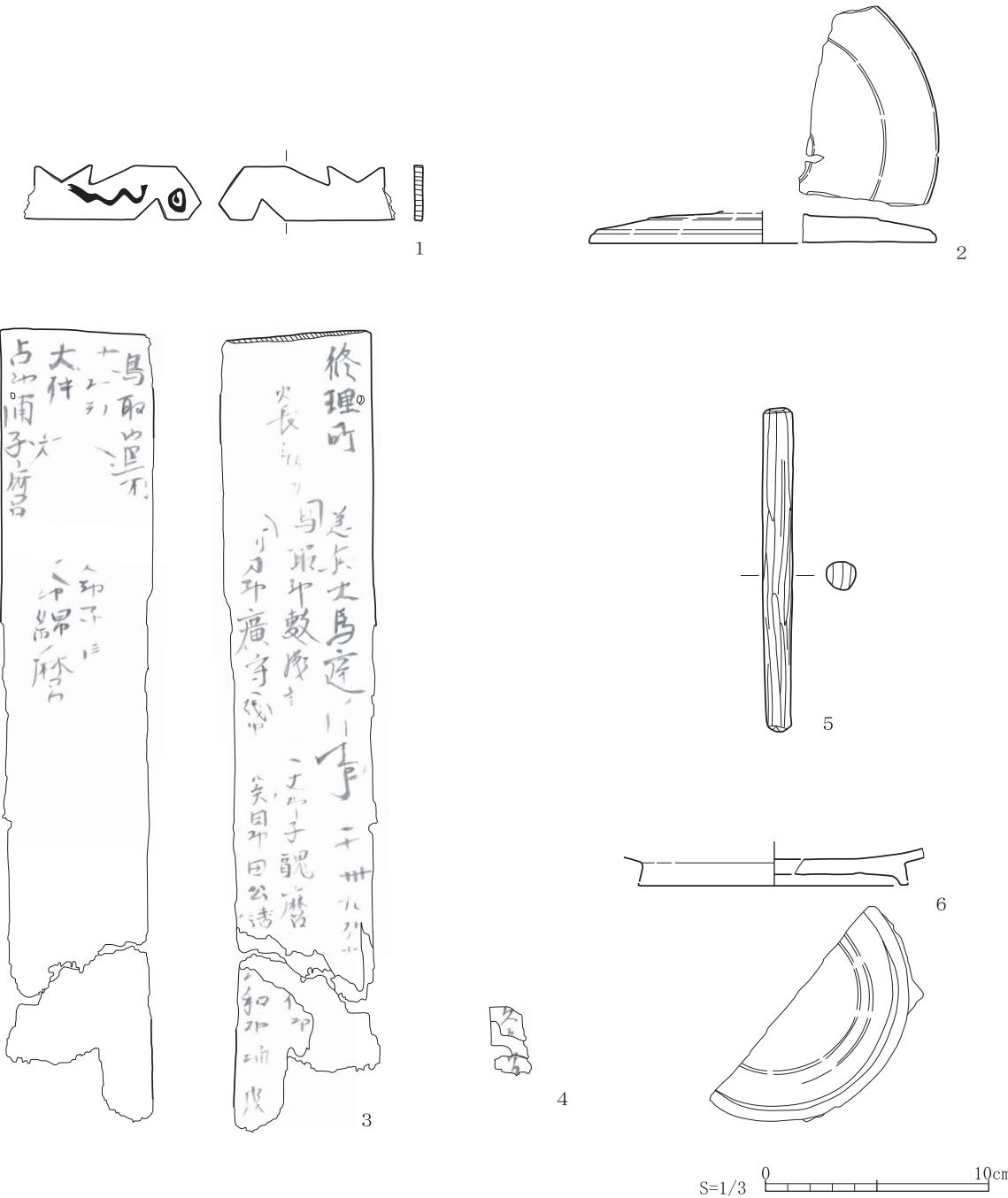
番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 外面	口径 内面	底径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備考
1	須恵系土器・杯	2区・第III層	ロクロナデ		ロクロナデ	(13.2) 8/24	4.6 24/24	4.1		R19		
2	須恵器・杯	2区・第III層	ロクロナデ、底部:へラ切り		ロクロナデ	—	6.4 24/24	—		R20		
3	須恵系土器・柱状高台	2区・第III層	ロクロナデ、底部:回転糸切り		ロクロナデ	—	(4.2) 8/24	—		R23		
4	須恵系土器・柱状高台	2区・第III層	ロクロナデ、底部:回転糸切り		ロクロナデ	—	4.2 24/24	—		R24		
5	須恵系土器・高台付皿	2区・第III層	ロクロナデ、底部:糸切り		ロクロナデ	—	7.2 24/24	—		R25		
6	土師器・杯	2区・第IV層	ロクロナデ、底部:手持ちへラケズリ		ロクロナデ	(17.4) 3/24	(8.6) 4/24	7.0		R27		
7	軒丸瓦	2区・第IV層	—		—	—	—	—		R26	重弁蓮花文	
8	須恵器・瓶	2区・第IV層	手持ちへラケズリ、底部:静止糸切り→手持ちへラケズリ		ロクロナデ	—	5.8 24/24	—		R28		
9	須恵器・杯	2区・第IV層	ロクロナデ、底部:へラ切り		ロクロナデ	—	(7.2) 3/24	—		R29	底部にへラガキ「一」	
10	土師器・杯	2区・第IV層	回転へラケズリ、底部:回転へラケズリ		ヘラミガキ、 黒色処理	—	(8.6) 5/24	—		R90	底部外面に墨書「□」	

第30図 出土遺物実測図（土器類4）



番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 外 面	底径 内 面	残存率	器高	写真 図版	登録番号	備考
			ロクロナデ	底部:回転糸切り							
1	須恵系土器・杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	(5.0) 3/24	—	—	R66		
2	須恵系土器・杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	(14.2) 3/24	6.4 20/24	3.6	—	R67		
3	須恵系土器・杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.0) 5/24	4.8 24/24	3.35	—	R68		
4	須恵系土器・高台付杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:糸切り→高台貼付	ロクロナデ	8.8 14/24	4.4 24/24	3.0	8-3	R69		
5	須恵系土器・小型杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	(9.0) 6/24	4.4 24/24	2.2	—	R70		
6	須恵系土器・杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	5.2 21/24	—	—	R71		
7	須恵系土器・杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	(11.6) 9/24	4.6 24/24	3.0	—	R72		
8	土師器・杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、体部下半～底部:手持ちヘラヶズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(12.4) 12/24	5.6 12/24	3.85	—	R75	体部外面に墨書「成」か	
9	須恵系土器・高台付杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:ロクロナデ	ロクロナデ	—	7.4 11/24	—	—	R76		
10	須恵系土器・柱状高台	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	4.4 24/24	—	—	R78		
11	須恵系土器・柱状高台	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	4.1 24/24	—	—	R81		
12	須恵系土器・杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	5.5 24/24	1.8	—	R85		
13	転用碗(須恵器・甕)	3区・第IIIe層	—	—	—	—	—	—	R93	内面に擦痕	
14	須恵器・杯	3区・第IIIe層	ロクロナデ、底部:ヘラ切り	ロクロナデ	—	—	—	—	R92	底部外面に墨書「□」	
15	軒丸瓦	3区・第IIIe層	—	—	—	—	—	—	R94	細弁蓮花文 310B	

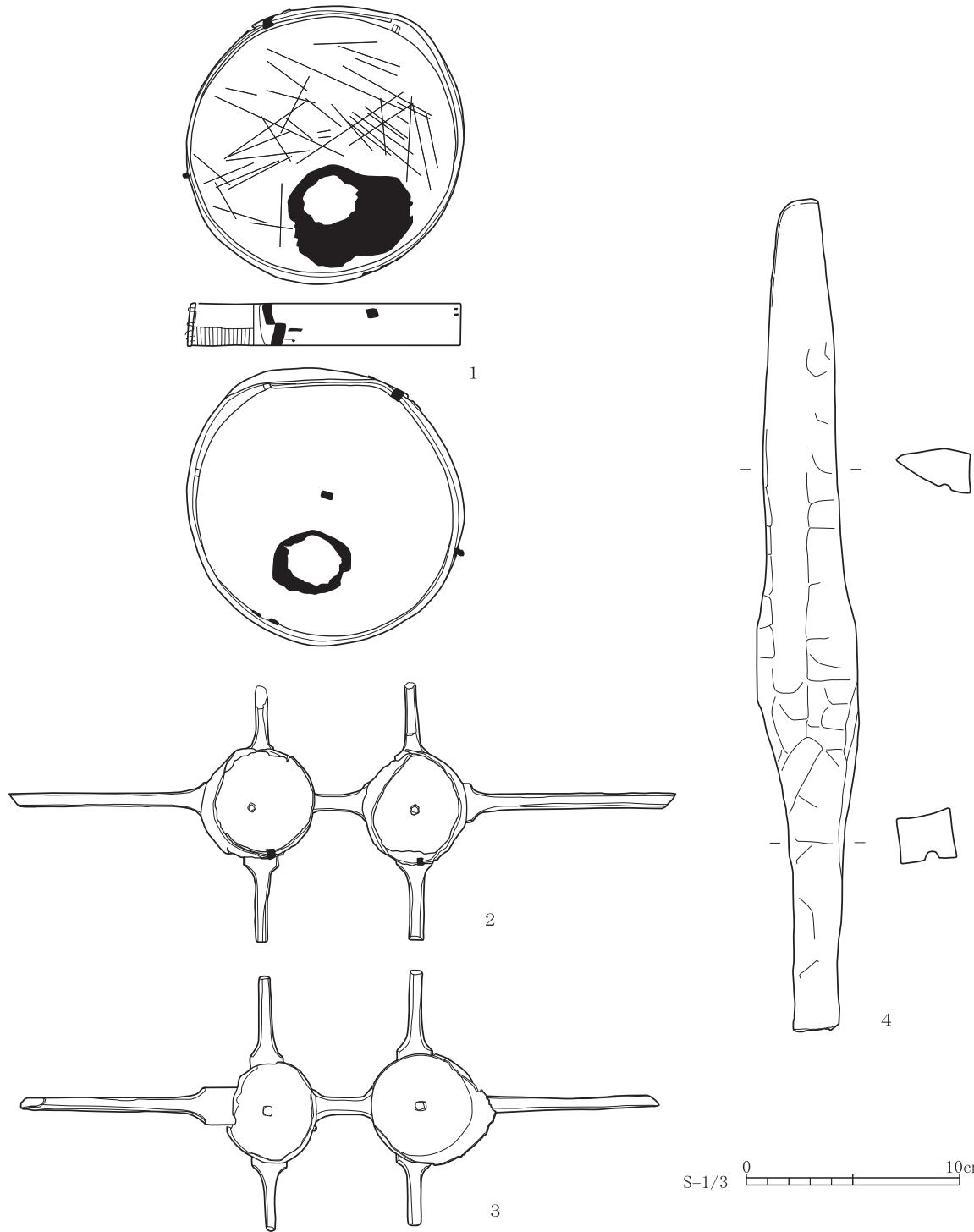
第31図 出土遺物実測図（土器類5）



単位(cm)

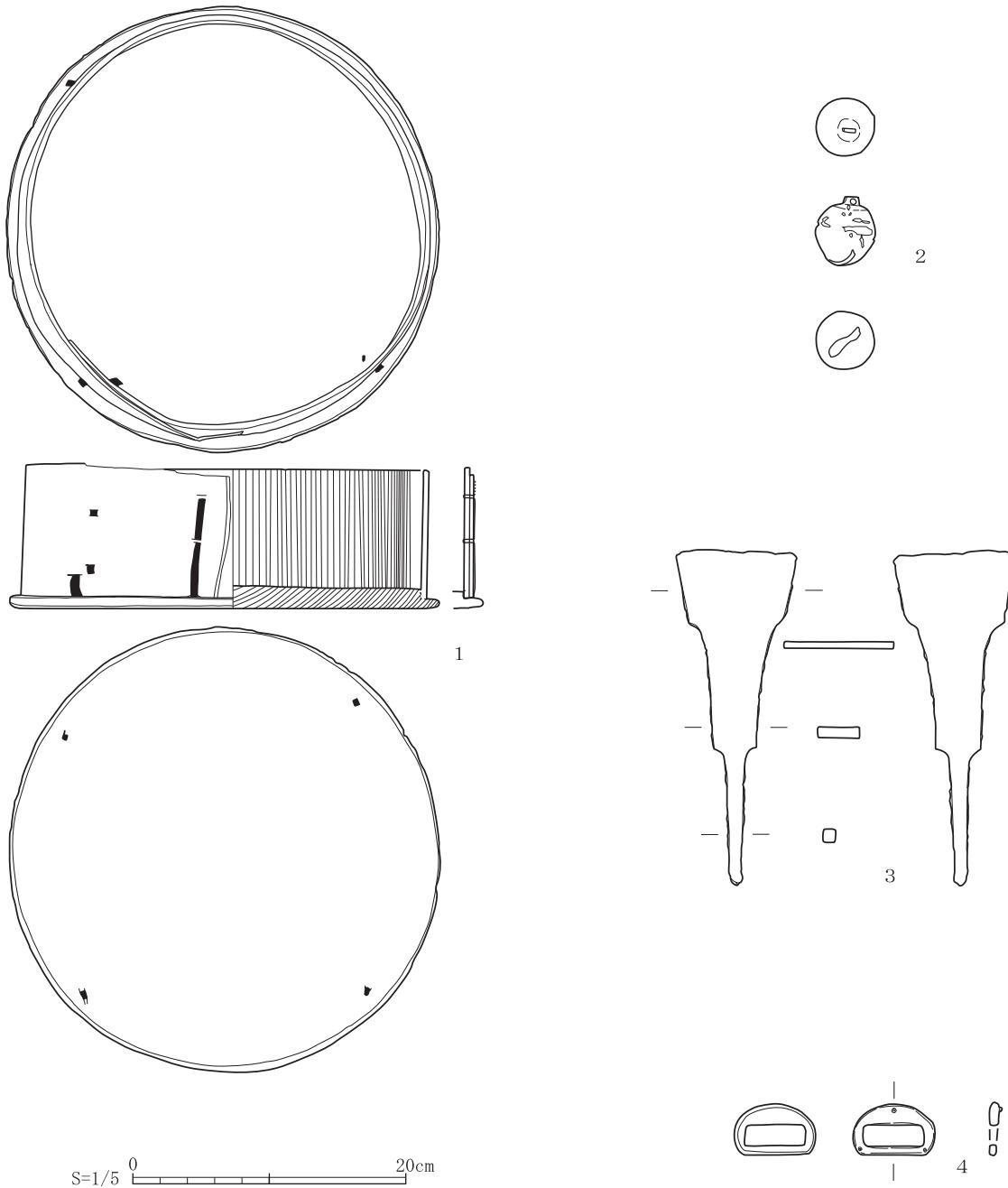
番号	種類	遺構・層位	法量	木取り	樹種	特徴	写真図版	登録番号
1	馬形	2区・SD3099・2層	長:(8.0)、幅:2.5、厚:0.4	柾目		片面に墨描	9-6	R10
2	挽物・用途不明品	2区・SD3102・2層	口径:一、底径:15.6、器高:一	縦木取り				R8
3	木簡	2区・SD3099・2層	長:(35.7)、幅:6.9、厚:0.7	柾目				R1
4	木簡	2区・SD3102・2層				削屑		R15
5	用途不明品	2区・SD3099・2層	長:14.7、厚:1.3					R12
6	挽物・高台付皿	2区・SD3099・2層	口径:一、底径:11.4、器高:一	板目				R5

第32図 出土遺物実測図(木製品1)



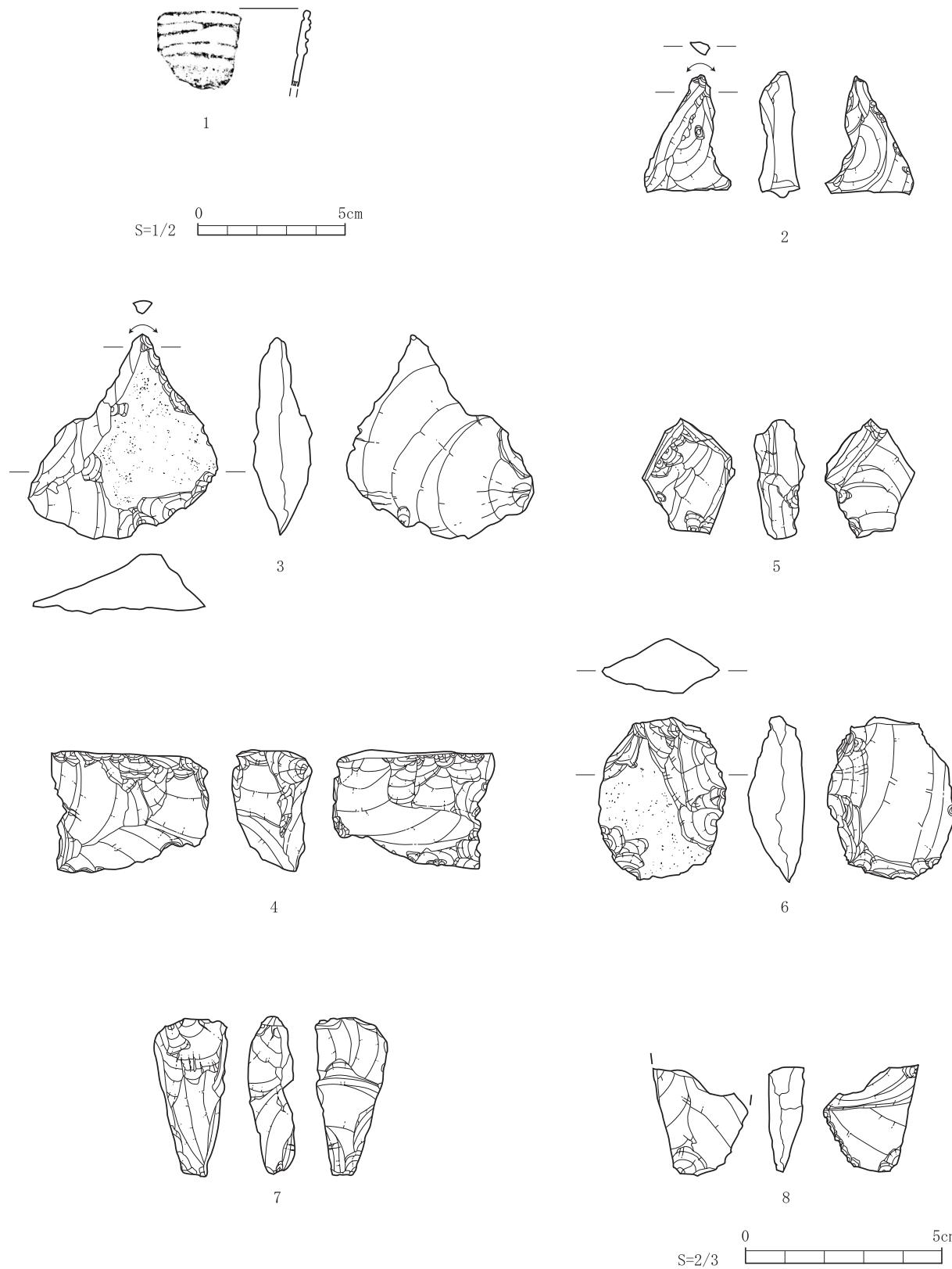
番号	種類	遺構・層位	法量	木取り	樹種	特徴	写真図版		登録番号
								写真図版	
1	円形曲物	2区・SK3104・1層	直径:12.9、高:2.0	底板:柾目		木釘・樹皮結合 底板中央に樹皮 (つまみか)	9-5		R13
2	用途不明品	3区・SK3108・2層	長:31.6、幅:(12.1)				9-3		R2
3	用途不明品	3区・SK3108・2層	長:30.2、幅:12.1				9-4		R3
4	刀形	3区・SD3119・1層	長:39.5、幅:4.7、長:2.1	芯持ち			9-2		R7

第33図 出土遺物実測図（木製品2）

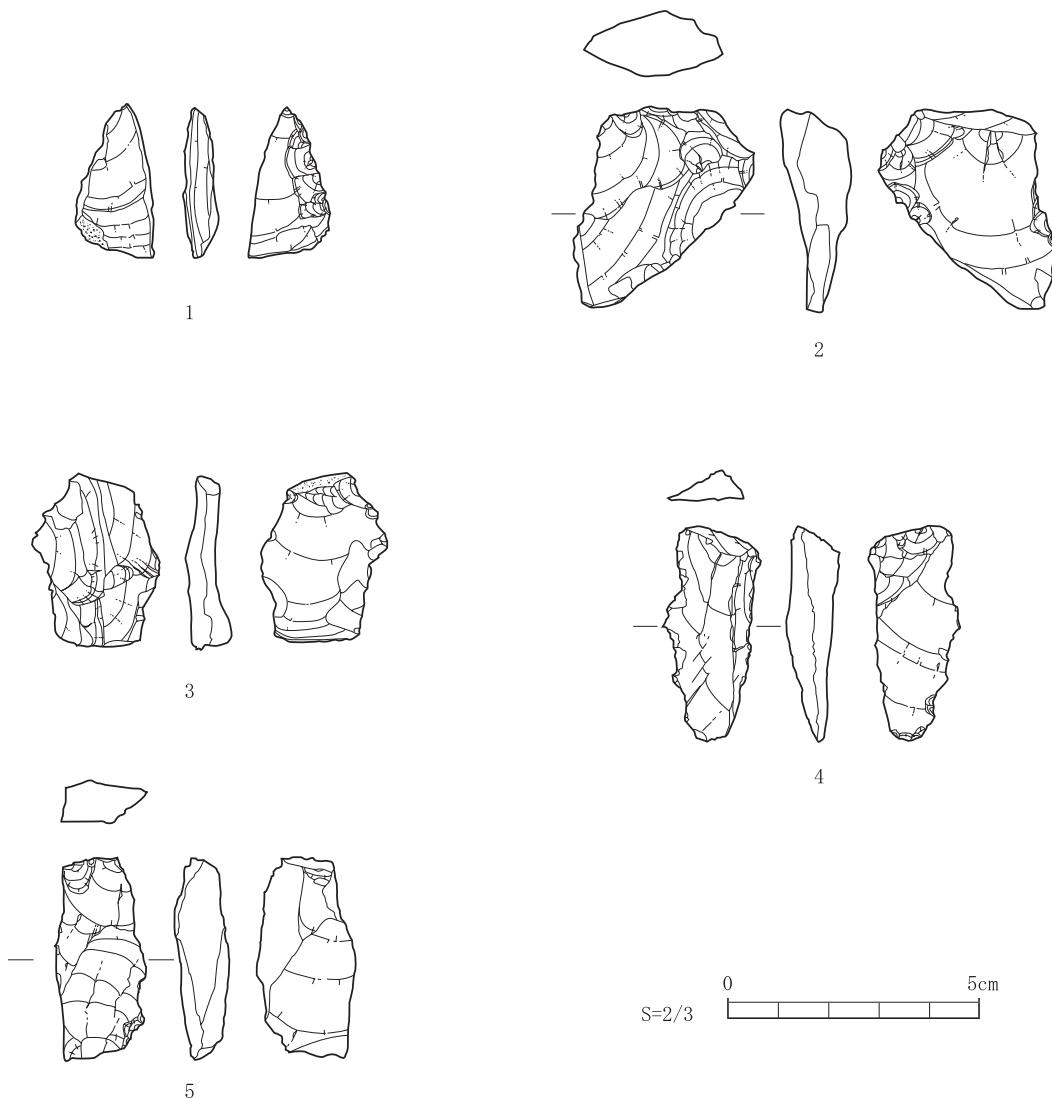


番号	種類	遺構・層位	法量	木取り		特徴	写真図版	単位(cm)	登録番号
1	円形曲物	3区・SK3114・2層	直径:32.6(底板径)・29.6(側板径)、高:10.6	底板:板目 側板:柾目		有段 樹皮結合	9-1	R4	
2	銅鈴	3区・SK3120・1層	径:1.7、高:2.0						R1
3	鉄鎌	3区・SD3119・2層	長:9.8、幅:3.6、厚:0.4						R2
4	銚帶金具	2区・検出面	長:2.4、幅:1.5、厚:0.2						R3

第34図 出土遺物実測図（木・金属製品）



第35図 出土遺物実測図（縄文土器・石器）



第35図 出土遺物観察表

単位 (cm)

番号	遺構・層位	種類	石材	法量	備考	登録番号
1	3区・第I層	縄文土器・鉢	—	—	外面工字文、沈線、内面沈線	R91
2	3区・第Ib層	石錐	頁岩	長:3.0、幅:2.2、厚:1.2 重:3.8g	被熱	R58
3	2区・検出面	石錐	チャート	長:5.2、幅:4.7、厚:1.5 重:21.4g		R34
4	3区・第Ib層	石核	玉隨	長:4.0、幅:3.1、厚:2.0 重:24.3g		R60
5	3区・検出面	石核	玉隨	長:3.0、幅:2.3、厚:1.2 重:7.6g	折断調整	R65
6	3区・第IIIb層	不定形石器	頁岩	長:4.1、幅:3.3、厚:1.4 重:17.4g	被熱	R89
7	3区・検出面	不定形石器	玉隨	長:4.0、幅:1.9、厚:1.2 重:8.8g	被熱	R64
8	3区・SX3111・1層	不定形石器	頁岩	長:2.7、幅:2.4、厚:0.8 重:3.8g	被熱	R46

第36図 出土遺物観察表

単位 (cm)

番号	遺構・層位	種類	石材	法量	備考	登録番号
1	2区・検出面	二次加工剥片	チャート	長:3.1、幅:1.6、厚:0.7 重:3.0g		R35
2	3区・第I層	二次加工剥片	チャート	長:4.0、幅:3.5、厚:1.4 重:13.1g		R57
3	3区・第Ib層	剥片	頁岩	長:3.4、幅:2.5、厚:0.8 重:5.0g		R61
4	3区・第IIIb層	二次加工剥片	チャート	長:4.2、幅:1.8、厚:0.9 重:5.2g		R87
5	3区・第IIIb層	剥片	チャート	長:4.0、幅:1.8、厚:1.1 重:7.1g		R88

第36図 出土遺物実測図（石器）

## IV 考察

今回発見した遺構は、掘立柱建物跡1棟、道路跡1条、溝跡23条、土壙10基、水田跡、性格不明遺構3基である。出土遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、須恵系土器、山茶椀、木簡、木製品、金属製品、石製品がある。以下、これらについて若干の検討を行いたい。

### 1. 遺物

#### (1) 縄文土器・石器（図35・36図）

3区の第I層より縄文晚期（大洞A'式）と考えられる土器が1点出土している。小型鉢の口縁部の小破片である。外面には「工字文」が施文されており、内面には1条の横位沈線が施されている。内外面ともに摩滅しており調整等は不明である。

石器は、古代～現代までの堆積層などから12点発見されている。区別では2区から2点、3区から10点出土しており、器種は石錐2点、石核2点、不定形石器3点、二次加工のある剥片2点、剥片3点である。石材はチャート5点、頁岩4点、玉髓3点となっており、これらの中に同一母岩と見られるものはない。出土層位はいずれも堆積層や遺構埋土である。年代については、本調査区から南へ約50m離れた市川橋遺跡第3次調査区において同様に堆積層や遺構埋土から16点の石器が出土しており、大きく縄文時代に属するものと位置づけられている。今回出土した石器も層位的な出土ではないが、大きく縄文時代として捉えておきたい。これまで多賀城南面地区の調査においては河川堆積土や堆積層中から散漫的に石器が出土することはあっても、今回の調査のように比較的まとめて出土することは非常に稀であった。このことから、本調査区周辺には当該期の遺跡が存在し、自然・人為的要因によって遺物が堆積層中に混入した可能性が考えられる。

#### (2) 奈良・平安時代の遺物

##### A 土器類

今回出土した土器類には土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、山茶椀などがある。これらのうち土師器、須恵器、須恵系土器の割合をみると（第37図）、土師器13.9%、須恵器11.5%、須恵系土器74.6%であり、須恵系土器の占める割合が突出している。須恵系土器の中には、小型杯や柱状高台皿など多賀城の終末前後のものも出土している。

##### B 山茶椀について

今回発見した遺構の中で最も新しいSD3105溝跡から山茶椀が1点出土している（第28図4）。山茶椀は県内ではわずかに南小泉遺跡で3点、王ノ壇遺跡で1点出土しているのみであり、注目される遺物といえる。法量は口径9.6cm、高台径5.0cm、器高3.3cm、底部厚0.8cmであり、小椀に分類される。体部中程に稜を有し、内外面には釉が施され、底部外面にはわずかに糸切り痕が確認できる。高台は端部が丸みをもつ三角高台であり、枠殻痕は確認できない。このような器形は初期山茶椀に類例を求めることができる。



第37図 出土土器の割合

年代についてみると、平安京左京四条一坊の井戸SE 8 の埋土から「寛治五年（1091）五月十三日」の墨書名のある須恵器鉢、掘り方から猿投産山茶碗が出土し、掘り方や埋土中の遺物に時期差がないことから一括性が高いとされている。また、「正五位下行兵部大輔兼 参河守藤原朝臣顕長」等の刻銘のある短頸壺が出土していることから12世紀中葉に位置づけられている渥美・大アラコ窯では、灰釉が掛けられた小碗が出土している。一方、東大寺再建のための瓦を焼成したことから12世紀末～13世紀初頭頃に位置づけられている渥美・東大寺瓦窯では、小碗は出土しておらず、また当該期の資料でも器種構成のなかに小碗は入ってこない。このようなことから、本調査出土山茶碗は11世紀後葉から12世紀中葉にかけてのものと考えておきたい。

### C 木製品

本遺跡は地下水位が高く、これまでに数千点におよぶ木製品が出土し、全国的にも有数の木製品出土遺跡である。今回の調査でも道路側溝、溝跡、土壌から13点の木製品が出土しており、それを裏付ける結果となった。以下、主要なものについて記述する。

#### a 木製容器

曲物 2 点、挽物 2 点が出土している。曲物はいずれも円形であり、側板との結合には木釘と樹皮によるもの（第33図 1）と樹皮のみによるもの（第34図 1）がある。挽物はいずれも白木づくりである。第32図 6 は高台付皿で木取りは板目取りであり、樹種はトチノキである。第32図 2 は木取りが縦木取りであり、樹種はトチノキである。用途不明品（第33図 2・3）は、3枚の板を「キ」の字形に相欠きでかみ合わせ、その中心に直径5.0cm、高さ2.8cmの曲物を木釘によって結合したものである。

#### b 祭祀具

馬形（第32図 1）1点、刀形（第33図 4）1点が出土している。いずれも北 2 道路南側溝からの出土である。馬形は片面に目と鬚を墨書きしたものである。樹種はスギ。刀形は長さ39.5cmの大型のもので、芯持ち材を削って刃と柄をつくり出している。樹種はウコギ属。

## 2. 遺構

発見した遺構は概ね奈良・平安時代のものと考えられる。しかし、出土遺物が少なく年代については明確にしがたいものが多い。堆積層との関係や重複関係をもとに整理してみたい。

### (1) 重複関係

主な遺構について重複関係を整理すると以下のようになる。

### (2) 道路跡

今回発見した道路跡は、「東西大路」から北に 2 条目の「北 2 道路」である。第11次調査において検出した南北大路との交差点から東約65mの地点まで発見したことになる。2 区では改修の痕跡を確認することはできなかったが、3 区の南側溝で 2 回の改修を確認している。年代については、灰白色火山灰が最上層に自然堆積しているため下限を10世紀前葉頃に求めることができる。上限についてはロクロ・非ロクロ調整の土師器が混在していることから 8 世紀後葉頃と考えておきたい。また、水田跡の上層にも灰白色火山灰が堆積していることから水田と道路は同時に機能していた可能性が考えられる。

### (3) 建物跡

2 区で掘立柱建物跡を 1 棟発見している。年代は掘り方に灰白色火山灰ブロックを含むことから10世紀

前葉以降と考えられる。調査区南側の大臣宮地区の南から南西にかけての地区においても10世紀前葉以降の建物跡が発見されており、今回発見した建物跡も大臣宮地区周辺に広がる建物群の一部と考えておきたい。

#### (4) 周辺地区との関係

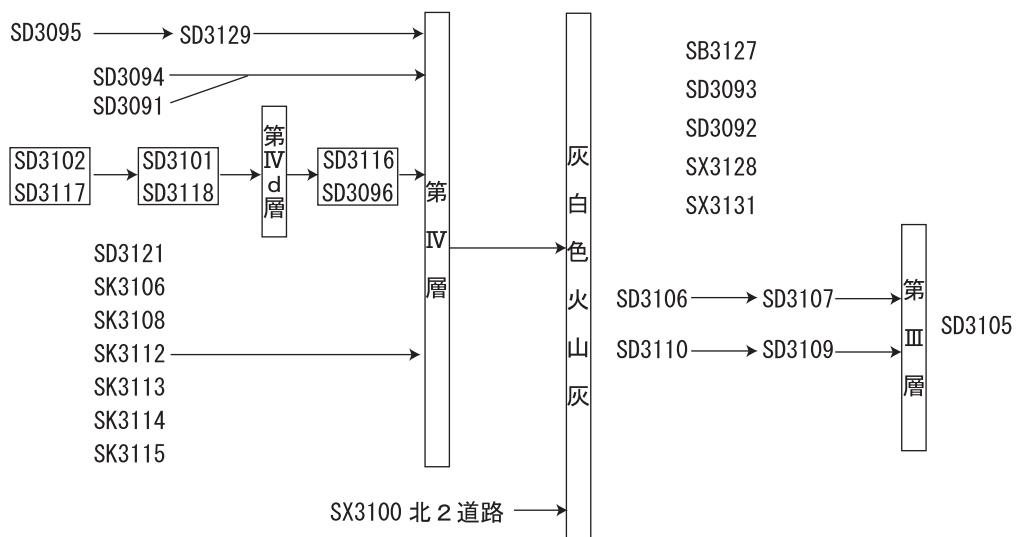
多賀城の方格地割りは、多賀城の南から南西方向に広がりをもち、南北大路以東、東西大路東道路以南においても地形的な制約を受けながらも道路が建設されていることが明らかになってきている。今回の調査区は、多賀城外郭南辺築地から南へ200～300m、南北大路から東へ約50mの地点にあたり、北2道路跡が発見されるなど、多賀城南面に広がる方格地割りと関係が深い場所である。

本調査区を含む南北・東西大路北東地区については、北2・東1道路の2条が発見されているものの、北1道路は確認されておらず、東1道路についても北2道路の南側では発見されず方格地割りが施工されていないことが確認されている。さらに、北2道路周辺では9世紀から10世紀にかけての水田跡が発見されている。

このようなことから、北2道路は延長上に四面庇付建物を中心とする建物群が発見されている館前遺跡があることや、周辺に水田が広がり、方格地割りが施工されていないことなどから、館前遺跡への専用道路ということも考えられよう。

## V ま と め

1. 北2道路跡、掘立柱建物跡、溝跡、水田跡などの遺構を発見した。
2. 地形は南から北へ傾斜しており、南側の高い場所に遺構が多く分布し、北半部の低い場所には水田跡が広がっていた。
3. 須恵器、土師器、須恵系土器をはじめ、木簡、銅鈴、鎔帶金具、祭祀具、木製品などの遺物を発見した。
4. 出土した遺物は10世紀以降のものが圧倒的に多く、10世紀以降に積極的に使用された場所であることが判明した。

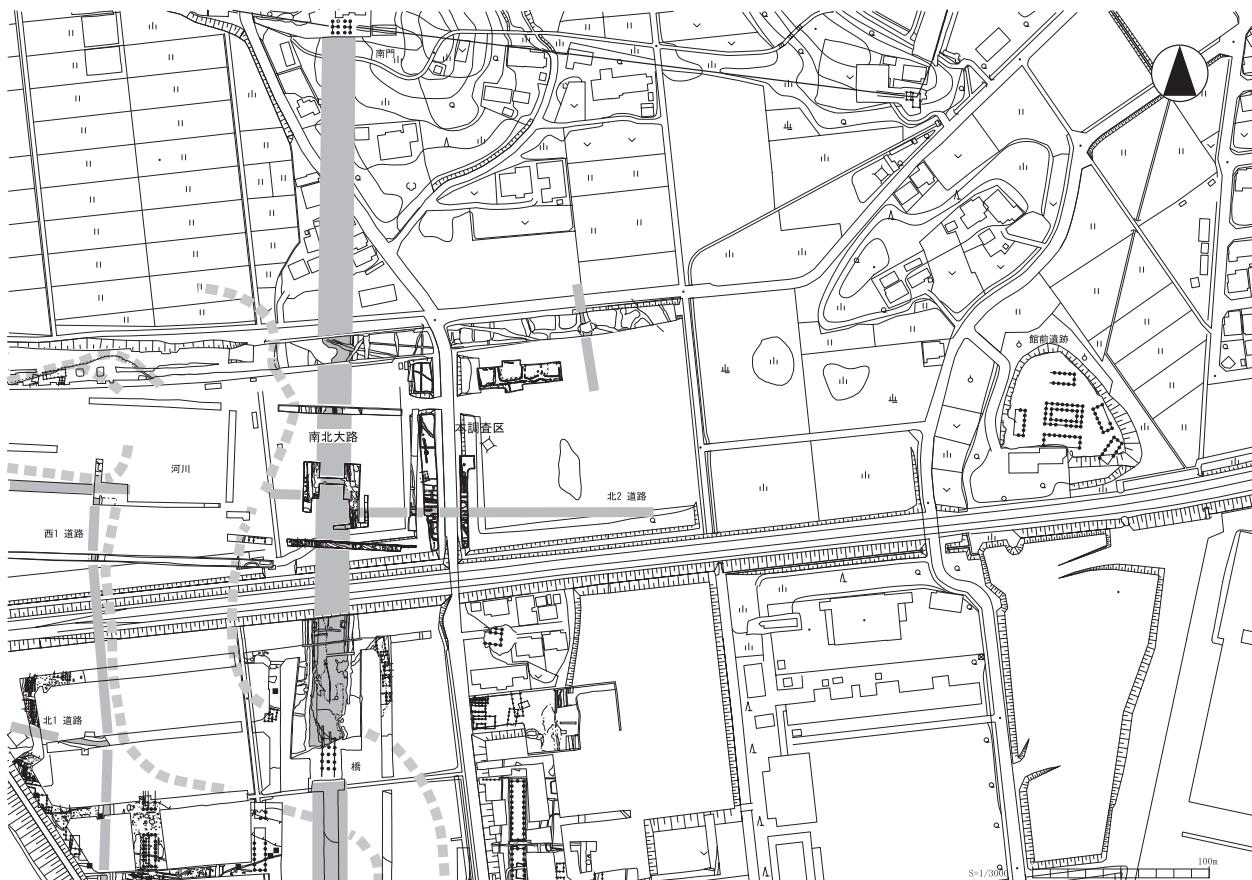


第38図 遺構重複関係

5. 溝跡から山茶碗が出土し、11世紀後葉から12世紀中葉まで遺構が存在することが明らかとなった。
6. 第120号木簡から、多賀城に「修理所」、「馬庭」の存在が明らかとなり、「馬庭」の修理に兵士があてられていたことが判明した。

## 引用・参考文献

- 愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告（V）（渥美古窯跡群）』1986  
 愛知県陶磁資料館『南山8号・9-A～D号窯発掘調査報告』1991  
 斎藤孝正「中世猿投窯の研究－編年に関する一考察－」『名古屋大学研究論集CI史学34』 1988  
 仙台市教育委員会『南小泉遺跡 第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集1990  
 仙台市教育委員会『王ノ壇遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡調査報告書I』仙台市文化財調査報告書第249集2000  
 多賀城市教育委員会『館前遺跡－昭和54年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財報告書第1集 1980  
 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡調査報告書－昭和58年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第5集 1984  
 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－第11次調査報告書－』多賀城市文化財報告書第50集 1998  
 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－第23・24次調査報告書－』1999  
 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書I－』多賀城市文化財報告書第60集 2001  
 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III－』多賀城市文化財報告書第75集 2004  
 田原町文化財調査会『大アラコ古窯址群』1973  
 東海市教育委員会『法秀古窯発掘調査報告書』1983  
 中野晴久「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要第3号』1994  
 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』1975  
 藤沢良祐「瀬戸古窯址群I」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』1982  
 藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要第3号』1994  
 宮城県教育委員会『山王遺跡II－多賀前地区遺構編－』宮城県文化財調査報告書第167集1995  
 宮城県教育委員会『市川橋遺跡の調査－県道泉－塩釜線関連調査報告書－』宮城県文化財調査報告書第184集 2001  
 宮城県教育委員会『市川橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第193集2003



第39図 調査区周辺の遺構模式図

## VI 自然科学分析

### 1. 宮城県多賀城市市川橋遺跡第45次調査出土木製品の樹種

大山幹成（東北大学理学研究科付属植物園）

宮城県多賀城市的多賀城政庁址の南面の低地に位置する市川橋遺跡の第45次調査において出土した8世紀～9世紀の木製品6点（同定数は7点）の樹種同定を行った。調査した木製品は、付表のとおり容器類等で、多賀城市埋蔵文化財調査センター側で、ガムクロラールで切片を封入してプレパラートを作成し、東北大学植物園で著者が同定を行った。プレパラートはMYG-5666～5672の番号を付して整理され、東北大学植物園に保管されている。

光学顕微鏡による観察の結果、一部詳細な同定が出来なかったものがあったものの、以下に記載する5樹種が認められた。

#### 同定された樹種

##### 1. スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

写真図版1：1a-c (MYG-5669)

水平・垂直樹脂道が存在せず、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在し、水平壁は平滑である。放射組織は単列で、背はかなり高くなる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に普通2個存在する。以上の形質によりスギと同定した。スギと同定されたのは馬形1点である。

##### 2. サワラ *Chamaecyparis pisifera* Seib. et Zucc. Endl. ヒノキ科

写真図版1：2a-c (MYG-5671)

水平・垂直樹脂道が存在せず、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は少ない。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は中型のヒノキ型?スギ型で、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部は水平に近く開く。1分野当たり普通2個存在する。以上の形質からサワラの材と同定した。サワラと同定されたのは曲物の底板1点である。

##### 2'. ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp. ヒノキ科

水平・垂直樹脂道が存在せず、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は少ない。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。放射組織は単列で柔細胞よりなる。分野壁孔は1分野あたり2個存在し、大きさは中型であるが、孔口の形が確認できないため、ヒノキかサワラか区別できない。そのため、これをヒノキ属の材と同定した。ヒノキ属としたものは曲物の側板1点である。

##### 3. ブナ属 *Fagus* sp. ブナ科

写真図版1：3a-c (MYG-5670)

小型で丸い道管が単独または複合して密に分布する散孔材で、管孔の大きさは年輪界に向かって徐々に減少する。道管の穿孔は单一、または横棒の少ない階段状。木部柔組織は短接線状で晩材部で著しい。放射組織は1～数細胞幅の狭くて背の低いものと非常に大型で広いものとが混在し、ほぼ同性である。以上

の形質からブナ属の材と同定した。ブナ属と同定されたのは用途不明品1点である。

#### 4. トチノキ *Aesculus trubinata* Blume トチノキ科

写真図版2: 4a-c (MYG-5668)

小型で丸い管孔が単独あるいは放射方向に数個複合して分布する散孔材。管孔の直径は年輪界に向けてやや減少し、密度は年輪のはじめと終わりで低い。穿孔は单一、内壁にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状にならぶ。道管との壁孔は小型で密に分布し、ヤナギ属のように蜂の巣状にはならない。これらの形質からトチノキの材と同定した。

トチノキの材と同定されたのは挽物2点である。

#### 5. ウコギ属 *Eleutherococcus* sp. ウコギ科

写真図版2: 5a-c (MYG-5667)

小型で薄壁の道管が接線～斜め方向に連なって配列する散孔材。道管の穿孔は单一。放射組織は異性、8細胞幅で背が高く、鞘細胞をもつ。これらの形質から、ウコギ属のうちコシアブラを除いた灌木性のウコギ属であると同定した。ウコギ属と同定されたのは刀形の1点である。

市川橋遺跡第45次調査における7点の樹種同定結果には、昨年度行った調査<sup>1)</sup>とほぼ同様の樹種選択の傾向が見られた。刀形にウコギ属を用いている点は、祭祀具がすべてヒノキを中心とした針葉樹であった昨年度の結果と異なるが、山王遺跡<sup>2)</sup>（9世紀末期～10世紀初頭）でも少量の広葉樹材（ヤナギ属、クリ）が祭祀具用途に使用されていることから、現地で入手しやすい広葉樹材を祭祀具の用材として用了いたケースもあったと考えられる。

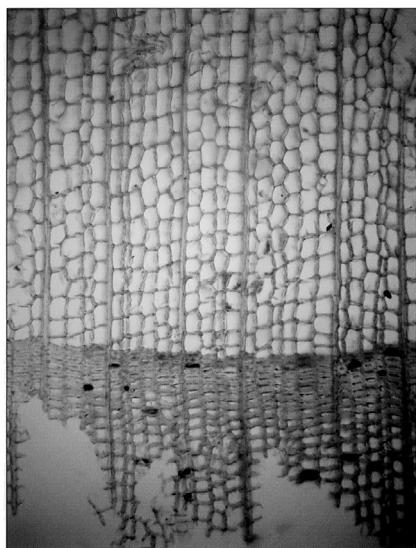
### 引用文献

- 1) 大山幹成・小川とみ・鈴木三男（2004）宮城県多賀城市市川橋遺跡出土木製品の樹種. 多賀城市文化財調査報告書第75集『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ』第三分冊, 1-38. 多賀城市教育委員会
- 2) 松葉礼子・鈴木三男（1996）宮城県多賀城市山王遺跡多賀前地区出土木材の樹種. 宮城県文化財調査報告書第170集『山王遺跡Ⅲ－仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書－多賀前地区遺物編』, 239-283, 図版67-83. 宮城県教育委員会

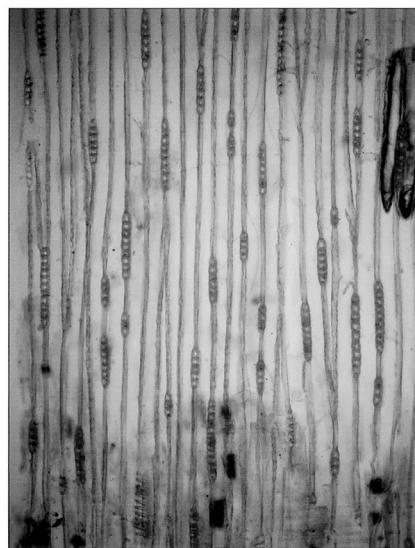
付表 市川橋遺跡第45次調査出土木製品の樹種

MYG	番号	樹種	遺物番号	遺物名	出土遺構	年代
MYG-	5666	トチノキ	R- 5	挽物・高台付皿	SD3099	8世紀後葉～9世紀
MYG-	5667	ウコギ属	R- 7	刀形	SD3119	8世紀後葉～9世紀
MYG-	5668	トチノキ	R- 8	挽物・用途不明品	SD3102	8～9世紀前半
MYG-	5669	スギ	R-10	馬形	SD3099	8世紀後葉～9世紀
MYG-	5670	ブナ属	R-12	用途不明品	SD3099	8世紀後葉～9世紀
MYG-	5671	サワラ	R-13	曲物・底板	SK3104	8世紀後葉～9世紀
MYG-	5672	ヒノキ属	R-13	曲物・側板	SK3104	8世紀後葉～9世紀

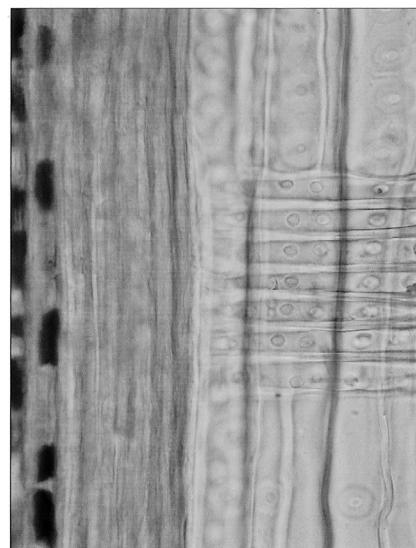
図版1



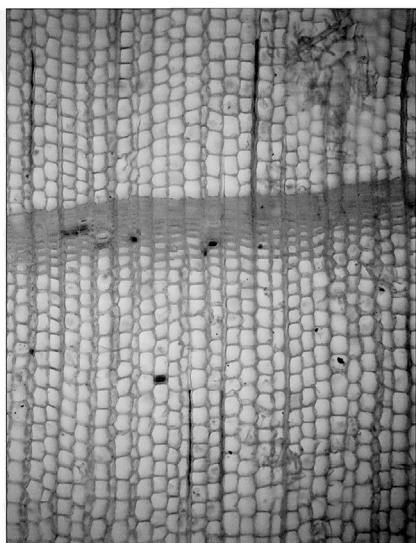
1a. スギ C×64



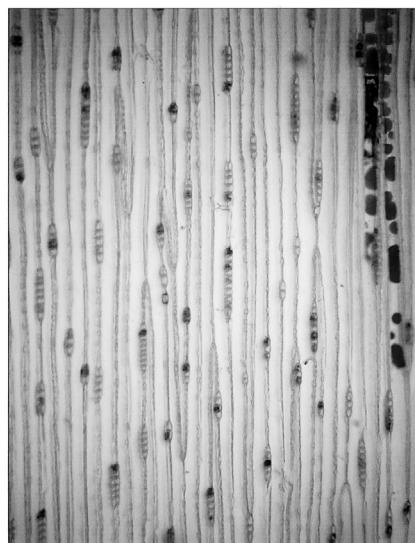
1b. スギ T×64



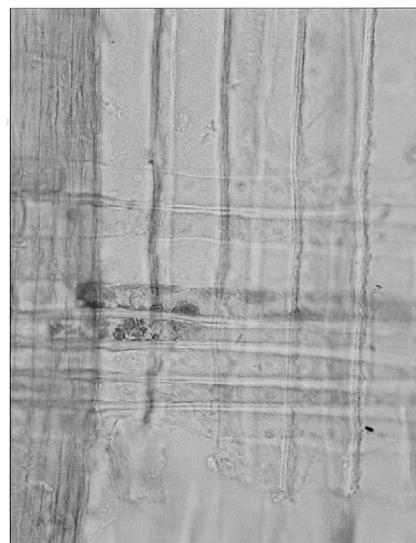
1c. スギ R×256



2a. サワラ C×64



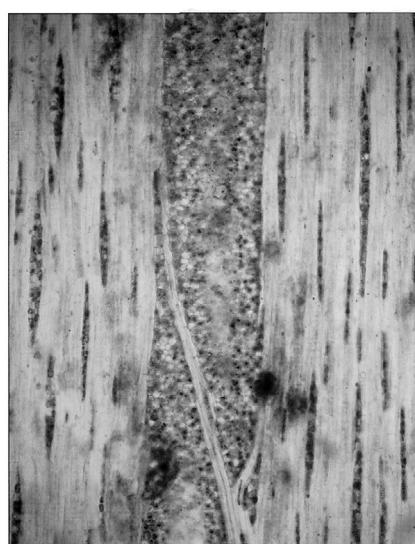
2b. サワラ T×64



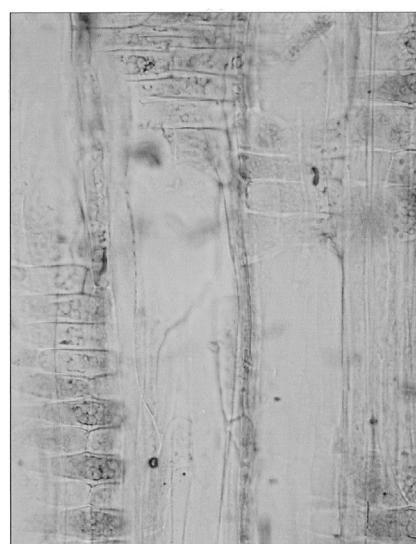
2c. サワラ R×256



3a. ブナ属 C×64



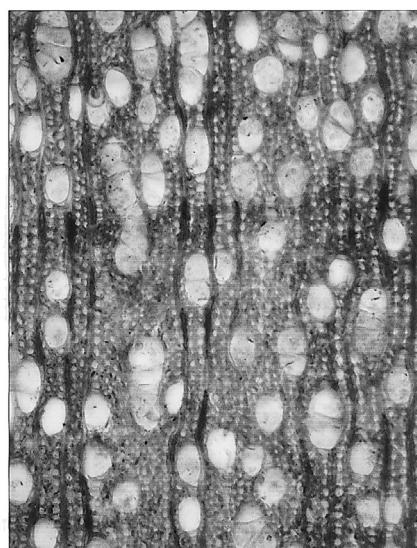
3b. ブナ属 T×64



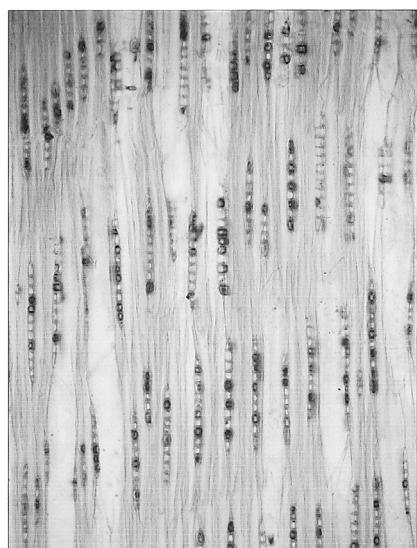
3c. ブナ属 R×256

C : 横断面（木口）、T : 接線断面（板目）、R : 放射断面（柾目）  
×のあとに数字は最終倍率を示す

図版2



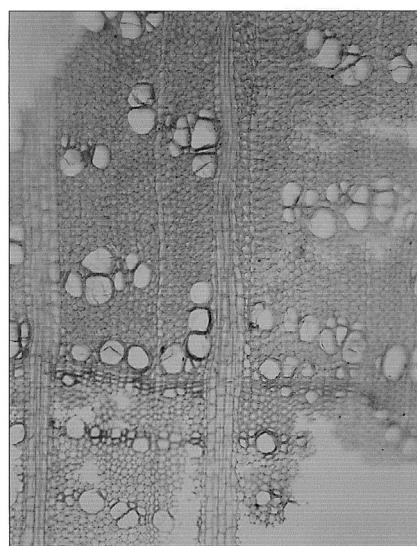
4a. トチノキ C×64



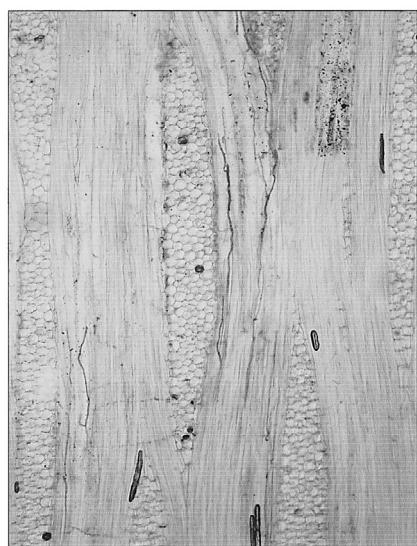
4b. トチノキ T×64



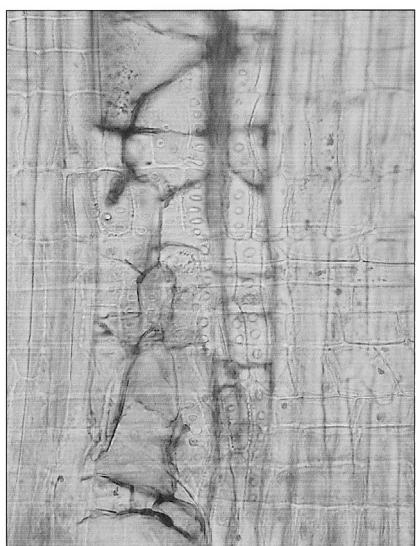
4c. トチノキ R×256



5a. ウコギ属 C×64



5b. ウコギ属 T×64



5c. ウコギ属 R×256

C : 横断面（木口）、T : 接線断面（板目）、R : 放射断面（柾目）  
×のあとに数字は最終倍率を示す

市川橋遺跡第45次調査出土木材顕微鏡写真 2

## 2. 多賀城市、市川橋遺跡第45次調査の自然科学分析 株式会社 古環境研究所

### I プラント・オパール分析

#### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

市川橋遺跡第45次発掘調査では、道路跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑とともに9世紀代とされる疑似畦畔を伴う水田跡が検出された。ここでは、当該遺構における稻作の検証ならびにその他の層における稻作の可能性を検討するためにプラント・オパール分析を行った。

#### 2. 試 料

分析試料は、調査区中央東壁において上位より灰黄色砂質土（第III a層）、オリーブ黒色粘質土（第IV a層）、オリーブ黒色粘質土（第IV c層）、黒褐色粘質土（第IV d層）および黄褐色砂質土（第6層、古代以降の地山）で採取された5点である。なお、第IV層の全てにおいて疑似畦畔が確認されている。また、第III層と第IV層の間には、10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が自然堆積しており、疑似畦畔を検出した第IV層の水田跡は9世紀代であることが確認されている。

#### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の

仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10–5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である（杉山, 2000）。

#### 4. 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、第40図に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下にプラント・オパールの検出状況を記す。

イネは第IV a層のみで検出されている。プラント・オパール密度はやや低い値である。ヨシ属は第III a層、第IV c層および第VI層で、ススキ属型は、第III a層、第IV c層、第IV d層で、シバ属は第III a層、第IV a層、第IV c層でそれぞれ検出されているがいずれも低い密度である。ネザサ節型はすべての試料で、クマザサ属型はVI層を除く各試料で検出されているが、いずれも低い密度である。

#### 5. 市川橋遺跡における稻作跡について

9世紀代とされる疑似畦畔が認められた第IV層では、イネのプラント・オパールが検出されたものの、プラント・オパール密度は1,500個/gとやや低い値であり、稻作跡の可能性を判断する際の基準とされる3,000個/gには達していない。ただし、直上に堆積する第III a層からはイネはまったく検出されていないことから、上層から後代のプラント・オパールが混入したことは考えにくい。こうしたことから、積極的には肯定できないまでも当該層において稻作が行われていた可能性が考えられる。もしここで稻作が行われていたとするならば、イネのプラント・オパール密度が低いことの要因として次のようなことが考えられる。すなわち、1) 稻作が営まれた期間が非常に短かった、2) 稻藁の多くが耕作地の外に持ち出されていた、3) 土層の堆積速度が速かった、4) 耕作土が流失したなどである。

なお、全体にプラント・オパールの検出密度は低い傾向にあることから、第VI層より第III a層にかけては、土層の堆積速度が非常に速かったのか、調査地はイネ科草本の生育にはあまり適さない環境であったのかもしれない。

#### 文 献

- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社, p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)–数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法–。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)–プラント・オパール分析による水田址の探査–。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

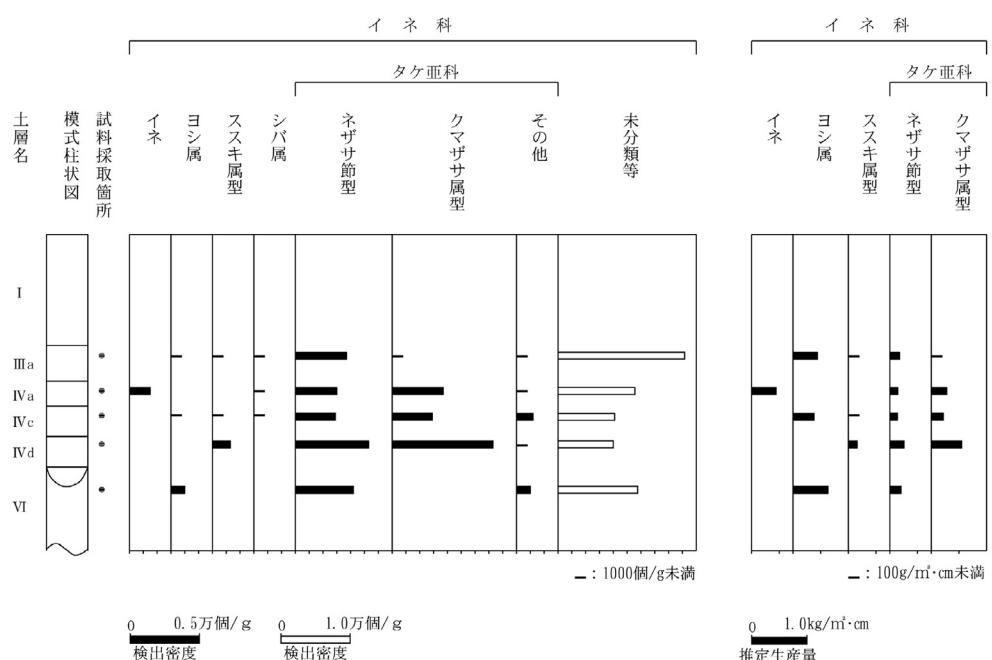
表1 多賀城市、市川橋遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

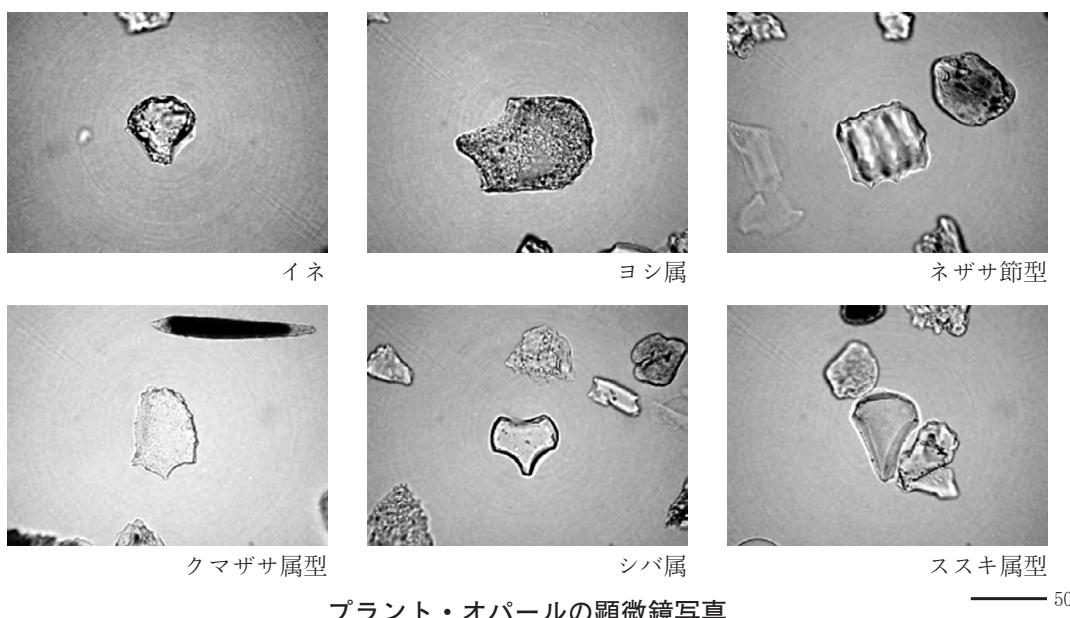
分類群 (和名・学名)＼試料	西 壁				
	III a	IV a	IV c	IV d	VI
イネ科 Gramineae (Grasses)					
イネ Oryza sativa (domestic rice)		15			
ヨシ属 Phragmites (reed)	7		6	10	
ススキ属型 Miscanthus type	7		6	13	
シバ属 Zoysia	7	7	6		
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)					
ネザサ節型 Pleioblastus sect. Nezasa type	37	30	29	53	42
クマザサ属型 Sasa (except Miyakozasa) type	7	37	29	73	
その他 Others	7	7	12	7	10
未分類等 Unknown	183	111	82	80	115
プラント・オパール総数	255	207	170	226	177

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

分類群 (和名・学名)＼試料	西 壁				
	III a	IV a	IV c	IV d	VI
イネ Oryza sativa (domestic rice)	0.44				
ヨシ属 Phragmites (reed)	0.46	0.37	0.66		
ススキ属型 Miscanthus type	0.09	0.07	0.16		
ネザサ節型 Pleioblastus sect. Nezasa type	0.18	0.14	0.14	0.25	0.20
クマザサ属型 Sasa (except Miyakozasa) type	0.06	0.28	0.22	0.55	



第40図 市川橋遺跡におけるプラント・オパール分析結果



プラント・オパールの顕微鏡写真

— 50 μm

## II 花粉分析

### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。ここでは、市川橋第45次調査における植生ならびに環境の復元をもとに花粉分析を行った。

### 2. 試 料

試料は、上位より第IIIa層（灰黄色砂質土）、第IVa層（オリーブ黒色粘質土）、第IVc層（オリーブ黒色粘質土）、第IVd層（黒褐色粘質土）、第VI層（黄褐色砂質土）の計5点であり、いずれもプラント・オパール分析に供されたものと同一試料である。

### 3. 方 法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

### 4. 結 果

#### （1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉27、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉17、シダ植物胞子2形態の計48である。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第41図に示す。主要な分類群は写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、1分類群が検出された。

以下に出現した分類群を記す。

#### 〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亞属、マツ属单維管束亞属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、

サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属ムクノキ、サンショウ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、シナノキ属、ミズキ属、トネリコ属、ツツジ科

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、ウコギ科

#### 〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、キク亜科、ヨモギ属

#### 〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

#### 〔寄生虫卵〕

回虫卵

なお、回虫 *Ascaris (lumbricoides)* は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられ、卵には受精卵と不受精卵がある。遺跡の堆積物の分析では、長期に及ぶ堆積年数や薬品処理の影響により、受精卵と不受精卵の区別は不明瞭である。比較的大きな虫卵で、およそ $80 \times 60 \mu\text{m}$ あり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

#### （2）花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より3帯の花粉分帯を行った。

##### 1) I 帯（第VI層）

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が高率に出現し、他にブナ属、マツ属複維管束亞属、クリ、ハンノキ属などが出現する。草本花粉では、カヤツリグサ科が優占し、ほかにはイネ科、ヨモギ属などが低率に出現する。

##### 2) II 帯（第IVc層～第IVd層）

下位より草本花粉の占める割合が増加する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、マツ属複維管束亞属、クリ、ハンノキ属が低率に出現する。樹木花粉と草本花粉を含むものでは、クワ科-イラクサ科が増加し、草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優占し、チドメグサ亜科が伴われる。第IVc層でわずかではあるが回虫卵が検出された。

##### 3) III 帯（第IIIa層～第IVa層）

下位より草本花粉の占める割合が増加する。樹木花粉は下位よりさらに減少し、コナラ属コナラ亜属などがごく低率に出現する。樹木花粉と草本花粉を含むものでは、クワ科-イラクサ科が増加し、草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が優占し、アカザ科-ヒユ科が下位より増加する。第IIIa層でわずかではあるが回虫卵が検出された。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉分帶に沿って下位より植生の復元を試みる。

### 1) I 帯 (第VI層)

堆積地周辺の森林植生は、コナラ属コナラ亜属を主要要素とし、クマシデ属ーアサダ、クリ、ブナ属などで構成される落葉広葉樹林が分布し、二次林要素であるマツ属複維管束亞属などの針葉樹や、湿地林を構成するハンノキ属、トチノキ、トネリコ属などの広葉樹が分布していた。草本花粉では、水生植物を多く含むイネ科、カヤツリグサ科が比較的多く検出されており、これらの生育する湿地の環境が考えられる。

### 2) II 帯 (第IVc層～第IVd層)

樹木花粉の占める割合が減少し、人里雑草であるアカザ科－ヒユ科、チドメグサ亜科が出現し、人為環境に多いクワ科－イラクサ科、キク亜科、ヨモギ属などが多くなることから、日当たりが良く比較的乾燥した開地の拡大が考えられる。水田雑草の性格をもつオモダカ属、ミズアオイ属は検出されたが、栽培種を含むイネ属型は検出されなかったため、水田が営まれていたかどうかは判断できない。

### 3) III 帯 (第IIIa層～第IVa層)

樹木花粉の占める割合がさらに減少し、クワ科－イラクサ科、アカザ科－ヒユ科が多くなることから、開地が拡大し、より乾燥した環境が考えられる。疑似畦畔が検出された第IVa層では、下位の分帶同様、水田雑草の性格をもつオモダカ属、ミズアオイ属は検出されたが、栽培種を含むイネ属型は検出されなかたため、水田が営まれていたかどうかは判断できない。

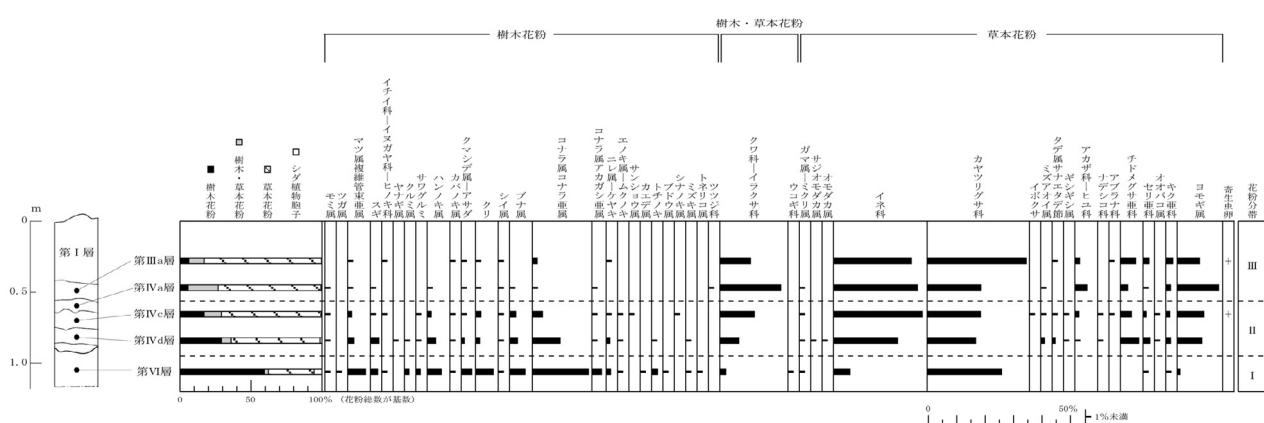
## 6. まとめ

市川橋遺跡第45次調査において花粉分析を行い植生および堆積環境について検討を行った。その結果、第VI層の時期には、カヤツリグサ科を主にイネ科などの草本が生育し、湿地も分布する環境が示唆された。周辺はコナラ属コナラ亜属を中心とした落葉広葉樹林が分布し、林縁の湿地にはハンノキ属などが湿地

林を形成していた。第IVc層～第IVd層の時期になると、森林が減少し、クワ科－イラクサ科、アカザ科－ヒユ科、チドメグサ亜科、ヨモギ属などの人里植物が生育する開地の環境が拡大する。第IIIa層～第IVa層の時期には、さらに樹木が減少し、開地が拡大した。疑似畦畔が検出された第IV層では、水田雑草の性格をもつオモダカ属、ミズアオイ属は検出されたが、栽培種を含むイネ属型は検出されなかったため、水田が営まれていたかどうかの判断には至らなかった。

## 参考文献

- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物・医動物学、新版臨床検査講座、8、医歯葉出版、p. 9-55。金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
- 金原正明 (1999) 寄生虫、考古学と動物学、考古学と自然科学、2、同成社、p.151-158。
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫、藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－、奈良国立文化財研究所、p.14-15。
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学研究館収蔵目録第5集、60p。
- 中村純 (1973) 花粉分析、古今書院、p.82-110。
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13、p.187-193。
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30。
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。
- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

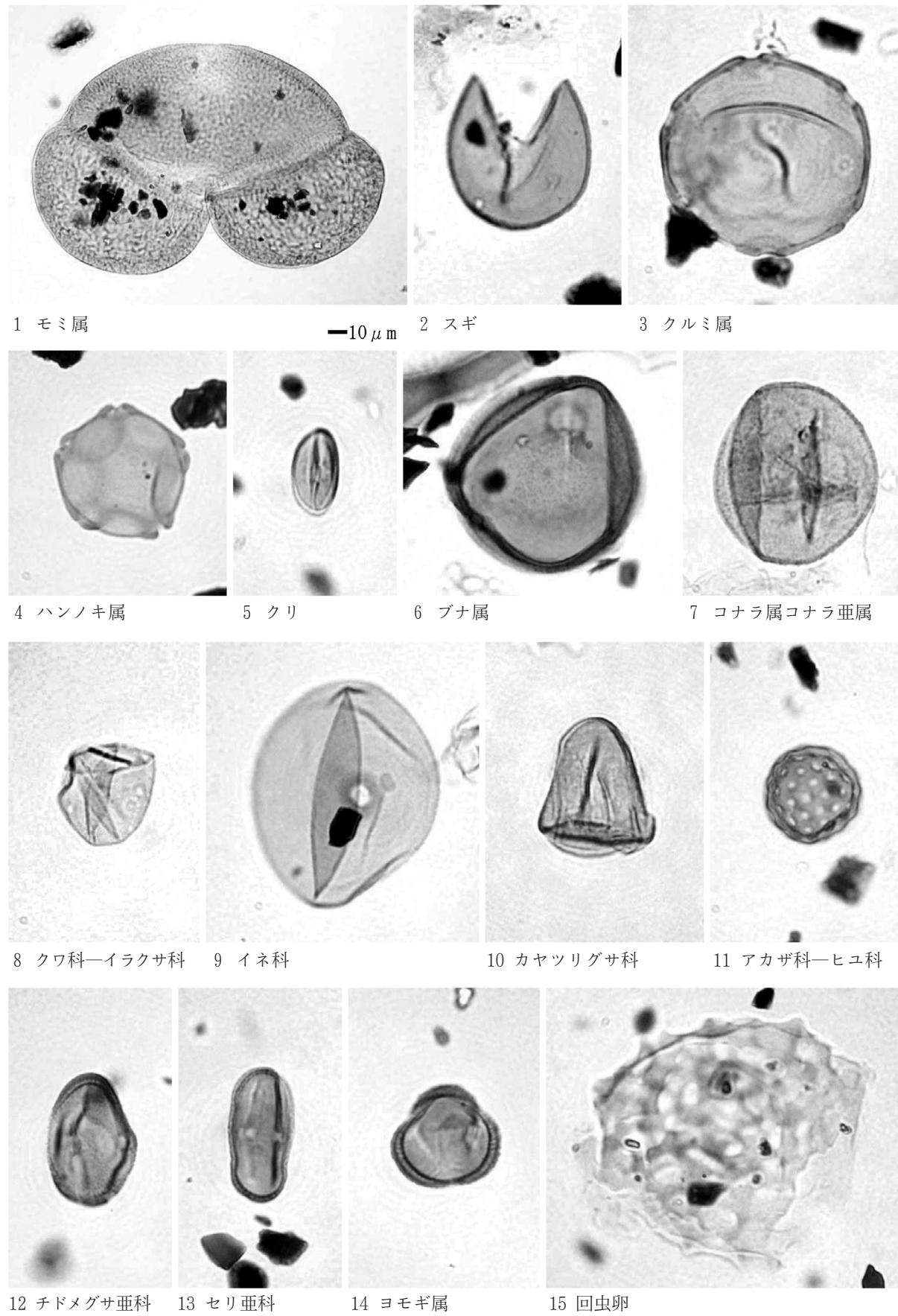


第41図 市川橋遺跡第45次調査における花粉ダイアグラム

表2 市川橋遺跡第45次調査における花粉分析結果

分類	群	第IIIa層	第IVa層	第IVc層	第IVd層	第VI層
学名	和名					
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Abies</i>	モミ属	1	3	3	1	
<i>Tsuga</i>	ツガ属				2	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	2	1	5	10	24
<i>Pinus subgen. Haploxyylon</i>	マツ属单維管束亜属				1	2
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1	1	14	10
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1		1		1
<i>Salix</i>	ヤナギ属				2	
<i>Juglans</i>	クルミ属				2	6
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			2	3	6
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		1	5	14	19
<i>Betula</i>	カバノキ属	1		3	2	3
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	2	1	2	5	14
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2	2	7	7	24
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1	1	2	1	1
<i>Fagus</i>	ブナ属		2	8	13	21
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	4	1	13	45	74
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1	3	4	13
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	2		3	6	6
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			2	1	1
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウウ属				1	
<i>Acer</i>	カエデ属					1
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ				3	8
<i>Vitis</i>	ブドウ属					1
<i>Tilia</i>	シナノキ属				1	
<i>Cornus</i>	ミズキ属				1	1
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属					1
Ericaceae	ツツジ科			1		
Arboreal • Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	26	50	44	31	8
Araliaceae	ウコギ科					3
Nonarboreal pollen	草本花粉					
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属		1	1	2	1
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属				1	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				1	
Gramineae	イネ科	66	69	113	104	22
Cyperaceae	カヤツリグサ科	84	44	68	79	100
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ			1		
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属			1	2	6
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1		2	5	
<i>Rumex</i>	ギンギン属			1	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザ科-ヒユ科	4	10	5	3	
Caryophyllaceae	ナデシコ科			1	1	
Cruciferae	アブラナ科	2		2		
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	13	6	14	30	
Apioidae	セリ亞科	5	1	4	11	1
<i>Plantago</i>	オオバコ属			2	1	
Asteroideae	キク亜科	6	4	5	8	2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	19	34	34	40	4
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	1	2	1	6	22
Trilate type spore	三条溝胞子			1	1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	15	13	62	137	240
Arboreal • Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	26	50	44	31	11
Nonarboreal pollen	草本花粉	200	170	255	293	130
Total pollen	花粉総数	241	233	361	461	381
Unknown pollen	未同定花粉	4	3	5	5	17
Fern spore	シダ植物胞子	1	2	2	7	23
Helminth eggs	寄生虫卵					
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵	1		1		
Total	計	1		1		
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

市川橋遺跡第45次調査の花粉・寄生虫卵



花 粉 写 真

—10  $\mu$ m



1区遺構検出状況 南より



1区完掘状況 南より

写真図版 1



2区遺構検出状況 南より



2区完掘状況 北より



3区遺構検出状況 南より



3区完掘状況 北より

写真図版 3



2区SX3110北2道路跡 西より



2区SB3127建物跡 東より



1区東壁堆積状況



2区東壁堆積状況



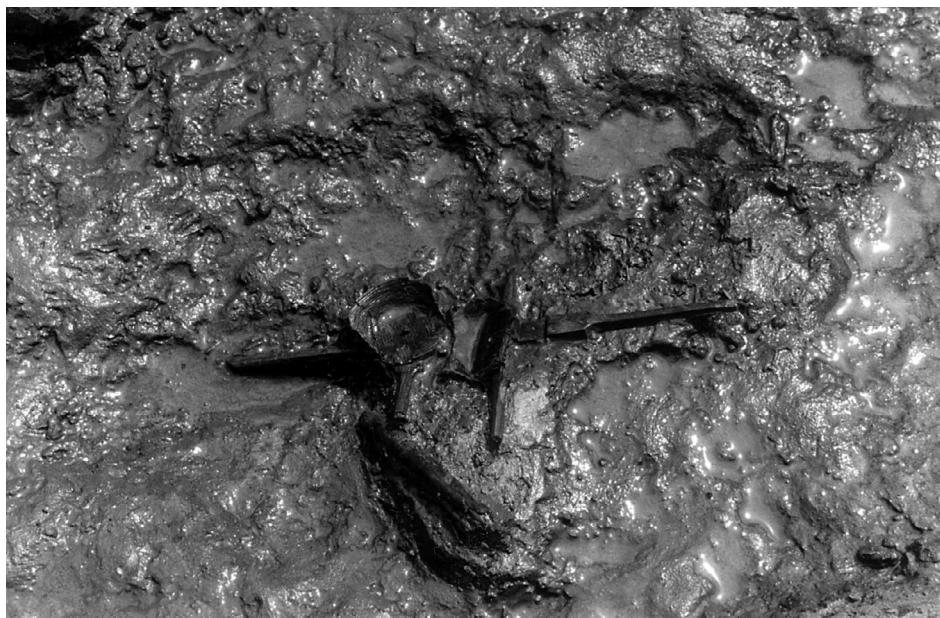
3区西壁堆積状況



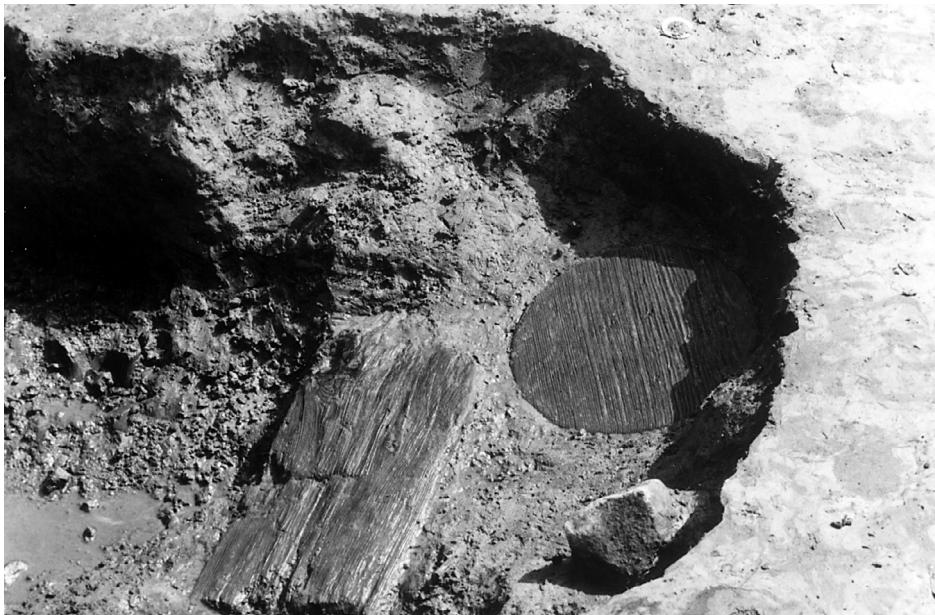
SD3119籠出土状況



S K3108用途不明木製品出土状況



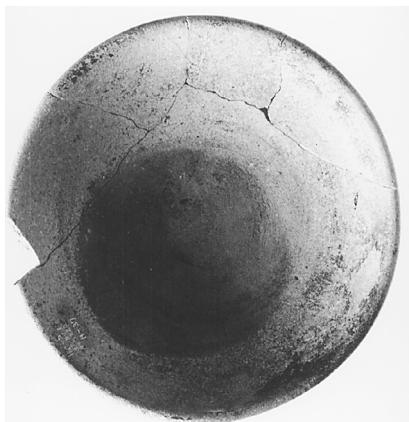
S K3108用途不明木製品出土状況



SK3114曲物出土状況



SK3114馬骨出土状況



1 須恵系土器高台付杯（第27図1） S : 1/2

2 須恵系土器高台付皿（第28図10） S : 1/2

3 須恵系土器高台付杯（第31図4） S : 1/2

4 須恵系土器高台付杯（第28図9） S : 1/2

5 a 山茶椀小椀（第28図4） S : 1/2

5 b 山茶椀小椀（第28図4） S : 任意



1



3



4



2



5



6

1 曲物（第34図1） S : 1/3

2 刀形（第33図4） S : 1/3

3 用途不明品（第33図2） S : 1/3

4 用途不明品（第33図3） S : 1/3

5 円形曲物（第33図1） S : 1/3

6 馬形（第32図1） S : 1/3

## VII 市川橋遺跡第四五次調査出土の木簡について

本節では、第四五次調査で出土した一点の木簡について述べる。

### 第一二〇号木簡 (357)×69×7 019 SD3099・2層

・「修理所	送兵士	馬庭事	冊	□	□	□
	鳥取部	敷成	丈	子醜	麻呂	部
火長	□	阿刀部	廣守	磯部	矢田部	田公
大伴	□	綿麻呂		□	和部	□
占部	浦子				□	成カ
大伴	麻呂					

### 出土地 (7頁参照)

北一道路の南側溝、SD三〇九九から出土した。遺構自体は、堆積層との関係から十世紀前葉のものとされる灰白色火山灰よりも古く、下限をそれ以前に求めることができる。また、ロクロ調整された土師器が出土していることから、概ね上限を八世紀後葉以降に求められよう。

一方、木簡のウラ面には「大伴」のウジ名がみえる。大伴氏は弘仁十二年(八二一)、淳和天皇の諱大伴を避けて、伴氏と改姓していることから、木簡の年代はそれ以前といえる。遺構と出土木簡の年代は相違しない。

### 形 状

短冊形。上端は面取りを施し原形をとどめるが、下端は欠損している。左右両側面はそれぞれ一部欠損するが、原形をとどめている。ウラ面を上、オモテ面を下にした状態で出土したため、ウラ面は材の傷みが激しい。

### 内 容

本木簡は、一行目の記載内容から、文書木簡で送り状である。一行目は事書である。初句「修理所」は差出者にあたり、「送兵士」とある。続く「馬庭」は、諸史料によれば人名・地名・場所などの意



ウラ面



オモテ面

S : 1/2

第120号木簡

味をもつ。たとえば「馬庭頓宮」（『平安遺文九』所収、「八幡大菩薩

宇佐宮司解案）、「諸楽京の馬庭山寺」（『日本靈異記』中巻・第三八

縁）等の用例は地名であり、「馬庭但馬守」（『大日本古記録 家わけ』

益田家文書之一所収、「源頼持・藤原詮世連署書状」の例はウジ名で

あろう。また、「殿暦」天仁二年（一一〇九）九月六日条には「院栗

毛（去々年余自レ院給レ之。競馬庭可レ謂俊足。）（◇は割

書を示す、返り点は筆者）とある。この場合は、馬の調習や競技をお

こなう場所を示し、「馬場」と同義であるとみてよいだろう。本木簡

の場合、事書のあとに動員された兵士の名が列記されていることから、

事書中の「馬庭」が兵士の名とは考えにくい。また、地名を完全に否定することはできないが、積極的に固有地名であると判断することもできない。したがって、現段階では場所を示すととらえるのがもっとも妥当であろう。兵士の送り先、木簡の宛先と解釈できる。

事書より下は解読が困難である。一字目は縦線状の汚れが何箇所かみえる。したがって「二」とも考えられるが、そのうちの一本を縦画と判断した。二文字目は「卅」で間違いないと思われるが、一・三・四文字目とくに、三・四文字目よりもかなり筆が太く、やや右に偏して記されている。四文字目は「部」の可能性があるが、判然としない。

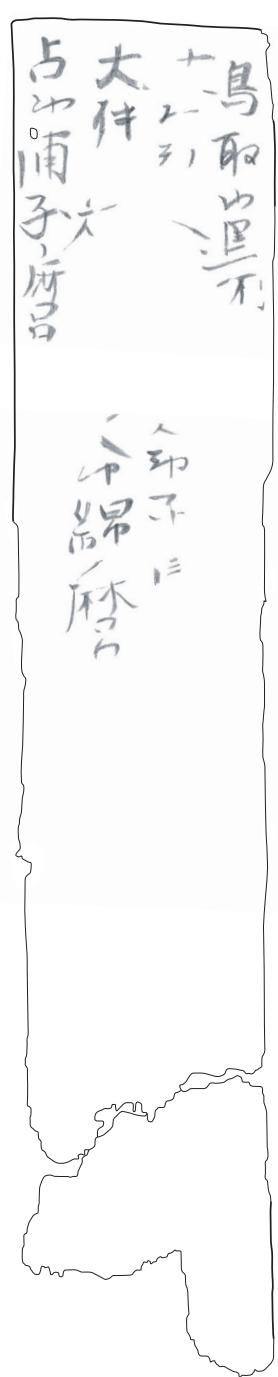
二行目以降、ウラ面にわたり人名が列記されている。「丈部」「鳥取部」「磯部」「占部」などのウジ名は、多賀城内外で出土する文字資料にしばしばみられるものである。「修理所」より送られた兵士の名であろう。まず「火長（某）」が記され、その下二段目からは二行に分けて、八人の名が記されている。二段目から四段目までの六人には鉤形の合点が付されていることが確認できる。五段目の二人は欠損部にあたるため、合点は確認できない。なお、火長とは兵士十人の長であ

るが、そのために一段上に記載されたのかもしだれない。

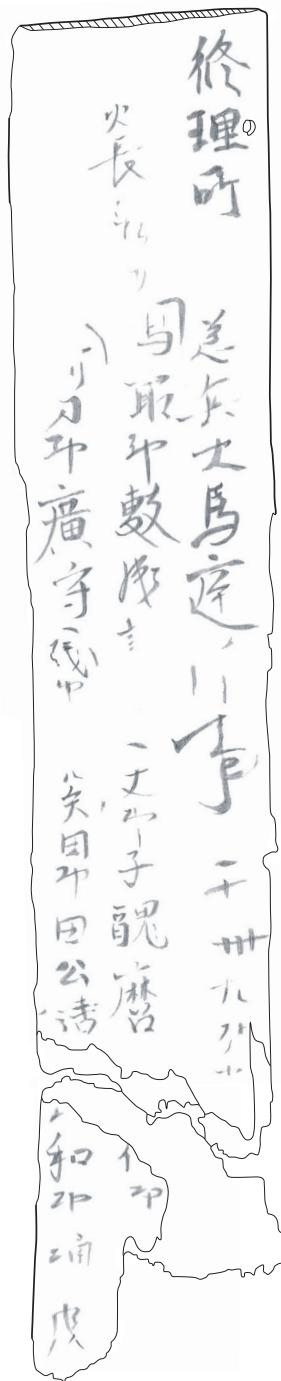
オモテ面で確認できる兵士の人数は現況で九名である。ただし、兵士十人＝一火の長である火長という職名が記載されていることから、十人で一単位と考えるのが自然だろう。残りの一名については、不参のため記載がないとも考えられるが、名前と人物の照合の印と考えられる合点が付されていることから、そのようには考えがたい。一行目事書の下四文字目が「部」であるとすれば、ウジ名の一部とも考えられる。あるいは、さらにその下の空白部分に「□部」、「□和部」と同じ高さで記載された可能性もあるう。

ウラ面は、材の傷みが激しいため、実測図および积文では示していないが、他にもわずかな墨痕が確認できる。六人以上の名が記載されていた可能性はあると思われる。一段目は四行からなる。オモテ面が火長を含め五段で記載されていることを考慮すれば、ウラ面も四行五段の可能性がある。現況からすれば全くの推測となるが、計二十人の記載だったことになる。

「修理所」について、本木簡から詳細を知ることは難しいが、文字どおり、施設の造営や修復を目的に設置されたものであろう。そこに兵士が動員されたことについては次のように考えることができる。すなわち、兵士は有事には征討に従うが、養老軍防令・宮繕令などを参考すると、平時にも様々な任務が課せられていることが知られている。たとえば兵庫・城隍・堤防・器材などの修理、兵庫・関などの守衛、外国使の送迎、罪人の護送、軍馬の飼育などである。また、『続日本紀』などにも、天皇行幸の護衛にあたった記事がしばしばみえる。修理に限っても、令で規定された他に、『続日本紀』天平宝字五年（七六一）十一月丁酉条には「（略）皆免三年田租、悉赴弓馬」。兼



ウラ面



オモテ面

S : 1/2

第120号木簡

調「習五行之陳」。其所レ遺兵士者、便役レ造「兵器」。とあり、實際に兵器の造作に兵士を使役している。また、『続日本後紀』承和十年

(八四三)四月十九日条では、陸奥鎮守府將軍の言として「(略)請。

射下健士、准<sub>二</sub>兵士下兵、同令レ役修<sub>二</sub>理城隍<sub>一</sub>。許レ之<sub>一</sub>。」と、白丁出身の健士を兵士下兵と同じく城隍の修理に充てるとある。したがって、本木簡も兵士が「馬庭」の修理・造作に当たるために「修理所」から派遣され、かつ參集者は照合され、合点が付されたことを示すと考えられるであろう。

本木簡は、南北太路から東へ約五十メートルほど離れた北<sub>一</sub>道路南側溝から出土した。多賀城南面に広がる方格地割りと関係が深い。しかし、本調査区周辺は未調査区も多く、詳細は今後に期すことになるが、九世紀から十世紀にかけての北<sub>一</sub>道路周辺は水田が広がっており、居住域としては適さない場所であったと考えられる。このような場所に「馬庭」が設置されたのだろう。

第一一一号木簡 091 SD3102 2層  
久□□

削屑。SD11101東西溝跡から出土した。ほかに出土した遺物はない。  
内容についても不明とせざるを得ない。



S : 1/1

第121号木簡



報告するにあたって、国立歴史民俗博物館 平川南氏にご教示いただいた。記してお礼申し上げる。  
使用した訣文の符号や型式番号は、木簡学会が定め、『木簡研究』等で使用している形式にできるだけ従った。  
木簡番号については、市川橋遺跡出土木簡の一連の番号を付している。

## 報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせき							
書名	市川橋遺跡							
副書名	第45次調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	鈴木孝行・相澤正信・廣瀬真理子							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号							
発行年月日	西暦2005年3月10日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市川橋遺跡	宮城県 多賀城市 市川字館前・ 浮島字矢中地内	42099	18008	38度 17分 53秒	140度 59分 32秒	20040531 ( 20040922	1,180 m <sup>2</sup>	道路拡幅、 公共下水 道工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
市川橋遺跡	古代都市	奈良・平安	道路跡 掘立柱建物跡 溝跡、土壤、 水田跡	土師器、須恵器、須恵系土器、 瓦、山茶碗、灰釉陶器、木製品（木簡、挽物、馬形、刀形、 曲物）、金属製品（跨帶金具、 銅鉢、鐵鏃）			「修理所」・「馬庭」とかかれた 木簡が出土した。	

---

---

多賀城市文化財調査報告書第76集

## 市 川 橋 遺 跡

— 第 45 次 調 査 報 告 書 —

平成17年3月10日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
多賀城市中央二丁目27番1号  
電話 (022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会  
多賀城市中央二丁目1番1号  
電話 (022)368-1141

印刷 有限会社 工 陽 社  
宮城県塩竈市尾島町8番7号  
電話 (022)365-1151

---